

この街の名前は何ですか？

神山甚六

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「この街は狙われている!」

木組みの家と石畳の街で、地球侵略をもくろむ耳長の陰謀と戦い続けた男の話。

- ※ 内容はあらすじと異なる場合があります ※
- ※ 現在加筆修正中

目次

セーブ・ポイントだとおもったら、ラスボスがいた件（その1）	1
セーブ・ポイントだとおもったら、ラスボスがいた件（その2）	12
セーブ・ポイントだとおもったら、ラスボスがいた件（その3）	20
安易なフラグは、あなたの健康を損なうおそれがあります（その1）	33
安易なフラグは、あなたの健康を損なうおそれがあります（その2）	41
安易なフラグは、あなたの健康を損なうおそれがあります（その3）	50
勇敢な兵士と勇敢な將軍の素質は異なるし、優秀な選手が名指導者になるとも限らない（その1）	58
勇敢な兵士と勇敢な將軍の素質は異なるし、優秀な選手が名指導者になるとも限らない（その2）	65
勇敢な兵士と勇敢な將軍の素質は異なるし、優秀な選手が名監督になるとも限らない（その3）	74
ある映画の中で主人公の母親が「黒は女を美しく見せる」と言ったらしいが、賢さについては触れていなかったと思う（その1）	85
ある映画の中で主人公の母親が「黒は女を美しく見せる」と言ったらしいが、賢さについては触れていなかったと思う（その2）	94
ある映画の中で主人公の母親が「黒は女を美しく見せる」と言ったらしいが、賢さについては触れていなかったと思う（その3）	105

- アルコールは二十歳になってからだけど、そもそも飲めない奴だっている (その1) 119
- アルコールは二十歳になってからだけど、そもそも飲めない奴だっている (その2) 129
- アルコールは二十歳になってからだけど、そもそも飲めない奴だっている (その3) 138
- 夢の中では何でも出来るといだけれども、目覚めたら大抵は忘れてい (その1) 149
- 夢の中では何でも出来るといだけれども、目覚めたら大抵は忘れてい (その2) 155
- 夢の中では何でも出来るといだけれども、目覚めたら大抵は忘れてい (その3) 163
- 褒められもせず、苦にもされない。そういう人に私はなりたくない (その1) 171
- 褒められもせず、苦にもされない。そういう人に私はなりたくない (その2) 178
- 褒められもせず、苦にもされない。そういう人に私はなりたくない (その3) 184

セーブ・ポイントだとおもったら、ラスボスがいた件 (その1)

それまで、自分の年齢を意識したことなどなかった。考えたところで、年齢欄に記入する数字が増えるわけでも、減る訳でもない。

まして、社会人として日々の生活に追われる中、他に考えるべき問題は山のようにあるのだから。

であるというのに、ふとした瞬間、三十数余年という自分自身の費やしてきた時間を振り返り、とりとめもなく思考を巡らせている「私」がいることに気が付いたのは、つい最近のことである。

自分の年齢を考えると、自分の人生を振り返るということ。

そして恥の多い、むしろ耻しくない「私」の過去に、頭を抱えて愕然とする。

人生は決断の連続であるというが、「私」の場合、その分類には当てはまらないだろう。

徒な当惑と逡巡により、いくつもの決断を先送りにし、惰性に流れて生きてきたからだ。

私の両親に言わせれば、「年齢だけ重ねても、餓鬼は餓鬼」ということになる。

何か気の利いた反論のひとつもしたいところではあるが、ぐうの音も出ない事実なのだから、なおさらどうしようもない。

小学生の頃は中学生が大人に思えたものであり、中学に進むと高校生は外国人のように感じたものだ。

九年間の義務教育過程を終えて高等学校に入学する頃になると、自分自身の成長の乏しさから、ようやく大学生というのは阿呆の集団ではないかという認識に思い至る。

その阿呆な四年間の中に、高校生活では得られない何かがあるのではないかという淡い期待も、大学とは名ばかりのモラトリアム集団に入るや否や、雲散霧消してしまった。

青い鳥を探すことが幻想であったという現実を突きつけられながら、それでもなお、親の脛を嚙り倒した四年間を、時間と自由の無駄使いに費やす始末。

つける薬がないとは、この事である。

自らの救いがたい間抜けさに失望しつつも、自分を欺けるだけの小賢しさだけは人並みに身につけていた私は、ろくな目的意識もないまま、何となく就職活動らしきものをした。

その結果、大学四年間で学んだ学問とは、一切関係のない会社の世話になることになった。

このような意識の低い男を雇うとは、なんと見る目がない会社なのか。行く末が不安であると、現実逃避染みた空想に耽ってはみたものの、齧り倒して今にも折れそうになった脛の持ち主である老いたる両親の喜んだ顔を見ると、内定辞退という言葉は、とてもではないが言い出せなかった。

かくして自覚も覚悟もないまま、私は社会の荒波に放り出された。以来、毎年4月になるたびに情報媒体から、なんとかの「つ覚えのように繰り返される『希望にあふれた新生活』という言葉に、己が胸中においてあらん限りの罵詈雑言を浴びせながら、だらだらと年齢を重ねる日々を過ごしてきたというわけだ。

そんな恥だらけの人生の出発点である私の大学時代だが、同時に私にとっては親元を離れ、記念すべき一人暮らしを開始した時でもある。

金銭的自立こそ、まだ遙か先であったが、何であれ初めての体験というものは、忘れがたいものである。

私が腐れ大学生として一人暮らしを始め、短い中断を挟んで社会人となった今も住民票を登録している街の名前は

はつきりと思いつけない。

いつになったら完結するのかわからない某ライトノベルの主人公の本名ではあるまいし、何を言っているのかとお叱りの声を受けそうだが、これは私の記憶力に問題があるのではないことを、あらかじめ申し上げておきたい。

『木組みの家と石畳の街』という、有名な宣伝文句をお聞きになったことがあるだろうか？

どこぞのコピーライターが考えたと言われる、この街のあまりにも有名な観光客向けのキャッチコピーが、この問題の根源である。つまり、あまりにしつこく何度も繰り返されるため、この街では社会的には無論、日常生活でもキャッチコピーが正式名称として通用してしまうという奇妙な逆転現象が発生しているのだ。

そんな馬鹿なことがあるかと思われるだろうが、これが事実なのだからしょうがない。

私が実際に居住して、実際に体験しているのだから間違いない。

公共機関や郵便局で住所を書く際には支障がないのに、口に出すと何故か（私も含めて）、このあまりにも有名なキャッチコピーで呼んでしまうほどに、周知が徹底されている。

どう考えても正式名称の方が短く呼びやすいはずなのに、公共媒体のCMから市中の名も無き民草まで、口を揃えてこの長つたらしいコピーで呼ぶというのだから、これは尋常ではない。

暇を持て余していた学生時代、私はひよつとすると、この街中にわんさかとあふれている性欲旺盛な野生動物の長い2本の耳から怪電波が出ており、街中の住民を洗脳しているのではないかという持論について、酒の席で熱く語ったことがある。

すると数少ない友人から知人へと扱いを下げられ、学内では腫れ物扱いされる――太平洋に沈んだという伝説の大陸の名前を冠した雑誌を片手にしたオカルト研究会から熱心な誘いを受ける結果となった。

解せない。

おのれ耳長め、貴様ら畜生の陰謀に屈してなるものかと、私は「木組みの家と石畳の街を正式名称で呼ぶ会」なる同好会を立ち上げようとしたが、少なくなつた知人と翌年の授業計画の計算をしていたところ、必要な単位計算の間違いを指摘されたことで、その計画は御破算となった。

おかげで3年次にはあらゆるバイトを辞めて、まるで真面目な苦学生のようにあちらこちらの授業に出席しまくる羽目になった。

おそらくこれも耳長の壮大な陰謀の一部なのだろう。いつか皮を剥いで捌いてから鍋の具にしてやると、私は授業に耳を傾けながら、ノートに耳長への復讐計画を書き連ねているうちに、同好会計画と共に街の正式名称問題もすっかり忘れてしまったというわけだ。

前置きが長くなったことを謝罪する。

だが、これは、私の生まれつきの性格が素直で謙虚なものだからではなく、頭を下げるのはタダだという俗物根性からくる謝罪である。

どうか琵琶湖のような透明度と器の持ち主ならば、ご寛恕いただきたい。

大体にして一人語りは独りよがりになるものである。

人生は自分の主観でしか、自分の経験や考えを語れないものだ。

故に今から語る私の七転八倒にして抱腹絶倒、波乱万丈の阿鼻叫喚な冒険活劇も、あくまで私の主観によるものであることを、あらかじめ断っておきたい。

先の四字熟語は咄嗟に思いついたものを並べただけであるので、特に意味はない。

所詮、その程度の内容であると御笑納頂ければ幸いである。

なお、この話は私の四十年に満たない恥の多い人生の一部になるが、私にとっては過去であり未来であり……そして現在の話になるのだろう。

*

私が喫茶店『ラビット・ハウス』を最初に訪問したのは、この『木組みの家と石畳の街』にある私立大学に通うために引越してきた3月中旬であったと記憶しているが、まずは訪問に至るまでの経緯について、時系列も含めて簡単に説明しておこう。

今ではすっかり根性のねじ曲がった卑屈な笑みが似合うと、ご近所で評判の薄汚い大人と成り果てた私だが、私にも新生活への希望にあふれた時代はあった。地元の高等学校の卒業式直後、懐かしき我が生家と両親に別れを告げ、「木組みの家と石畳の街」という新天地への引越し作業も一段落した。引越し業者の段ボールと家財道具を片付

けて、その日に自分が寝るスペースを部屋のなかに確保した私は、俄かにこの街を散策してやろうという気分になった。

今から振り返れば根っからのインドア気質で、悪魔^{ブロッコリー}の食材と同じくらい運動が大嫌いな私が、そのような「冒険」を試してみようと考えたこと自体が驚愕に値する。今から振り返って考えてみれば、親の目の届かない一人暮らしに浮かれていた以外にも、この街の非現実的な空気が雰囲気、私の精神と思考に影響を与えていたのかもしれない。

恐るべきは「木組みの家と石畳の街」である。聞くところによれば「空気の缶詰」なる商品があるそうだが、あの街の空気を圧縮して大々的に売り出せば、おそらく世界はもつと平和になるに違いない。

閑話休題

「服に金を使うぐらいなら、食事をたらふく食いたい」がモットーの私は、某服飾量販店が東南亜細亜や印度亜大陸の安い労働力をふんだんに使った成果たる大量生産の既製品を愛用していた。

お前のモットーなど、どうでもよいという声が聞こえてきそうだが、これがひよつとすると話の伏線になるかもしれないのでご容赦願いたい。ひよつとすると伏せられたまま永遠の眠りについたままになるかもしれないが、それはご愛嬌というものである。

ともかく私は自らの財布と携帯をジーンズの左右のポケットにそれぞれつつこみ、白いポロシャツにベージュ色のジャケットを羽織るという、いかにも青春を謳歌しているがごとき大学生の格好をしてから、外に通じる平屋のアパートの戸を開いた。

早春というにはまだ寒い日が続く、昼下がりであった。

自分の体に吹きつける花の香りに満ちた冷たい風に体を震わせつつ、特に目的のない散策を始めるために、私は目の前の石畳に、記念すべき新生活の第一歩を踏み出した。これという感慨を抱くことはなかったが、ただ鼻腔をくすぐる花粉の香りだけが、妙に印象に残っている。

車両専用道路と河原や公園を除けば、整然とした石畳しか歩く場所が見当たらないという、何がお前をそこまで駆り立てるのかという執念じみた街の統一感に感心しつつ、靴の裏から感じる愉快的なデコボコ

を堪能していた私は、いくつか路地を抜けることで川の流れる大通りに出た。

そして己の五感で得た情報を疑うことになる。

果たしてここは、本当に日本なのだろうか？

引越し作業中は忙しさにかまけて、半ば無意識に思考から排除していた風景を眺めてみると、さながら時計を持った人語を話す耳長を追いかけて穴に転がり落ちた少女のような感覚に陥ったからだ（私は少女とは異なり一人っ子だったが）。

川にかかる橋は、どれもこれも童謡にでも出てきそうなメルヘンチックな石組みと木造り。その川沿いの通りに面する建物は規則正しく三角形の屋根がどこまでも続いており、どこもかしこもイソップ物語かファンタジーゲームにでも出てきそうな西欧風の建築様式に、これも見事に統一されている。沿道には延々と花壇が続いており、拳句に街燈は一昔前のガス燈タイプ。電柱の類は一切見当たらない。

カメラや携帯を手に、興奮しながら写真を阿呆のように撮りまくっているのが観光客、その様子を微笑ましく見ているのが地元民であろうか。そこに関西の古都が見せる陰険さ（あくまで私の独断と偏見である）が感じられないのは、この街の歴史がさほど古くはないからか。私はそのようなことを考えながら、観光客の間を「ごめんなすって」という代わりに目礼をしてすり抜けると、目の前の木組みと石組みの橋を渡ると、通りの反対側にあった市場に足を踏み入れた。

幸いにして我が家の冷蔵庫は実家からふんだくった食材と、母親の手料理が詰め込まれたプラスチック製の弁当箱で満ち溢れている。市場を本格的に覗くのは貯蔵が尽きてからでも問題あるまいと考えた私は、ぶらぶらと見るとはなしに市場を通り抜けると、理由もなく選んだ小さな路地を通り抜けた。

街中の階段をいくつも上下運動を繰り返して、観光客の横を通り、また別の大通りに出る。それを何度となく繰り返した。そして驚くべきことに、これまたどこをどう通り抜けても、全く同じ風景と光景が延々と続いていたのである。

これには、ひねくれ者の私ですら素直に感心してしまった。全国各

地にある西欧を模した「〇〇村」は無論、千葉の名前を言っただけではない遊園地ですら、ここまで徹底してはいないだろう。『木組みの家と石畳の街』であると、観光ガイドブックやHPで宣伝するだけのことはある。

何といつても驚くべきなのは、そこに人為的な歪さを感じられない点だ。

人が住まう限り、どうしても生活感というのはどこかに垣間見えるものであり、観光客を一方的に幻滅させる。

しかしこの街は、いつそ妄執のような徹底した統一性にも拘らず、観光地によくある「背伸び」が感じられない。生活観がありながら、非日常性が保たれている。西欧風の居住空間の中でのスタイルが、さながら何世代もそうしてきたかのように、地元住民に自然と身についているのだ。お上の音頭取りだけでは、こうはいくまい。それは一年中咲き誇るといふ四季折々の花以上に、非現実的な光景といえた。

さて「テーマパークの中での日常生活」という、非現実的なまでの統一性を、この街にもたらしているもの。その大きな要因として、街中を我が物顔で闊歩する生物の存在について、取り上げないわけには行かないだろう。

私は幾度となく通り過ぎたのと同じ路地の、ほぼ中央真ん中辺りにある階段の踊り場で、立ちすくむ白い耳長と――当時はまだウサギと呼んでいた――視線を交差させていた。

自慢ではないが、私は大の動物好きである。幼少期に私の周囲にいた男子は、はるか太古に滅亡したでかい爬虫類や、SFの巨大ロボット。あるいはバイクに乗った改造人間に夢中になっていたものだが、私はそのような重厚長大、あるいは軽佻浮薄で通俗的な風潮に背を向け、写真入りの動物図鑑に夢中になったものだ。

しかし悲しいかな。男女関係と同じく、こちらが好意を寄せているからといって、相手が私のラブコールに応えてくれるとは限らない。

動物もそれは同じであり、ふれあい動物広場では私を中心に真空地帯が出来るし、牧場に行けば牡のヤギに追い掛け回され、野良猫に手を伸ばせば血だらけになるといった具合。中学の修学旅行で奈良公

園の中を鹿の大群に襲われた時は、流石の私も死を覚悟した。

聡明で諦めの早い私は、義務教育を終える前には、動物関連の職業に就くことをキツパリと断念していた。

そして私がこの街の大学を進学先として選んだのは、この人懐っこいと評判のウサギなら私でも触れ合うことが可能ではないかという邪念によるものであったことも否定出来ない。

この街がいつの頃からか増加した野良ウサギを、奈良公園の鹿のように街の観光資源として保護していることは有名な話である。国内だけでなく海外メディアでも広く取り上げられ、様々な国から来る外国人観光客がこの街の財政を潤すとともに、日本人が作り出した西歐風の街並みに奇妙な調和と統一感をもたらしている……とまあ、このような論評を新聞で読んだことがあるが、私はこの足で実際に歩いてみて、それが事実であると実感した。

さて、そうしている間にもウサギとの睨み合いは1分程度も続いていたであろうか。

こちらは生まれてこのかた、まともにも動物と触れ合った経験がない、いわばウサギ童貞である。

チャンスは一度、失敗は許されない。

私の横を、怪訝そうな顔をした観光客が何度か通り過ぎていったが、私はそれどころではなかった。

全身の汗腺から汗が噴き出したかのように感じられ、心臓の鼓動は破鐘を鳴らしたように五月蠅い。

それでも止まることは許されない。

幼少期からの悲願達成に向けて、私はジリジリと距離を詰めた。階段を一つずつ上り、警戒させないように、ゆっくりと。しかし着実に。

あと30センチ、20センチ……よし、もうすこし。

私は満面の笑みを浮かべて右手を、その毛玉にむかって伸ばした。バシッ！

あと僅かなところで、まさしく「脱兎」のごとくウサギーいや、耳

長は逃げ出した。

ご丁寧に、私の右手を後ろ足で蹴りつけるといふ、ありがたくないサービス付きである。あまりの衝撃に身動きが取れずにいる私に、春一番にしては寒々しい風が容赦なく吹きつけた。呆然と立ちすくむ私の横を、肩を震わせた欧米からの観光客らしき親子が足早に通り過ぎる。

ちくせう

*

引越し作業中に業者の運転手に聞いた話だが、この街はかつて職種によつて建物の壁の色が定められていたそうである。

資本主義に背を向けるかのような統制主義ではないか、公正取引委員会は何をしていた。これこそ55年体制の政官民馴れ合いによる弊害と事なかれ主義のもたらした停滞ではないかと八つ当たり気味に憤慨しながら、私は子供がお道具箱をひっくり返したかのようなカラフルな街の物見遊山を続けていた。

あれから何度か私はウサギ……いや、耳長でいい。あの憎たらしい耳長と哺乳類同士のコミュニケーションを試みたが、5度目でついに私の心の中の大事な何かが、根元からポツキリと折れる音が聞こえた。潔の良さでは右に出るものがない私は、さっぱりと、断固として、不転の決意で、泣く泣く、後ろ髪を引かれながら偉大なる挑戦を諦めた。

特に4回目の失敗の時、背後から「あのお兄さん、ウサギさんに嫌われてるんだね！」という幼い少女の情け容赦のない指摘は、私の臍に情け容赦なく突き刺さった。

桜色の髪を持った少女よ、貴様の事は二度と忘れんぞ。

こう見えて繊細なガラスのハートの持ち主である私は、挫折感に打ちひしがられながら、重くなつた足を引きずるように歩き続けた。そして墮天使のもたらした食材と同じくらい運動が嫌いな私は、自慢ではないが体力がまるでない。

もうやだ。一歩も歩きたくない。

そう考えた瞬間、足が立ち止まってしまった。子供のようだが、こ

うなつてはもうどうにもならない。私は心の中の駄々っ子を宥めすかし、どこかに休憩する場所がないかと周囲を見渡そうとして、目の前の看板に視線が留まった。

「……ラビット、ハウス？」

外にぶら下がった鉄製かブロンズ製とおぼしき看板には、立ち上がった横向きの耳長がコーヒーカップに前足をかけたついた様子がデザインされており、その下に『Rabbit House』の文字が掘られている。

店の様子を伺おうと、これまたなんとも趣きのある木彫の格子枠のガラス窓から中を伺えば、いかにもアンティークなテーブルと椅子が整然と並んでいた。看板の通り、喫茶店で間違いなさそうだ。

実のところ私は喫茶店に偏見じみた持論があるのだが、私の両足は今にもストライキ寸前である以上、そのような持論は都合よく忘れてしまった。何より喫茶店ならトーストなどの軽食類のたぐいはあるであろう。最悪、飲み物だけでも注文して体力の回復を待ちたい。

日本茶党である私はコーヒーも紅茶もそれほど好きではなかったのだが、今の私のHP残量を見る限りでは、家にたどり着く前に「残念、ここで冒険は終わってしまった」となりかねない。

あの忌々しい耳長の名前が店名に入っているのは気に入らないが、そこは我慢しよう。

とまあこのように考えた私は、砂漠にオアシス、中ボスの前のセーブ・ポイントを見つけたような高揚した気分のまま『open』の文字が彫られた掛け看板のかけられたドアを押して、店内へと入った。

「あ、お爺ちゃん！どこにいたんで……」

えらく可愛い女の子がそこにいた。

私のモットーは「かわいいは正義」である。ただ残念だったのは、その女の子が文字通りの女の子であり、どう鼻肩目に見てもバイトをするには年齢が足りない少女であったという点であろうか。

「お爺ちゃん」でないことには、直ぐに気がついたのだろう。待ち人來ると喜び勇んで振り返った少女の表情が瞬時に曇るのは、私に責任がないにしても非常に気まずい。

私は取り繕うように咳払いをしてから、その少女に尋ねた。

「……えーつと、ここは…喫茶店、だよね？」

洞穴かと思ったら虎の住処に足を踏み入れた冒険者は、おそらくこんな気分になるのだろう。この場合、どちらが虎でどちらが冒険者か、わかったものではないが。ともあれ私は出来る限り動揺する少女を刺激しないように、出来る限りの精一杯の優しい声色で声をかけた。

私の姿に目を丸くしていた少女は、瞬間、熟れたトマトのような色に顔を染めると、壊れたブリキの人形のように閉じていた口を震わせた。

「……………」

い？

「い、らっしやーしえー!!」

ちくせう、なんて日だ。

セーブ・ポイントだとおもったら、ラスボスがいた件（その2）

原文は忘れたが、桃の木の下で帽子をかぶりなおすな、瓜畑で靴を履き直すなどという漢文の故事成語がある。要するに桃泥棒や瓜泥棒と疑われても仕方のない状況で、紛らわしい真似をするなどということだが……

つまり今の私のことである。

よし。ここは落ち着いて、現在の状況を整理してみよう。

今日引越して来たばかりで顔見知りの人間が誰もいない街の、初めて入った人気のない喫茶店で、おそらく留守番をしていた女子小学生が、今にも泣き出しそうな表情をしている。その前には身長170センチほどの成人男性らしき不審者が1人、これが私だ。

どう考えてもアウトである。

もはや頼れるのは自分しかない。私は俄に放り込まれた危機的状況を打破するため、日頃は眠りこけて久しい脳細胞に蹴りをいれた。

よし、こいー！

『い、いらっしやーしえー!!』

どうして今、それを思い出してしまっんだ！

いかん、ここで突然笑ってしまえば、本当に不審者になってしまう！私は口腔内で舌を噛むことで、必死に笑いを押し殺した。

テンパっていたのはわかるが、シエーはないだろう。かの怪獣王も真似したという昭和を代表する往年の伝説ギャグ。そんなことやってるからシリーズを一旦打ち切られたんだとか、怪獣映画を見に来る当時の子供にはバカウケだったんだよとか議論が尽きないところだが、今はそんなことはどうでもいい。

これでは私も少女の動転っぷりを笑っていられない。冷静になれ。なるんだ私よ。やれば出来る子と両親からほめられて育った男の意地を見せてみる（つまりやらないと出来ない子である）。

状況を打開するためには、現状の問題について正しく認識しなければならぬ。そのためには自分が置かれた状況を客観視する必要がある。

では、現状はどうか？

どう見ても小学生か、あるいは入学前の女の子が、涙目でこちらを見上げています。

この状況、第三者か親御さんが見ればどう思うか？

冷静に説明すれば、私がむしろ被害者であることはわかってもらえ

……るわけがない。

この御時勢、今の光景を第三者が見たら問答無用で私の手が後ろに回ってしまふだろう。私の反論など聞いてはもらえまい。親御さんに見られようものなら、私が明日を扉の外で迎えられるかどうかも疑わしい。

これはいかん。いかんでござるよ。

混乱のあまり時代劇チックな思考になり始めた私は、古典いわく三十六計逃げるにしかずを実行に移すため、この場から即座に退出することを決意した。

「間違えた。また来るね」

「ち、ちがいますせん！まちがえていません！ここはきつちや、きつさ店、ラビット・ハウスです!!」

だからどうしてそこで嘔むんだ。君は私の腹筋を殺しに来ているのか。

このままだと本格的に噴出して変質者になってしまう。そうなる前に退出しようとして私は表通りへと振り返ったが、その私のジャケットの左袖を小さな手が掴んだ気配がした。

いかん。これはヤバイでござる。

もう時代考証もなにもあったものではない思考が、私の危機管理室にエマーゼンシーコール。24時間365日、おはようからお休みまで、あなたの右心房と左心室をお守りします……何を言っているのだ私は。

いかん、冷静に、冷静になるんだ。考える私。

例えば、少女の手を強引に振り払って表に出ていくことは可能だろう。しかし、仮に少女が転倒して怪我をしたらどうなる？不審者案件から傷害事件の被疑者に目出度くレベルアップ。大学生活どころではないし、何より少女に顔をガッツリ見られている。

どうしてこうなった。オレツチは休憩に来ただけなのに。

あ、いかん。混乱のあまり一人称がおかしくなったよ？

「……あ」

私が扉に向けて百面相をしていると、『open』の看板を見たサラリーマンらしき風袋の人がドアを開けて入ろうとして、そのまま何故か足早に走り去っていった。さもありません。入口で若い男が変な顔をして立ちすくんでいるのを見れば、誰だつて入るのを躊躇うだろう。

これは不味い。今のままでは、さらに状況を悪化させるだけだ。おぼつかない混乱した思考でそのように判断した私は、しぶしぶ振り返ると、私の左袖を掴んだままの少女を宥めるべく視線を合わせた。

私も身長はさして高い方ではないが、その少女とは頭4つほども違うため、どうしても見下ろすような格好になってしまう。そして涙目で上目遣いの少女の存在が、さらに私の警鐘を鳴らす。空襲警報を通り越して、最前線にいきなり放り込まれたようなものだ。

なんでこうなった。セーブ・ポイントだと思ったらラスボスのエリアだなんて、聞いてないよ。攻略本はどこにある。

「あ、あの、その……」

「うん、わかったから。とりあえず落ち着いて、話して欲しいな」

「は、はい。あのですね……」

……頼むから、その泣き顔はやめてほしいなあと、私はどこか現実逃避じみた考えに耽った。私にそのような趣味はないが、加虐趣味のある人物が見ればいかにも……いや、こんなことを考える時点で、私もかなりアウトかもしれない。

とにかく顔ごと視線を強制的にそらしてしまいたいのだが、少しでも外そうすると、今にも少女の表情が崩れ落ちそうになるので、それ

すら出来ない。

私は仕方なく、それとなく少女を観察しながら喫茶店の中を見渡した。

この店はテーブル席やカウンターを含めて満席になれば20人から30人程度は入れるキャパがあるようだが、あいにく今は自分と少女以外、誰もいない。

つまり事態の経緯を見ていた証人が誰もいない。

やばい。

念の為にカウンターの背後を再度覗き込んで見るが、相変わらず誰も出てくる気配がない。何だかわからないコーヒーマシンの機器が整然と並んでいるだけだ。

やばい+やばい。

リアクション芸で知られる大御所芸人のような反応が脳内で発生するが、今度は目の前の少女に意識を集中させる。断じてやましい気持ちからではなく、この状況を打開するヒントがないかと考えたからだ。

少女は青色掛かった銀髪のロングヘアーの持ち主であり、見た目や体格に似つかわしい幼い顔つきをしている。大きな瞳は髪の色よりも強いアクアマリン。おそらく小学校の低学年か？学生服の上からエプロンをつけている。まるでおままごとの途中で切り上げてきたかのようだ。先ほどの「お爺ちゃん」という言葉を合わせて考えると、おそらくここは少女の家か、あるいは学校からの帰りに祖父の経営する喫茶店に寄ったというところだろう。

よし、考察終了。俺の灰色の脳細胞、よく働いた。気分はシャークアン気取りのコナン・フリーク。もうめちやくちやだが、今更なりふり構ってられない。

「あつと、その、えつと……」

「ちよつといいかな」

「ひゃー」

……なんでこう、この子は一々、反応が小動物っぽいかなあ。

ため息が漏れそうになるのを必死に堪えながら、私は出来る限りの

静かな声で話し始めた。

「ここは君の、お爺さんの喫茶店なの？」

「えっ……？ど、どうしてそれを……」

うえーい。ちよつとまって。少女よ、なんで距離取るの。マジでやめてその反応。どうしても私を社会的に抹殺したいの？思わず恥も外聞もなく土下座しそうになったが、私はむしろ状況を悪化させるだけだと必死に思いとどまった。よし、よく我慢した。頑張ったぞ私！「……ここに入ってきた僕のことを、お爺さんと勘違いしてたよね。だからここは、君のお爺さんの喫茶店じゃないかと考えたんだよ」

「あ、なるほど！」

この頃の私は一人称が僕であった。特に深い意味はなかったけれども。

とにかく私の言葉で少女は安心したらしく、むしろ瞳をキラキラと輝かせて「すごいですね」と、実にわかりやすい敬意と驚きを見せてくれた。

やだこの子。チョロすぎない？今時こんな天然記念物チックな反応する少女がいるの？環境省か文化庁に登録申請しないといけねえ。

どうにも私も、この奇妙な状況に感覚が麻痺したためか、思考が脱線しまくりである。ともかく、なんとか掴んだ突破口を逃すまいと、私は少女に優しく畳み掛けた。

「じゃあ、僕がお客さんだというのはわかる？」

「わ、わかります！わかりますです！」

「うん。で、店長さんのお爺さんはいない？」

「は、はい。さつきしようてんがいのかいごうによばれて、ちよつとでてくるからと」

「なるほど。で、お父さんかお母さんはいないの？」

「……おかさんは、わたしが、小さいころに……」

目の前で先程まで輝いていた少女の表情が急速に強張り、再び私の危機が到来した。

あかん（真顔）

瞬間冷凍フリーズドライ……いや、ごめんなさい。うん。これは私
が悪いわ。でもだつてさ、そんなところに地雷あるとは思わないじや
ないか。つい先程まで我慢していた最終手段の土下座をすぐさま繰
り出したいところだが、よく考えたらそれはそれで、誰かに見られた
らアウトな気がする。

どうする？ ○ーグル先生か質問箱に聞けば、誰か状況の打開策を教
えてくれないかな。

「お父さんは？」

「しごとです。ザンジバーランドというくにに、でかせぎにいつてま
す」

「そ、そう」

……ジョークなのか本気なのかわからないのが、一番反応に困るん
だよなあ。いや、何の職業をやつてるの、この子のお父さん。お父さ
んは冗談のつもりだったのかもしれないけど、この子は多分本気でそ
れ信じてるよ？

かくいう私も、父親の「俺の仕事は敏腕諜報員」とかいう話を小学
生まで本気で信じていたけど。ペラペラ口が軽い時点で論外だけど、
なんでスパイが百貫デブなんだよ……いかん。またもや思考が脱線
した。

ともかく、これまでの観察と質問で得られた情報を、一度整理して
みよう。

ここは少女の祖父の喫茶店であり、少女の母は死去していて、父親
も直ぐに連絡が取れる状況にない。

つまり今、この喫茶店には少女が一人つきりであり、営業が出来る
状況にない。そして、経営者である少女の祖父はいつ帰ってくるかわ
からない。

つまり当初の私の目的であった食事休憩は出来ないということに
なる。

ならば私の取りうる選択肢は一つしかない。

「じゃあ帰るよ」

「え?!」

いや、驚くことはないはずだ。私は少女に対して、その理由を伝え
た。

「店長さんがいないんじゃない、待っていてもコーヒーは出ないだろうか
らね」

この時、私はあくまで少女に助け舟をするつもりで、そう告げたと
もりだった。しかし、この純粹無垢で極めて穢れ無き心の少女―
香風智乃かふうちのという名前であると後に知った―は「もつとお客が来ればい
いのになあ」という彼女の祖父の独白を聞いており、それを真に受け
ていた。

つまり客が来ない＝倒産＝お爺ちゃんとお別れという、とんでもな
い三段方程式が少女の中で成立していたらしい。

人見知りで家族以外とはほとんど会話もしないという少女が、初対
面の不審者である私の袖をつかんだり、話しかけてきたのもこれが理
由であつたらしい（後で彼女の祖父から聞かされた）。

なんとも涙ぐましい家族愛であり、とてつもない勇気を振り絞った
愛情表現ではないかと涙がちよちよ切れたものだが、当時の私にとつ
てはなんとも都合の悪いことに、全てが負の方向に作用したわけだ。

「こ、だ、ダメですー！」

「いや、ダメって言われても……」

今にも涙腺が決壊しそうになる少女―当時の私はまだ名前を知ら
なかったが、面倒なので智乃ちゃんと呼ぶ―には悪いが、私としては
さっさとこの場から解放されたい一心で、突き放したような態度をと
ることにした。

少し強めに発言すればこの年頃の少女は怯んで放してくれるだろ
うという、なんとも自分勝手な考えからだったが、その時の私にはそ
れが最も簡単な解決手段に思えたのだ。少女のトラウマになったら
どうしよう、という考えがなかったわけではないが、私でなくても積
極的に拘置所に入りたい人はいないだろう。

「おじいちゃんも、もうすぐかえってきますからー！」

「……いや、でも君は何も出来ないんでしょ。僕はすぐにコーヒーが
飲みたいんだよ」

気がおかしくなりそうな罪悪感と、塩を入れた氷水に手を突っ込んだかのような後ろめたさの連合軍による集中砲火を浴びながら、それでも私は最後に残った自己保身の一心を振り絞り、意図的に声を低くして威圧するように智乃ちゃんを強い視線で見据えた。

そして智乃ちゃんは目にいっぱい涙を浮かべると、掴んでいた私のジャケットの左袖を離す。ここまでは私の予想通り。

さて帰ろうとした私は、次に智乃ちゃんの発した言葉に、立ち止まらざるを得なくなった。

「な、ならわたしがいれます!」

「……君が?」

図らずも思いもがけずに怪訝な表情を浮かべてしまった私の言葉が、どこか小馬鹿にしたように聞こえたのだろう。智乃ちゃんはキツと私を睨むと、溢れる涙を拭おうともせず、腰に手を当て、私に向かって言い放った。

「わ、わたしだって、おじいちゃんのもごです!おじいちゃんのお店は、おとうさんとおかあさんのおもいでのばしよは、わたしがまもるんです!」

あの時に受けた衝撃は、今でもありありと思い出せる。

幼いながらも純粹で、それゆえに決意と覚悟に満ちた智乃ちゃんの話は、惰性のまま生きてきた私の胸を激しく揺さぶり、私の状況を打開するための小手先の解決策を、ことごとく吹き飛ばしてしまっていた。だが当時の私は、何故自分よりはるかに体の小さい、それも年下の少女に気圧されているのか、理由が理解出来ずに棒立ちになってしまった。

こうして私が少女の軍門に降ろうとしていたまさにその時、私の両肩を「誰か」が優しく叩いた。

……誰か?

「お客様、私の孫娘が泣いている理由をご存知なら、この爺に教えていただけませんでしょうか?」

あ、これ（生物学的に）死んだ。

私は自分の血の気が引く音を聞いた。

セーブ・ポイントだとおもったら、ラスボスがいた件（その3）

喫茶店を利用するのは、どのような客層なのだろうか。

早朝からのモーニング（サンドイッチ or トースト、サラダとコーヒー）は、もつぱら出勤前、あるいは出勤途上のサラリーマンが利用するようだ。この時間限定のサービスは、だいたい午前9時から10時頃までのところが多いという。その後は終業時刻まで、飲み物が軽あるいはその両方を食提供する。営業時間は午後5時から6時前後まで。時間に縛られない自由業の休憩所として、コーヒー杯でギリギリまで粘る大学生のオアシスとして、あるいは隠居した老人の、家庭内の仕事をひと段落した奥様方の社交場としても利用される。

店の雰囲気までも含めて提供するサービスであると考えるのなら、利益率と回転率を踏まえてある程度は忙しく、かと言って慌ただし過ぎないことが望ましい。つまり一定の固定客と、ある程度の新規顧客が適度にバランスよく入り、結果として様々な客層に居場所を提供する。何よりコーヒーを愛するお客様に利用されている。

……というのが喫茶店経営の理想だと、私はラビット・ハウスの店長である香風老人^{かふう}から聞かされた。

厚かましいにも程がある。

実際に、喫茶店を取り巻く環境はどのようなのだろうか。

墮落した資本主義の手先であるランランルーなバーガーや、舌を噛みそうな長ったらしいメニューを提供する全世界的に展開するコーヒー・チェーン、朝早くから店内でのイトインを開放する24時間営業のコンビニエンスストア……国外や国内の資本を問わず、多種多様な飲食業がモーニングに狙いを定め、既存の喫茶店の縄張りを縦横無尽に荒らし回って久しい。

学生はやたらと安いイタリアンのチェーン店等に流れ、日本の歪んだ医療制度の象徴とも言える病院待合室は老人サロンと化し、目と舌と腹の肥えた奥様方の容赦のない噂話や、星の数ほどもある情報サイ

トの評価の荒波に晒され続けている。

かつての狂乱地下を乗り越えた先に到来した長引いたデフレ不況により、消費者の財布の紐はさらに固くなり、経営者の高齢化や後継者難も重なって喫茶店を取り巻く環境は悪化し続けている。

今や駐車場経営や申し訳程度の農地転用と並んで、固定資産税対策でもなければ、昔ながらの街の喫茶店を新規に経営しようとする物好きはいない……と、私は高校の同期であった不動産屋の息子とのよもや話の仲で聞かされたものだ。

彼の言が正しいかどうかは知らないし、調べるつもりもない。またラビット・ハウスがいかなる経営展望を持っているかについても、私は特に興味はない。しかし「今時、特に工夫もないコーヒー杯で、400円から500円もぼったくるような商売を続けていれば、いずれは淘汰されていくだろう」という彼の言には、戦争を知らないならぬインフレを知らない子供達の私も領けるところが多かったのは確かだ。

無論、私はそれをネタに街中の喫茶店の主に論争を挑むほど物好きではない。

ないのだが

「キリマンジャロとグアテマラの良い豆があるのだ。ぜひ飲んで行きなさい」

「とりあえず先に、この縄を解いて頂けませんか？」

この爺さん相手には、許されるような気がする。

*

カウンター越しに私と向かい合った香風老人は、ひどく愛想がよかった。

先ほどまでは孫娘を拐かさんとしていた不審者扱いであり、今はそれがまったくの誤解から来るすれ違いによるものだと証明されたのだから、それも当然ではある。何せこちらには後ろめたい点が多くないのだから……と考えて、脳裏に先ほど涙目になっていた孫娘だという智乃ちゃんちのの姿が思い出され、私は途方もない罪悪感に苛まれた。

この場に智乃ちゃんがいれば土下座して、再び不審者扱いされて警察に突き出されるまでである。

逮捕されちゃうのかよ。

「ナポリタンだけでいいのかね？今日は飲み放題食べ放題だ。なんでも好きなものを頼んでくれ」

「出来れば衣服のクリーニング代金もお願いしたいんですけど」

「……トーストもつけよう」

「おいこらクソ爺」

思わず年長者への敬意を欠いた対応をしたが、これまでの経緯を辛抱強く読んでくれた奇特な方には理解して頂けるものと考えが……それはそれとして、自分の両親よりもはるかに年上であろう！それも如何にも洗練された洒落者として年齢を重ねたダンディな老人が、あからさまにこちらの機嫌をとろうと、あれこれと勧めてくるのは見るに堪えない。

こうした場面で優越感よりも居心地の悪さが上回るあたり、私は生来の小心者なのだろう。

あまり詳細に思い出したくもないので簡単に経緯を説明すると、恐怖とシヨツクのあまり気絶して倒れ込んでしまった私を、香風老人は手際よく荒縄で縛り上げると、直ぐに警察に電話しようとしたらしい。

そこで智乃ちゃんの制止が入ったそうさ。

神様、仏様、智乃様である。

自分を襲おうとした不審者ですら心配するとは、なんと優しい孫なのだろうと店主は感激したそうだが、それが「深刻な犯罪行為であることに気がついていないがゆえの勘違いした配慮ではないか」と再び勘違いした老人は、不審者（つまり私）への怒りを更に募らせた。

「違うんです」を繰り返す孫娘と幾度となく会話がすれ違い、妙な違和感が老人の中で芽生えだす頃、私は意識を回復した。

縛られながら「外に『open』の看板が掛けられていたので、営業中と思い入りました」と口を挟むと、老人は「そんなわけなからう！出かけるときにちゃんと……」と玄関の扉を見てみれば、こちら側

―つまり店内側から『close』の文字。

油の切れたブリキのロボットのようになまる様は、私に少女と老人との血縁関係を思い起こさせた。

どうして綱引きで使うような荒縄が喫茶店の倉庫に用意されているのかと思いつつ、拘束から解放された私は、店主の―まあそれは見事な90度での最敬礼による謝罪を快く受け入れた。

そして更なる相互理解と現状把握のために、ぎこちない乍らも互いに自己紹介をした。

出入り直後の手打ち式の様な、拭い難い余所余所しさと緊迫感があつたのは否定出来ないが、私としてもこれ以上事を荒立てて余計な時間と労力を使いたくないという怠惰の虫が騒ぎ始めていたので、飲み物と軽食のセットのサービス（＋クリーニング代）で手を打つたというわけだ。

なおこの間のやり取りを、祖父の後ろから顔を出したり引つ込めたりしてハラハラ見ていた智乃ちゃんが、香風老人から和解を伝えられてホッとして顔の表情を緩める姿は、たいそう癒されるものであつたことを付け加えておきたい。

*

この喫茶店の経営者であり智乃ちゃんの父方の祖父である香風さんは、すでに人生の折り返し地点を過ぎて久しい年齢に足を踏み入れている。とは言っても私には、（私を手際よく縛り上げた手腕も含めて）年齢的衰えは感じられなかった。

香風老人の特徴的な髪と髭は、白髪というよりもシルバーヘアに近い。顎鬚と口髭がつながって口の回りを覆い、その髭がもみあげまで続いているという、いわゆるサークルタイプの髭だ。有名人で例えるなら、シヨーン・コネリーを想像していただければ分かり易いだろう（あちらほど頭髪に困ってはいないが）。

この手の髭は毎朝の手入れが難しそうだが、よほど丁寧に入れているのか、乱れも違和感もない。肌こそ年相応に脂と色が抜けているが、背筋はピンと伸びており、その軀を皴一つなさそうなバーテンドーのようなスーツで身を固めている。

そして何より特筆すべきは、老人のちよつとした所作に見られる気品と余裕、そしてユーモアだ。

一見すると厳格な気難し屋に見えるが、話してみると洒落つ気が通じる（孫娘を脅かすものは例外のようだが）。短いながらも、私は老人から気障な伊達気質というか、一本筋の通ったダンディズムを感じた。

その香風老人からカウンター席を勧められた私は、とりあえず老人の正面、ちよつどカウンター席の真ん中を選んで座ると、ナポリタンとトーストが出てくるのを待つことにした。

智乃ちゃんは私に対する誤解が解けると、心の底から安堵した表情を浮かべた後、こちらの視線に気がついたものか、顔を赤らめて足早に奥へと退いていった。人見知りであるという祖父の言は、どうやら事実らしい。

短い会話から受けた印象でしかないが、私は智乃ちゃんに聡明で芯の強い、そして優しい子という印象を受けた。

それを何気なく香風老人に伝えたところ、老人はニコニコ顔で孫の自慢を始めた。

この和製シヨーン・コネリー翁は、これまでの私に対する一時的ながらも不当な扱いからもわかるように、孫娘の智乃ちゃんを目の中に入れても痛くないほどに可愛がっているようだ。溺愛しているといてもよい。

智乃ちゃんは老人の息子であるタカヒロ夫婦の一粒種であり、智乃ちゃんの言った通り、彼女の母親は早くに死去したという。男所帯だが優しく育ってくれてありがたい。きっと智乃は天女の生まれ変わりに違いない e t c ……

どうも先ほど私が智乃ちゃんのお爺ちゃんのお店を守る「発言を伝えた事が、老人の琴線に触れたらしい。先程から何度も何度も同じ話を、実に嬉しそうに繰り返している。どうして孫自慢に付き合わせているのだと私が思い始めた頃、ようやく注文していたトーストとナポリタン・スパゲティが完成した。

あれだけ口を動かしながらもよく手が動くものだと感心しつつ、私

はカウンター越しに目の前に差し出された料理を受け取った。

「……美味そうですね」

「ですね、は余計だ」

老人の戯言を無視して、私は目の前に広がる景色に思わず唾を飲み込んだ。

四角い食パンを斜めに三角形にカットして、こんがりときつね色になるまで焼かれたトースト。バターは黄金色の液体に変貌しつつあったが、まだかろうじて固形を残している。

ナポリタンは太めの麺に、カットされたベーコンとマツシユルム、そして細切りのピーマンとシンプルな具が絡んでいる。それらがケチャップによりオレンジ色で染められ、いかにも食欲をそそる香りを漂わせている。ナポリタンの皿はわざわざ冷めないように湯煎されているという手の入れようだ。

どちらもよくある喫茶店のメニューだと香風老人は謙遜していたが、出来立てで湯気が上がっているとなると、これだけでもう立派な御馳走といってよいだろう。

私は両手をあわせて「いただきます」と言葉にしてから、まず右手でトーストを持ち上げると、自らの口へと運んだ。

「ざくつ」という食欲をそそる音と共に、親指2本ほどの厚さのあるトーストから小麦粉の焼けた匂いと溶けたバターの風味が口いっぱいに広がる。

「ほう」と、私は知らず口から声が出てしまっていた。

食通を気取るつもりは毛頭ないが、それでも私のような人間ですらわかるほどに明確に「美味しい」と感じる。口の中が幸せに溢れ、呼吸すればそれが吐く息と共に逃げてしまうのではないかと思ってしまう。私はトーストは半分程度にしておいてスパゲティに取り掛かろうとしていた事前の計画をあつさり取り止め、その幸せを最後まで堪能することを選択した。

「美味いだらう」

香風老人の口元だけを緩めた「どや顔」は非常にムカつくが、事実であるので素直に頷いた。

手についたパン粉を皿の上に落とすと、私はこれならばもう片方も期待出来るという興奮と共に鉄製のフォークを掴んで、オレンジ色の山に斜めから突き刺した。

私は家でナポリタンを食べるときはタバスコをかけるが、外で食べるときはまず何もかけずに食べるようにしている。母親の味なら予想がつくが、外の場合はまず味見をしないと、タバスコの適量がわからないからだ。

くるくると手の中でフォークの柄を回転させて、一口大に麺と具材を絡め取る。何本かが巻取れずにぶら下がるが、私は構わず口に運ぶと、ラーメンを食べるかのように勢いよく麺をすすった。

「ううん……」

私は思わず唸ってしまった。再びドヤ顔で腕組みをしてみせる香風老人に神経が逆なでされるが、それよりもこのナポリタンの美味さといったら！

まず口の中で感じるのはトマト・ケチャップの酸味と旨み。それらはベタベタとしたものではなく、あくまで主役は麺であり具材の引き立て役であることを忘れていない。

続いてベーコンの油に、野菜の苦味と食感が続き、最後に麺の食感がくる。この頃、麺類と言えば饅頭であれ拉麺であれ、やたらと硬いものもてはやされているが、その風潮に背を向けるかのような柔らかさ。かといって茹ですぎたか火を通しすぎたために「べちゃ」としたものでもない。

個人的な好みもあるのだろうが、むしろこれにタバスコをかけては、却つてこの調和が失われるのではないか。私はそのようなことを考えながら、最後の一本まで、オレンジ色に染まった皿だけになるまで、一心不乱に食べ続けた。

タバスコは使わなかった。

*

「ごちそうさまでした。いやあ、うまかったですよ」

「はい、お粗末さま。そこまで美味そうに食べてくれると、こちらとしても作った甲斐があるよ」

満足げな老人の笑みに、私は先程までの遺恨は綺麗さっぱりと忘れ、口元を紙ナプキンで拭くと、グラスコップの水を勢いよく飲み干した。

美味しいものと値段は比例しないというが、それが先程まで貧乏人の僻みであると考えていた自分の浅はかさが、なんとも気恥ずかしい。トーストもナポリタンも決して高級料理ではないが、ここまで美味しいものは食べたことがない。私は文字通り舌を巻き、注文する際に見たメニューに記載されていた値段を思い出しながら、香風老人に自分の転向について伝えた。

「トーストが300円で、ナポリタンが800円でしたか。いや、正直ポツタクリだと思ってましたけど、これならその価値はありますよ」「それは褒めているつもりかね？」

「褒めてるんですよ。いや、僕も人様の料理を偉そうにあれこれ批評出来るような立派な人間じゃないですけど、これは美味しかったです。正直、喫茶店のメニューだからと舐めてました」

私の言葉に香風老人は喜ぶのではなく、むしろ心外だと言わんばかりに眉をひそめた。

「所詮は出来合いのものを出すのが、喫茶店の軽食だど？」

「そこまでは言いませんが、まあ、そんなところを予想していましたよ」

「はつきりと言う。気に入らないな」

「あー、腕が痛いかもしれないな、どうしてだろうなあー」

「この悪餓鬼が！」

私は香風老人と北関東のヤンキーのようにガンを飛ばしあい、そしてほぼ同時に嘔出した。

経緯はどうであれ、私にとっては食事がうまいかどうかが問題であり、老人にとつては自ら提供したサービスに客が満足したかどうか全てである。

だからこそ私は、ここが「喫茶店」であるということを見下ろして来た。

「まあいいさ。コーヒーはもう少し待ってくれ。今、特別のブレンド

を作ってやる」

「いや、僕は日本茶党なのでコーヒーは結構……」

「うん？」

それまでにこやかであった香風老人の目の奥に、突如として不穏なものが燃え上がり始め、私は再び老人の地雷を踏んでしまったことを理解した。

ようやく本来の意味で休憩出来たと思ったのに、どうしてこうなるのか。何なのこの店？耳長ハウスじゃなくて、薄い本屋じゃない本来の意味での虎の穴だったの？私は掟破りの元悪役レスラーか何かで、ミスターYだかZだかに追われる身だったの知らなかったよ。助けて伊達な直人さん。

「どうやら君はコーヒーの何たるかを知らないようだ。どれ、このワシが手ほどきしてやろう」

「いや、長くなりそうなので結構です」

「うん？」

「はい、よろこんで！」

*

私の手のひら返しのすばらしさを褒め称えてくれる諸君に、今こそ私は訴えたい。君らはあの香風老人の顔を見ていないから、そのような能天気な脳味噌ハッピーターンなことが言えるのだと。私は命が惜しかったし、何よりせっかく美味しいものを食べた食後の幸福感を、そのようなつまらないことで消し去りたくはなかった。

それに先ほどのトーストやナポリタンという、どこでも誰でも作れそうなものを、金が取れるレベルにきちんと仕上げる店主の提供するコーヒーに、興味がなかったといえば嘘になる。

いまさら私のコーヒー論を聞きたい人もいないだろうが、私にとってコーヒーといえば缶コーヒーのことである。それも北関東の練乳コーヒーのようなものではなく、真っ黒なスチール缶入りのブラックに限る。

そしてそれを私は、薬と同じ用途で服用していた。

お前こそ脳味噌ハッピーターンじゃねえか。通報するぞといわれ

そうだが、どうか待って頂きたい。

何度も繰り返し返しているように私は食道楽（食い意地が張っている）のため、度々食べすぎとなることがある。胸焼けや吐き気がひどい時、私は決まってブラック・コーヒーを飲むのだ。すると不思議と症状が収まるのである。

これは私の両親から教えてもらったのだが、苦味成分が胆汁としての役割を果たすのだとか何とか。あくまで我が家に伝わる民間療法であるが、私は吐き気がする時は、いつもこうして胸のムカつきを収めてきた。

つまり医学的な根拠は何も存在しない。信じるか信じないかは、諸君ら次第であると断っておく。

さて、そんなわけで私にとってコーヒーはどうしても薬の印象が強い。

第一、家でちよつと本格的なコーヒーを入れようものなら、わけのわからない器具をいくつも用意してから、お湯を沸かしてパックを用意してと手間が掛かる。同じ手間が掛かるなら、お湯を沸かして蒸らすだけの日本茶を飲めばいいではないか。何を好き好んで苦い豆のだし汁を飲まなければならぬのか。私はそう考えて、今まで生きてきた。

大体私は、コーヒー豆という気取った植物の存在からして気に食わないのだが、それは長くなるので今は触れない。

ともかく日本原産でもない豆を輸入するために、あたら貴重な外貨を湯水のごとく垂れ流した挙句、焙煎だかバリカんだかしらないが、わけのわからない作業工程を繰り返し返して出来上がるのは、苦いばかりの黒水だ。それを好き好んで飲もうという人間の気が知れない。

「……人の考えや趣味思考にケチをつけたくはないが、君も相当、変わった性格をしているな」

コーヒーに関する私の持論を聞き終えた、香風老人の第一声がこれである。

彼は私の長広舌を聞きながら、目的の液体を完成させるために手と足を動かし続けていた。私には名前はおろか、区別も判別も出来ない

幾多の器具を手際よく使い分けている。その様はさながら実験を行う化学者のようだ。

やはり黒水を好き好んで提供しようという喫茶店の主には、私の崇高なる考えは理解してもらえまいか。いつの時代も先駆者は排斥されるものだと、私はゴルゴダの丘を十字架を背に登る預言者のような気分を堪能しつつ、老人の手際を観察していた。

「ほれ、飲んでみる」

香風老人はそう言うと、何の変哲もない白無地のソーサーに乗せられたコーヒーカップを私の目の前に置いて見せた。

陶器の白いカップの中には黒水が満ちており、何とも香ばしい香りと湯気を立てている。

これも個人的な偏見だが、挽きたてのコーヒーの香りというものは、大規模なフランチャイズ・チェーンや、コンビニエンスストアの出入り口付近にあるセルフサービスのそれには似つかわしくないと思う。あれはあれで否定するつもりはない（興味もない）が、やはりこういう香りは喫茶店にこそふさわしい。

己は先ほどまでコーヒーを黒水と罵っていたではないかと批判されそうだが、私はコーヒーの香りそのものは嫌いではない。

いくらよい香りがするからといって便所の芳香剤をなめようとする人間はいないだろう。それと同じことだ……というのをつらつらと口にしていたら、さすがの香風老人の眉間にも太い血管が浮き上がり始めた。

仕方なく私は左手でソーサーを持ち上げると、右手の指をカップの取っ手に絡ませる。

何の種類かは知らないが、白い陶器の肌に、コーヒーの魅惑的な黒色が実に映えており、一種の芸術作品のような趣がある。

これを自分の手で壊してしまうのはもったいないのではないかと思っただが、さすがにこれ以上減らず口をたたいていると店主が本気で怒り出しそうなので、私は恐る恐るカップのふちに口をつけ、その黒水を口に含んだ。

なんだこれは。

瞬間、私の口腔内を、キリマンジャロを始めとしたアフリカ各地の風が勢いよく吹き抜けた。

見たこともないはずの光景が、コーヒーベルトで生産された実を農家が採取する姿や、それを日本に運ぶ貨物船、選別するバイヤーなどの姿が、走馬灯のように私の脳裏を駆け巡る。

かぐわしい香りが鼻から抜け、暖かい液体がゆっくりと胃の中へとおさまっていく。

…なんだこれは。

今まで私が飲んでいたのは、本当にただの黒水だったことを、この一口が証明して見せた。

コーヒーとはこのような官能を飲んだ人間に与えるものだったのか。例えとしては正しくないかもしれないが、性行為ですら得られることが出来ないような愉悦が、私の頭から足の先まで一瞬に通り抜けてゆく。そしてそれは、飲み終えたあとも継続し続けている。

かすかに震える手を何とか押さえこもうとして、私はそれに失敗した。

…なんだこれは。

「……負けたよ、爺さん」

私はカップをゆっくりとカウンターに置き、香風老人と再び顔を見合わせた。

私の眼には、先ほどより老人が大きく見えた。

それはこの偉大なる飲み物の楽しみ方を教授してくれたことへの敬意からくるものであったのだろう。

コーヒー童貞であった私が言うのもなんだが、童貞だったからこそ、このコーヒーの偉大さがわかる。これは断じて出来合いの適当な調査によるブレンドに出せるものではない。

何がラビット・ハウスだ。ここだ。此処こそが虎の穴であり、目の前の和製シヨーン・コネリーこそが、その主―ミスターXだったのだ。

私はこれまでの非礼をわびる意味も含めて、その場で立ち上がると、深く頭を下げる。そして掛け値なく自分の感動と感じた光景を伝えようと、この偉大なるバリスタに、己の出来る感情と言葉を誠心誠

意尽くして語った。

香風老人は私の拙い弁論を黙って聞いていたが、それが終わると私に一言だけ告げた。

「今、君が飲んだそれな、南米産の豆のブレンドなんだが」
ちくせう

安易なフラグは、あなたの健康を損なうおそれがあります（その1）

黄金週間の慌ただしさを乗り切りきった5月の中頃。大学生活にもようやく慣れ始めた私は、自室にこもり、課題であるレポートの執筆作業を続けていた。レポートといっても、大学1年の前学期で課せられるような課題は、今後の学生生活において必要不可欠となるレポートの書き方を学ばせるための要素が強い。誤解を恐れずに言えば、学生時代の調べ学習の延長のようなものかもしれない。

私が学生になった頃には、すでにプリントによるレポート提出や電子データによる課題の提出が一般化していた。そのため提出期限が迫るたびに、学生や院生が研究室に集まり、手の甲を鉛筆の粉で黒く染め、袖口を擦り切れさせながら原稿用紙に向かい合う光景は、すでに過去のものとなっていた。私は中古の家電製品を除けば、この部屋で唯一の高額家電といってもよいノートパソコンのキーボードをパチパチと叩きながら「文明開化万歳」と呟いた。

「よし、終わった」

最終的な誤字のチェックを終えると、私は畳の上に胡坐をかいたまま、大きく背伸びをした。課題とは名ばかりの練習レポートとはいえ、ようやく解放されたことにかわりはない。私は非常に晴れやかな気分になりながら、肩の凝りをほぐすために左右に顔を向け、そして視線に入った自分の部屋の景色に気分を害した。

「男所帯にはウジがわくか」

昔の人は上手に例えたものだ。万年床の湿った布団、天候不順をいいことに溜めに溜めこんだ洗濯物と脱ぎ散らかした衣服、授業とレポート執筆のために図書館から借りてきた参考書籍や教科書の数々に、自宅から運び出してきた古書（ほとんどが漫画だが）。これらが無秩序に部屋のあちこちに堆く積み上げられており、わが愛居は汚部屋化の一途をたどっていた。

台所を中心とした炊事場周辺こそ、一見すると綺麗に見えるかもし

れないが、それは私が料理をほとんどしないからに他ならない。母親の愛情の産物たるパック詰の惣菜はとうの昔に食いつぶし、冷蔵庫の中は作り置きしたカレー鍋と調味料以外には何も入っていない。

唯一、私が胸を張れることがあるとすれば「G」対策として、使い終わった食器をすぐに洗うようにしていること、生ゴミは新聞紙にくるんできちんと処理していることぐらいだろう。唯一なのに2つになっってしまったが、まあそんなことはどうでもいい。

とにかく、こんなところをいつまでもいては気分が詰まる。PC画面右隅のデジタル時計を見れば、既に午後の2時を回っていたこともあり、私は右肩と左肩を交互に回しながら、自らの空腹を如何に満たすかの方策を練り始めた。

私は確かに料理をほとんどしないが、全くしないわけではない。冷蔵庫のなかに鍋ごと突っ込まれたカレーが、その証拠である。

実家で両親と同居していた時代に何か学んだのかと聞かれば、それは否だ。大根おろし程度は手伝ったことはあるが、包丁はおろかピーラーすらまともに使ったことがなかったほどだ。つまり一人暮らしを始めてから、全くの独学とネット知識を基本に始めたわけである。

これは「せつかくの一人暮らしだから、少しは自分の生活能力を高めよう」とする前向きなチャレンジ精神によるものではなく、財布の中身に比例した止むにやまれぬ、かつ切迫した財政事情からくるものであった。

この「木組みの家と石畳の街」は、はつきり言うところには優しくない街だ。同じ観光地である京都が学生の街として成立しているのに比べると、一人暮らしにこれほど不向きな街もあるまい。

本来であれば一人暮らしの大いなる味方になるはずの大手のコンビニ・チェーンや外食チェーンは、都心部から離れた立地条件と、交通の便の悪さ、そして長く続いた行政当局の出店規制によって、片手で数える程しかない。

この街が観光地として成功しているのも、チェーン店にとっては不利な条件だ。いささか割高の観光地価格でも上等と覚悟を決めてい

る観光客は、どこでももあるチェーン店に見向きもしないし、中小の自営業が中心の地元住民は大規模資本に警戒感が強い。

さらに大資本に二の足を踏ませるのは、街中を我が物顔で闊歩する耳長の存在だ。

この街とて陸の孤島というわけでもなく、道路網は整備されている。しかし奈良のお鹿様ならぬ「木組みの家と石畳の街」のお兎様は、神聖にして不可侵な存在であり、たとえ自動車専用道路であっても我が物顔で走り回る始末だ。結果、大型車両の通行は阻害され、時間厳守が求められる大資本や物流業者は「まともな商売にならない」と匙を投げた。

まさに兎こそが、この街を大資本の横暴から守る守護神であるが、同時にこの耳長の存在こそが、この街の学生を苦しめる元凶でもあるのだ。

例えばこの街には大きな女子高等学校が2つ存在する。片方は有名なお嬢様学校であり、もう一方の女子高等学校は、特進クラスや国際化等の多種多様なカリキュラムを揃えており、地元住民だけではなく他の都道府県からも広く生徒を受け入れていることで知られている。

そして前述したように、この街は学生が一人暮らしをするには、環境がいささか厳しい。観光地ゆえに家賃や食費のコストが高く、光熱水費も馬鹿にはならない。お嬢様学校の方はそれでも問題はないが、後者に通う生徒の保護者にとっては深刻な問題だ。

そこで件の女子高等学校は、行政や地元商工会と連携して、遠方からの生徒を対象とした地元住民の自宅を下宿先として提供する紳士協定を締結。この協定を利用する学生は、下宿先で「奉仕活動」をしながら、学校生活を送るのだという。

奉仕活動。なんとも耽美な響きではないか。是非とも其のところを詳しくお伺いしたい―大学でのオリエンテーション合宿の際、地元出身の学生からこの街の事情を聞かされた私は、自らの感想を正直に述べた。

結果、目出度く同期の女子から「変態」と罵られるご褒美付きを頂

戴した。

ちくせう

そんなことをつらつらと思い起こしていると、私の腹の虫が先ほどより強く騒ぎ始めた。

ふむ、これは困った。

私は腹の虫に問う。「今日もカレーでいいか」と。

腹の虫は答えた。「四日連続はいやだ!」と。

まったくもってその通りである。

いくらカレーは飲み物だからといって、私も4日連続、なんの変哲もないカレーというのは正直勘弁して欲しい。大量に作れば美味しいと聞いて試した私が馬鹿だったのだが。

ここは趣向を変えてカレーの上にチーズをのせて、電子レンジでチンをしてドリアのようにすればどうかとう考えが頭をよぎるが、どうにも何か違う。不味くはないだろうが、今の私はそうした気分ではないのだ。

私は腹の虫に問うた。

少し遠いが、大学まで出向いて学食を利用するのはどうだ？

腹の虫は激怒した。

そんなに待っていられるか!

これはいかん。私は腹の虫の期限の悪さに、俄かに焦り始めた。学食が駄目なら、地元住民の台所である野外市場に出かけて食材を物色してから献立を決めるというのも期待が持てないだろう。観光地価格であることを覚悟した上で、街中の適当な店を探すというのも、考えうるまでもなく期待薄だ。何より財布にやさしくない。

腹の虫が本格的な暴動を起こす前に、なにか有効な解決案を提示しておかなければ。

すると私の脳裏に、とある喫茶店の名前が浮かんだ。

「ラビット・ハウスか」

あの屈辱にまみれた因縁の出会いから早2ヶ月。私は再び、あの和製シヨーン・コネリー氏と相対する覚悟を決めた。

*

春が短くなつたといわれて久しいが、5月も半ばを過ぎると特にそんな気分させられる。桜の時期はとうに過ぎ去り、花びらが散つてもしぶとく残つていた花柄も、いつの間にか消え去っている。入れ替わるように生い茂る葉桜が、風もないのにわさわさと自らの存在を主張する街路樹の下を、私は地図アプリを起動させた携帯片手に、ラビット・ハウスへと向かつていた。

あの時は気が付かなかつたが、ラビット・ハウスは私の住まうボロアパートから5分ほどの場所に位置していた。最初に訪れた時は来た道をそのまま折り返して帰宅したのだが、ひどく遠回りをしていくことになる。

まったくもって阿呆なことをしたものだと考えながら歩いていると、いつのまにかあの店の前に到着していた。あの時と同じ耳長の表看板に、あの時と同じ『open』のドアプレート。

あの時と同じ失敗はするまいと、私は窓から喫茶店の様子を覗き込んだ。

テーブル席には新聞を読んでいる老人が1人と、こちらもテーブル席に私と同じ大学生らしきカップルが1組。そしてカウンターの奥から、窓から覗き込む私を怪訝そうに見つめ返す見覚えのあるマスター。

これならば問題あるまいと、私はラビット・ハウスに記念すべき2回目となる入店を果たした。

「……………いやいやい」

相変わらず渋い気障な声が特徴的な香風老人は、私の奇行には一切触れず(面倒なだけだったのかもしれない)、客商売として最低限の視線を保ちながら、来訪に対する歓迎の意を示した。

私は片手を上げて挨拶をすると、最初に訪問した際と同じように、カウンター席の真ん中に陣取り、間を置かずにマスターから手渡されたメニューを広げた。

あの衝撃的な出会いを果たした至高の飲み物を注文するのは、最後にすべきであろう。空腹を抱えたままでは、あの蠱惑的な魅力を十分に堪能することは難しい。今、優先するべきは、この無情の空腹を

満たすために何をチョイスするべきかという問題にケリをつけることだ。

遅いことは猫の子でもする。私はメニューを素早く繰った。

苺シヨートやチョコレート・ケーキ？そんな軟弱なもので、今の私は満足出来ない。とにかく腹にたまるものもいいが、では炭水化物……トーストという気分でもない。サンドイッチも然り……でもこのハムサンドは美味そうだな。また今度にするか。

ふむ。そうなる……

私は左手の人差し指をピンと立てて、厳正な選考の末に選んだ商品名を伝えた。

「ナポリタンを2人前で」

「お残しは許さんぞ」

何処かの忍術学園の食堂の女主人のようなことを言いながら、香風老人は奥のキッチンへと向かって行った。

*

「ごちそうさまでした。相変わらず美味かったです」

両手を合わせ、礼儀正しく食事と料理人に対する感謝の意を伝え、味の感想を直接伝えたのにも関わらず、香風老人は何故か呆れたような奇怪な表情を浮かべて顎髭を親指の腹で撫でていた。その老人の態度に「解せぬ」と私がナプキンで口元をぬぐいつつ、首をかしげて見返すと、香風老人はその理由を明らかにした。

「800g近くあったスパゲティを10分もせずに平らげられては、こんな顔にもなるわ」

「それだけ美味しかったということですよ」

「ほめられて悪い気はしないが、その相手が君だと思うと気持ちが悪いな」

まだ2回しか会っていないのに、どうしてここまで貶されなければならぬのだろうか？私は釈然とないものを感じながら、以前と同じブレンド・コーヒーを注文した。あの恍惚を再び味わえると思うと、体の芯から歓喜が湧き上がって来るというものだ。老店主の客を客とも思わぬ対応など、どうでもいい。

香風老人は私が語ったコーヒーのもたらす官能の賛辞に対して「それはよかった」と、心底どうでもよさそうな声と態度で応じた。

「普通、ここは自分の成し遂げた偉業について感激するところではありませんか？」

「人間の声帯から、チュパカブラのような奇声が出ることを証明して見せたことをかね」

「それをいったら戦争だろうが……！」

私は顔を羞恥心で震わせながら店主に反論する。あれから幾度の夜、私が枕を涙でぬらしたと思っているのだ。授業中であろうと通学中であろうとバイト中であろうと関係なしにそのときの記憶がフラッシュバックのようによみがえり、頭を抱えてもだえそうになったことか。

しかし私の厳正なる抗議にもかかわらず、香風老人はそれを鼻で笑うばかりであった。

「せっかくの新規顧客に対してそんな態度だから、閑古鳥が鳴いてるんじゃないですか？」

「そ、そんなことはない、ないぞ！」

智乃ちゃんが大事なところで噛む癖は、どうやら隔世遺伝であったらしい。もつとも髭もじやの爺さんが噛んだところで、可愛くともなるともないが。

私の哀れみをにじませた温かい視線に気がついたものか、香風老人はむきになって反論を始める。

やれモーニングのときはそこそこ繁盛しているだの（そこそこかよ）、昼間はそれなりに忙しくてバイトを入れようと考えているだの（2、30人入るキャパがあるのに回ってるのかよ）、喫茶店とは静かな空間を提供するものだの（かなり苦しい）、客商売とはお客の数ではなく、サービスの質を競うべきものだの（客が少ないのを認めちゃったよ）……

私は最初のうちこそ、笑いをかみ殺しながら真面目な顔を取り繕って聞いていたものの、次第に老人に対する同情が上回り始めた。最終的に香風老人が、どこか遠くを見つめながら「ウサギになって借金か

ら逃げ出してえ」と言い出した時には、まったくそんなつもりはなかったのに、慰めの言葉が口をついて出てしまった。

「頑張れ御老体。きつと報われる日が来ますよ」

「やかましい小僧、貴様に同情される筋合いはない！」

ついに小僧になつちやつたよ。確かに香風老人からすれば、酒も飲めない年齢の私は小僧であろうが。そもそも初対面に近い小僧相手に、どうしてこの人は経営に関する愚痴を言い出しているのか。バリスタとしての手腕はともかく、飲食店の経営者には致命的に向いてないのではないか？

私はそのようなことを考えながら、ブツブツと不平を言い続ける香風老人から、魅惑的な芸術品にまでに昇華されたコーヒー・カップを受け取った。

これだ、この香りこそ悪夢にさいなまれながらも、幾度となく夢にまで見たもの。

「……カフェイン中毒というものがあるが、君も意味は違うが似たようなものだな」

コーヒー馬鹿の爺さんが何か言っているが、私はそれを気にせず存分に香りと熱を楽しむ。

さて、再びあの官能を口腔で味わおうと、私がカップに口をつけようとしたまさにその瞬間、聞き覚えのある音が店内に鳴り響く。それがドアベルの音だと気がつくのに、それほどの時間はかからなかった。

「いらつしやい……なんだ青山か。こんなところで油を売っていてもいいのかね」

「こんなところだから、いいんですよー」

「喧嘩売ってるのか青山ー！」

鼻でも詰まっているのかと思うようなつまり気味の、どこかのんびりとした女性の声に、私はコーヒーカップを持ったまま、喫茶店の出入り口へと視線をやった。

「えへへ、またきちやいましたー」

私は女神と出会った。

安易なフラグは、あなたの健康を損なうおそれがあります（その2）

「木組みの家と石畳の街」の喫茶店ラビット・ハウスで、オーナー店主である

香風老人かふうのオリジナルブレンドを味わって以来、私はコーヒーに関する考えを次の如く改めた。

「この世には2種類のコーヒーがある。ラビット・ハウスの店長の手によるものと、それ以外の黒水」

今でも私が日本茶党であることに変わりはないが、それでも香風老人の手によって抽出されたものは、市販の缶コーヒーやインスタントなどとは、比べ物にならない。同じコーヒーと名乗ることすら罪深いというものだ。悪魔のように黒く、地獄のように熱く、天使のように純粹で、そして恋のように甘い。この言葉は、この店のオリジナルブレンドにこそ相応しい……

カップを片手に自信満々に語る私に、カウンターの向こうに立つ香風老人は洗ったガラスコップを布巾で拭きながら、極めてぞんざいな態度と胡乱な視線で応じた。

「さも自分が思いついたように語るな。それはタレーラン公爵の言葉ではないか」

「さすがは喫茶店の店長、ご存知でしたか」

その知識を褒め称えたにもかかわらず、香風老人は何故か鼻を不機嫌そうに鳴らした。

2度目の訪問以降、私は週1のペースでラビット・ハウスを訪問して、コーヒーの名に値する壘惑的な飲み物を楽しんでいる。それにしても、いつ来てもこの店は閑散としている。静かな雰囲気を楽しむのや、コーヒーを純粹に味わいたい私のような人間にとってはむしろ素晴らしい環境なのだが、経営者としてはそれでいいのだろうか？ 現に今も客は私しかいない。

そんなことをつらつらと考えながら店の中を見回していると、カウンターを挟んだ老人の視線が俄かに険しさを増す。それにしても洒落男は何をしても恰好になるのだからうらやましい限りだ。

「前から思っていたのだが、貴様、私を馬鹿にしているだろう」

「さすがは御老体、ようやく気がつきましたか」

「叩き出すぞー！」

口では幾度となく罵声を浴びせられたものだが、香風老人が実力行使に出たことはない。

私は飲食店経営者としての老人の手腕には疑問をもっていたが、バリスタとしての老人の手腕は嘘偽りなく尊敬していた。私はそれを直接伝えていたし、そんな時の香風老人は決まってぶっきらぼうな態度になるが、止めろと否定することはなく最後まで聞いていることが多かった。

いわゆるツンデレというやつである。

まったく気色悪い爺だ。私はそう思いながら、恋のような甘い香りを楽しむ。

そう。私はこの店のコーヒーに恋をしているのだ。

そして恋には往々にして邪魔者が入るものである。私の場合は、目の前にいる老人が、それに該当するのだろうか。

「恋愛とはチャンスではない。意思だぞ。ここでコーヒーを飲みながらサボっている暇があるのなら、当たって砕けてきたらどうだ？」

「太宰治ですか。さすがは金欠という共通点のある作家にはお詳しい」

全く見当違いの配慮と忠告を繰り返す老人に、私が意図的に混ぜ返すと、香風老人は頬を膨らませて「怒ったぞ」とでもいうような表情を、わざとらしく作って見せる。そんな事だから「黙っていればダンディなのに」と店の客に言われているのだが、それを私から伝えるつもりはない。

それにしても、この老人はどうやら私についてとんでもない勘違いをしているようだ。私はわざわざ指摘する義務がないにもかかわらず、これもボランティア精神だと割り切って、老人の事実誤認を懇切

丁寧に指摘した。

「勘違いしてもらっては困りますね。私の青山さんに対する感情は、恋心という言葉でラッピングした、下心とかスケベ心とか、そうした下種な感情とはまったく正反対なものです」

「隠すな隠すな、貴様とワシとの仲ではないか」

「え？他人同士ということですか？」

すつとぼけた回答をしたにもかかわらず、香風老人はニヤニヤとした表情を変えない。どうやらこの老人は、私がこの店を頻繁に訪問する理由を、自分のコーヒーではなく、私が2度目の来店の際に出会った女性に一目ぼれしたからだと考えているらしい。

なるほど。如何にも俗人らしい発想だ。それにしてもいい年をしているのに、この老人はどうも深刻な恋愛脳に罹患していると見える。素人では手の施しようがない。私は改めて、ホスピタルで末期患者と接する介護士のような忍耐強さをもって老人と接することを決めた。

「青山さんはそのような下種な感情の対象としてもよい存在ではありません。彼女は女神です」

「……め、女神？」

私の言葉に、それまでのニヤケ顔を崩して、ただあつけにとられる香風老人。

やれやれ、なんと嘆かわしいことだ。この老人はあの女神と直接言葉を交わすという栄光に恵まれているにもかかわらず、その幸運をまったく理解していないとは。それに比べれば、この店に閑古鳥が鳴いていることなど、まったく些細なことではしかないのに。

「そう。女神です」

私は未開人に神の栄光を説く宣教師のような気分で、香風老人に彼女の素晴らしさを力説した。

「混沌と破壊があふれたこの地上に光臨した女神。世紀末にノストラダムスの予言した恐怖の大王は光臨しませんが、彼女こそがマルスであり、この地上を首尾よく支配するために舞い降りた女神」

「お、おう。そうだな。女神だな。マルスは男の神だったはずだが」

何故か後ろに退く店主に、私は重ねて力説した。

「マルスでありヴィーナスなのです。戦と農耕の神であり、かつ美と愛の神。強く優しく美しく、そして愛する。まさに彼女に相応しいではありませんか。一人二役、一石二鳥の一粒で二度おいしい御菓子。それこそ彼女なのですよ」

「お、おう。そうだな。菓子に例えるのはどうかと思うが……ところで念のために尋ねるのだが、つまり貴様は青山に恋愛感情はないのかな？」

この老人は私の話を聞いていなかったのだろうか。私は頭を左右に振り、老人にもわかるような言葉を選んで続けた。

「貴方は教会のマリア像や、寺院の仏像に欲情しますか？しないでしよう。つまりそういうことですよ」

「……私にはお前がどこぞのアイドルオタクの様に、童貞をこじらせた頭のおかしい人間だということしかわからないのだが」

「俗世間の汚泥にまみれた一般人に理解してもらおうとは思いませんよ。それとコーヒーお代わりもらえますか？」

「何様だ貴様は！」

「お客様ですよ」という私の言葉に、香風老人は「馬鹿」と客商売にあるまじき暴言を返してから、奥へと入っていった。

その後姿を見送りながら、私は女神との出会いについて思い返していた。

仏画や仏像において、その背後に表現される金色の光を後光と呼ぶ。仏や菩薩の体から発するとされる光の総称であり、キリスト教でも光背という聖人や預言者、天使などの背景に表現されることが多い。一般的な日本人らしく、ご都合主義による世俗的な多神教徒である私は、それらを宗教家のつまらぬ装飾に過ぎぬと冷笑していた立場であった。

しかし彼女——あおやまみどり青山翠という名前を持つ女子高生の背景には、確かに後光が差していた。

私が店主にその奇跡について力説したところ「ただの西日ではないか」と冷たくあしらわれたが、誰がなんと云おうとあれは後光である。

直接見た私がそういうのだから間違いはない。香風老人？どうせ老眼鏡をかけ忘れていたのだろう。

私が初めて青山女史を見掛けた時、彼女はこの街の有名なお嬢様学校のブレザータイプの制服に身を包んでいた。女性としては平均的な身長にもかかわらず、青山女史は実際よりも背丈が大きく見える。おそらくけた外れなまでの人物としての器が、実際の肉体的なものを遥かに凌駕しているからなのだろう。

そして私の鋭い観察眼によると、彼女は着やせするタイプであり、胸元の暴れん坊を見事に隠していた（後にそれは証明される）。あれほどの暴れん坊を二つも飼いならすとは、やはり彼女の器量の大きさが伺えるというものである。つまりこの点からも彼女は聖人であり、女神であり、観世音菩薩様ということになる。

これにて証明終了^{Q.E.D.}。

まったく隙のない完璧な証明だ。我ながら自分の才能が恐ろしくなりそうだ。

さて女神の容貌について語ろう。

当時の彼女は銀色に近い金髪を肩下あたりまで伸ばし、それを2本の三つ編みにして両肩から前にかけてという特徴的な髪型をしていた。それを思いつきり引つ張つてやりたい誘惑に駆られ、私は幾度となく自分の罪深き考えを自ら断罪したものだ。

少したれ目気味の大きな瞳は、一目見ただけで吸い込まれそうになるほど魅力的であり、知性と母性が奇妙に調和した瞳に見つめられると、この薄汚れた俗世界の表層を渡り歩いてきただけの私の愚かさや罪深さを思い知らされる。

きれいに整えられたハの字の眉毛に、ゆでた手の生卵の殻をむいたようなぷるんとした肌。小さな口元に通った鼻筋といった顔のパーツの黄金比率。まさに神が配分したとしか思えない完成度。

「あ、どうもー」

そう、そして声はちようどこんな……

……こんな？

「すみません。こちらのマスター、お見かけしませんでしたかー」

私が振り返ると、そこにはコテンと首をかしげる青山女史が鞆を右手に、何故か左の脇には原稿用紙の束を抱えた制服姿で立っていた。

女神に話しかけられるという光栄を賜ったことを喜ぶよりも前に、私は思わず視線をドアへと向け、いつものように戸の内側にぶら下がっているドアベルを確認する。はて、音がしなかったのか？

いや待て、彼女は女神なのだ。ドアベルを鳴らさずに戸を開け閉めすることなど、青山女史にとってはブレックファースト前というやつなのだろう。

「お、奥にいましゅよ」

「いましゅ？」

私は女神に話しかけられるという驚きのあまり、噛んでしまうという醜態を晒した。

「あの、マスターに何か？」

その上で私は自らの醜態を誤魔化すため、何事もなかったかのように、思考が混乱しているのをいいことに自ら女神に話しかけるといふ、無礼打ちをされても仕方のない大罪を重ねてしまった。

しかしそこは女神である。私のような罪深き不浄の者が話しかけたにもかかわらず、彼女は嫌な顔ひとつせず、その理由を教えてくださいました。

「秘密です♪」

……萌え死ぬかと思った。

*

「情けない。女神だ何だとあれだけ褒め称えておきながら、いざ目の前になるとまともに話も出来ない」

私は台風中継のキャスターのように、絶え間無く正面から吹き付ける香風老人の暴言を耐え忍んでいた。

女神、もとい青山女史は私の心をしつかりキャッチした後、奥から出てきたマスターに原稿用紙の束を渡すと「今日は家の用事がありますので」と申し訳なさそうに謝ってから、足早に店を退出した。

そして私と女史との会話……と呼ぶにも値しない私の一方的な動揺を奥で楽しんでいたという香風老人は、カウンターの内側に受け

取った原稿用紙を置くと、ここぞと言わんばかりに私をからかい始めた。

「お前はそれでも男か。男なら当たって碎けるつもりでいかんか！」
「碎けるのが前提なんですか？」

「そうだ。その上でタップダンスを踊って、砂になるまで粉碎してやるから安心しろ」

いい気味だといわんばかりの笑みを浮かべて、お代わりのコーヒーをこちらに渡す香風老人。まったくいい性格をしている。智乃ちゃんにこの爺さんの性格が隔世遺伝しなくてよかつたと心の底から安堵しつつ、私はコーヒーに口をつけた。

女神のいなくなった店内の風景は、実に殺風景なものに戻り、それは私の飲むコーヒーの味にすら影響を与えている。先ほどより酸味がきつくなつたが、それでありながら全体としては味の調和が引き締まったような気も……

「ブレンドの配合を変えたのだから、味が違うのは当たり前だ」
さいですか。

私が2杯目のコーヒーを飲む間も、老人の自慢話は続く。

制服から予想はついていたが、青山女史はあの有名な御嬢様学校の2年であり、文芸部に所属する文学少女である。この店の常連であり、マスターの香風老人とは高校入学来の顔なじみ。時折、彼女から作品の講評をお願いされる関係なのだとか

実にうらやましい。

いつもなら彼女がコーヒーを楽しんでいる間に、香風老人がその場で目を通した大まかな講評をした後、詳しい添削を数日後に行うというのが2人の間の一種のルーティーン・ワークとなっているそうだし、さすがに本業が暇なだけある。私は羨ましさのあまり、思わず店主の胸倉につかみかかりそうになった。

「見たいかね？」

掛け合いを終えて私が再びコーヒーを楽しもうとすると、香風老人がドヤ顔をしながら、女神の原稿用紙を見せびらかすように私の前に突き出す。

「いや、それはダメでしょう」

本音を言えば読んでみたい気持ちはあったが、私は子供じみた老人の挑発に乗ることを避け、丁寧に固辞した。

「それは青山さんが貴方の意見が聞きたくて渡した原稿です。関係のない第三者が、面白半分で見えてよいものではないでしょう」

私が未練たらしくも真面目腐った顔でそう発言すると、香風老人はさも意外だともいわんばかりの表情を浮かべる。

一体、この爺は私のことを何だと思っているのだ？ 私は口を突き出して、その理由を応えた。

「原稿用紙は20×20の400字詰めです。その厚さだと100枚以上はあるでしょう。今はパソコンの基本ソフトをはじめ、携帯端末のアプリなど便利な執筆道具はいくらでもあるという御時勢ですよ？ 鉛筆かボールペンかは知りませんが、いまだき手書きでそれだけのものを書くという人が、一体どれだけいますか」

青山女史の着ていた制服の右の袖は、明らかに擦り切れていた。私は直接見たことはないが、おそらくかつて課題に取り組んだ学生や、論文に頭を悩ませた院生たちも、同様に袖が擦り切れていたのだろう。彼女の作品の巧拙は知る由もないが、彼女の表現者としての努力の結晶が、こうして私の目の前に形としてある。私のような中途半端な立場の人間が、興味本位で手に取ってよいものではないはずだ。

つらつらと脈絡もなく、私が自分の腹積もりを香風老人に伝えると、老人は「ふむ」と呟き、いかめしい顔のまま胸の正面で組んでいた腕を解いた。「見せるつもりもないのに、試すような真似をしないでほしい」という私の主旨は伝わったようだが、続く老人の発言は私にとっても想定外であった。

「……」ここで強引に貴様が見せろと騒ぐようなら、これ幸いと出入り禁止の口実にしてやろうと思っていたのだが。それも出来なくなつたな」

「おい爺さん」

「なに、本気だから気にしなくてもいい」

「余計に気になるわ！」

香風老人は声を荒げる私を見て「あはは」と口をあけて笑う。私は内心で冷や汗をかきながら、老人のテストに対する自分の回答が間違っていないかったことに安堵した。

先ほど私が香風老人に対して語った内容に偽りはないが、すべてを語ったわけでもない。

私は自分の理性には何の自信もないが、打算を前提とした節制に關しては自信がある。女神と直接会話出来る機会が再びめぐってくるか否かは神のみぞ知るが、同じ場所でコーヒーを飲む機会を失ってなるものか。

語らなかつた私の下心を見透かしていたのか、それとも本気で気が付いていなかったのか。ともあれ香風老人は、私の回答に満足げに頷くと、分厚い原稿用紙の束を片付けた。

おそらくこの瞬間、私は初めて「ラビット・ハウス」に迎え入れられたのかもしれない。

「まあ悪く思うな。女神だの何だのと気持ちの悪いことを臆面もなく主張する人間を、私の常連に近づけさせろわけにはいかないからな」
「あの店長さん？ 僕もそれなりの常連だと思ってたんですけど、違ってたんですかね？」

「お客さん。初めてですか？ うちのコーヒーが自慢なんですよ」

「知ってるよ！」

香風老人はもう一度、口を大きくあけて笑った。

安易なフラグは、あなたの健康を損なうおそれがあります（その3）

梅雨は、夏の季語である。黴雨、梅の雨、荒梅雨、空梅雨、早梅雨、という具合に、とかく梅雨に纏わる言葉は数多い。そして梅雨が終わると、各地では本格的な夏の準備が始まる。春と秋が短くなったと言われて久しいが、おそらく、これだけは変わらないのだろう。

私はカビの生えた食パンをゴミ袋に放り込みながら、愚にもつかない考えを巡らせていた。

梅雨になる前に布団を干し損ねた私の部屋は、折からの雨の湿気と滲み出る汗によって、外よりもなお一層じめじめとしている。

そんなじとつとした部屋の中央にあつて、私はノートパソコンを前に、途方にくれていた。

大学生ならではの2ヶ月という長期夏季休暇を前に、最後のハードルである各種のレポートの課題は山のようにあるが、まったく手付かずのままだ。大体、こんな部屋では進むものも進まないと責任転嫁をしつつ、私は教科書や図書館から借りた本などをまとめて鞆の中に突っ込み、そして決断を下した。

「そうだ。ラビット・ハウスに行こう」

喫茶店でPCを広げ、コーヒーを飲みながらレポートを書く。いかにも大学生らしい行動であり、大学生のときにしか出来ない行為であると、私は遠足前の児童のようにウキウキとした気持ちで出かける用意を始めた。

それが私が蛇蝎のごとく嫌う、ス〇バで仕事をする意識高い系の仕事に類似した行為であることに気がついたのは、「ラビット・ハウス」の店内で座席についた、まさにその時であった。

*

時代劇やSF映画を撮る際、常に問題とされるのは、街の空を縦横無尽に走りめぐらされた電柱の存在だ。その点についても、この「木組みの家と石畳の街」は、すでに一部を除いて電線地中化工事の大半

が完了しているというのだから、この街はとにかく徹底している。

文学的な感受性など皆無に等しい私だが、梅雨の雨に濡れる街の景色は、それこそ映画の一場面のように、いつにも増して幻想的な趣がある。

この街に住み始めてからというものの、私は雨が好きになった。

何故なら、あの忌々しい耳長が雨宿りをするために身を潜めなければならぬからだ。いつもは我が物顔で街中を闊歩する耳長が、雨宿りのために駆けずり回っているかと思うと、実に清々する。

あれから私は性懲りもなく耳長とのコンタクトを幾度か試みていたが、そのすべてが失敗に終わっていた。こちらから妥協してやろうというのに、貴様がその態度を崩そうとしないのなら、この私にも考えがある。街を大資本の横暴から守る守護者だろうが、神聖にして不可侵な兎様だろうが、この私がそう簡単に屈すると思うなよ。

私は耳長への敵意を募らせつつ、腹の虫との相談を始めた。

家を出る前に見た携帯の時計によると、時刻は午前11時。何か腹に入れてから課題に取り掛かってもよいだろうと考え、私はラビツト・ハウスへの道のりを急いだ。

安物のビニール傘に当たる雫を観察する限り、さしてきつい雨でもないが、傘なしで濡れていくのにはためらわれる柔らかな雨であった。

私はとっさにある劇曲の場面が思い浮かび、その台詞が口について出していた。

「春雨じゃ、濡れていこう」

「月形半平太ですか？」

アメコミのように口から心臓が飛び出しそうになったが、私は何とかその動揺を押し殺すことに成功した。

振り返るとそこには女神が、私が一方的に地上に降りた女神と賞賛する青山女史が顕在していた。

青山女史は、いつもの学校指定の制服ではなく、カジュアルな私服姿である。彼女の名前と呼び方が同じ緑色のスプリングコートに、ゆつたりとした白色系のカットソーに下はパンツルック。靴はレイ

ンシユーズというやつか。白い布生地の傘が、彼女の服装に実に映えている。ファツションについては第二外国語のドイツ語並みに怪しい私だが、それでも青山女史のそれは、調和とバランスの取れた実に素晴らしいの一言に尽きた。

そして私が以前に予想していた通り、彼女は着痩せするタイプであつたらしい。一瞬だけ視界に入った我侷な胸元に、私は生きてよかつたと、自分をこの世に産み落としてくれた両親の存在に、心の底から感謝した。

「ずいぶんと古い作品をご存知なんですね」
「名作はいつ読んでもいいものですからね」

自然と並んで歩くような格好になつた青山女史に、そうドヤ顔で応じたものの、真つ赤な嘘である。

その頃、私が履修していた文学史概論のレポートの課題は、明治以降の劇作家の経歴をまとめることであつた。私の場合は『国定忠治』や『月形半平太』を著した行友李風（ゆきともりふう）（1877—1959）であり、つまり偶然に過ぎない。それも自分から選んだわけではなく、目ぼしい文学者は同級生にあらかた抑えられたことに慌てた私が、担当教官に泣きついて、提供文献も含めて事細かに指導を受けた結果である。もつともそんなことは口が裂けても女神に言うつもりはないが。

青山女史の目的地もラビットハウスであることを聞いた私は、これ幸いと必要以上に歩くスピードを緩めると、似非文学青年を気取りながら、女神との知的な会話を楽しんだ。

「この春からたまにお見かけしますが、お近くにお住まいなのですか？」

「はい。今年からこちらの街の大学に入学したもので。あの店のコーヒーが気に入っているんですよ」

爺はどうでもいいけどな！

マスターと青山女史との関係性を鑑みて、私は心の中だけでそう続けたのだが、距離が距離だけに1分もしないうちに目的地へと到着してしまう。普段から隠れ家的なものにしたいなどのたまっているくせに、どうしてもつと遠くの、それも人通りの少ない通いにくい路

地裏にでも店を作らないのだ。私は和製シヨーン・コネリーを罵倒しつつ、店の前に立った。

おっと、いかん。こんなところで立ちすくんでいる場合ではない。女神が雨に濡れてしまうではないか。

「すみません、こんなところで立ち尽くしてしまつて。お邪魔でしたか?」

「いえいえ、お先にどうぞ」

青山女史の言葉に私は天にも登る気持ちになつた。それにしても今日はなんと幸せな日なのだろう。女神—もとい青山女史から直々にお声掛けを頂き、これほど長い間(2分)話せることが出来たのだ。ひよつとして私は今日、すべての幸運を使い果たして死んでしまうのではないのだろうか?

私は嬉々として傘立てに傘を差し込み、ドアを開けた。

「……いらつしゃい」

阿呆かお前は。

香風老人の視線は、雄弁にそれを物語っていた。

*

私は頭を抱えていた。

食後に作業をするため「ラビット・ハウス」の右奥隅のテーブル席を選んだ私の前には、注文した2人前のナポリタン・スパゲティの入った大皿と、ペーパーナプキンに包まれたフォーク、そして「レディーファースト!」と書付けされたメモ用紙が置かれている。

注文したスパゲティと同時に香風老人から手渡されたその書付に、私は意味が分からず首を傾げた。そして老人が咳ばらいをしながら店の玄関に視線をやったことで、私はようやくその意味を理解した。

そういえば、私が入店して傘をたたむまでの間、ドアを支えてくれていたのは青山女史ではなかったか?

なるほど、レディーファーストとはそういう意味だったか。書付の内容に得心すると同時に、私はようやく老人の言わんとするところを察して頭を抱えたという次第である。ああ、なんということを私はし

てしまった……いや、しなかつたのだ私は！女神に話しかけられたことに有頂天となり、私は女神に対する忠誠と信仰心をアピールする絶好の機会を、みすみす逃していたとは！

私は自らの愚かさに絶望しつつ、しかしとりあえず腹が減っていたので、いつものように10分ほどで注文したものを平らげた。

「阿呆にはつける薬がないな」

客商売にはあるまじき暴言を披露しながらコーヒーを提供し、同じお盆で空になった皿を回収していった香風老人の背中に、私はあらゆる限りの罵倒をしようとして、その虚しさに気がついて自発的に止めた。

我ながら精神的に成長したものだと思自賛しつつ、私は相変わらず客が少ない店内を見渡す。

いつも窓際の席で新聞を読む老人、2時間近く芸能ニュースを話のネタにしてケーキとコーヒーで盛り上がるのが日課のご婦人方。まったく、毎日よくも話題が続くものである……や、あの男はいつぞやのカップルの片割れではないか。ついにふられたか。うけけけ！

私が後ろ暗い笑いを密かに響かせようとすると、ベルの音が店内に響く。そして私の視線の先で男の顔が綻んだ。

後は諸君が予想する通りの展開である。

つけ、面白くない。

私はその苛立ちも一緒に飲み干してやろうとコーヒーを口に運ぼうとして、そしてカウンター席から自分に向けられている視線の存在に、私はようやく気がついた。

「青山、何を見ているのだね」

「あの奥の席の方の顔が面白くて。こう百面相といえますか」

「目が穢れるからやめなさい」

「あの、マスター？それはどういう……？」

「知らなくてもよいことが、この世の中にはあるということだよ」

私は机に顔を突っ伏した。

*

黒歴史更新中の本日の失態を少しでも取り戻そうと、私はようやく

PCを広げて課題に取り掛かった。

課題といつても、総論や概論が中心の1年の前半課程では程度が知れている。担当教官から指定された書籍を読み込んでいたこともあり、私は2時間ほどで2本の課題を終了させると、3本目に取り掛かっていった。

内容は先ほど述べた行友李風に関するもの。いわゆる「チャンバラ物」の立役者ともされ、現代にまで続く時代劇への貢献も指摘されることが多い。

広島県尾道市出身の劇作家にして小説家である行友李風は、大正から昭和に掛けて活躍した。新国劇時代に彼の書いた『国定忠治』と『月形半平太』は傑作との評価が高く、ラジオやレコード、新聞小説に浪曲と当時のあらゆるメディアで上映され、戦中戦後を通じて、演劇や映画で幾度となくリバイバルされ続けた。

国定忠治はいわずと知れた江戸時代後期の侠客であり、行友以前から浪曲や演劇の人気主人公だった。それを「赤木の山も今宵限り」という彼の作りだした名台詞の効果もあり、その地位と人気を不動のものとした。

一方で月形半平太は実在した幕末の維新志士の名前を融合させた、いわば友利が作り上げた主人公である。先ほど梅雨空の下で私と青山女史が会話を交わしたのも、この作品が出典である。

それはどのようなものか。

舞妓の雛菊に傘を勧められた主人公が「春雨じゃ、濡れて行こう」。それだけを告げると、傘を差さずに出て行く。

説明してしまえば、ただそれだけなのだが、何故かこの場面は圧倒的に巷間に広く伝えられている。

国定忠治の「赤木の山も今宵限り」は、忠治を慕う子分との別れを告げる場面であるので、色々と解釈がしやすい。だが「春雨じゃ、濡れて行こう」に関していえば、それだけを切り取ると、まったく意味が通じない。男の照れを端的に表した場面だとか、雛菊から向けられた慕情への回答だとか色々な説があるというが、私にはどれも納得しかねるものばかりであった。

この点について私は、作者である行友李風は、この場面がそれほど有名になるとは予想していなかったと考える。何気なく書いた場面が名場面として取り上げられ、後付で解釈されたのではないかというものだ。

ある有名作家の子息が「作者の気持ちを応えなさい」という問題に「締め切りがー」と応えたという逸話があるが、そこから着想を得たものである。大体、作者の気持ちなど他人にわかるはずがないではないか。自分のことすら本当に理解しているとは言いがたいのに。

もつともそれは、私が男女間の間の恋慕や愛情といった細やかな感情表現に疎いために、そう感じるだけなのかもしれない。実際、先ほど青山女史と交わした会話の中に、そのようなものは小指一本ほども含まれていなかった。そして、今時珍しい原稿用紙に自らの思いの丈をぶつける青山女史ならば、どのような解釈をするのであろうか。

私はそのような愚にもつかないことを考えながら3本目のレポートを完成させると、USBメモリーに記録をとり、PCを閉じて大きく背伸びをした。

誤字チェックをしようとしたが、この疲れた頭ではどうせろくなことにはならない。店内中央のアンティークと思わしき置時計を見ると、時刻はすでに5時過ぎ。閉店まで1時間を切っていた。

日が暮れるのが遅くなったとはいえ、道理で薄暗いはずだと再び店内を見渡す。

そして私はカウンター席に青山女史の姿を見つけて、驚きのあまり声を上げそうになった。

青山女史はこちらに背を向けてカウンター越しに香風老人と話している。こんでおり、時折、原稿用紙を入れ替えて赤いボールペンで添削をしているのが、背中越しに伺えた。当然ながらその表情はこちら側からは見えないが、香風老人の表情から考えるに、相当真剣に話し込んでいるようだ。

私はコーヒーのお代わりをしようと考えていたが、それを止めた。

持ち込んだ資料の本はあらかた読みつくしていたし、さてどうして暇をつぶしたのか。私は椅子に背をつけて腕を組んで……うん。

組んで……

*

「……うん？もうこんな時間か。青山、暗くなる前に早く帰りなさい」
「あら、本当ですね。マスター、いつもお付き合ひ頂いてありがとうございます」

「なーに、どうせ暇だからな」

「ふふっ、相変わらず素直じゃありませんね」

「当たり前だ。お客様の注文や苦言には素直に耳を傾けるが、自分の作品には自分が誰よりもこだわらなければ、自分が納得するものは決して作れない。コーヒーであろうと、書き物であろうと、それは同じことだよ」

「あら？マスター、あのお客様さん寝てますよ？」

「……ああ、あれはいいんだよ。放っておけ。かなり集中して取り組んでいたようだし、疲れているんだろう。店内の片付けが終わってから、起こしてやるさ」

「そうですか。じゃあ、マスター。今日はありがとうございました。またお願いしてもいいですか？」

「暇な時ならな」

「……忙しい時があるんですか？」

「青山あ!!!」

*

その日、私はめでたくバイトを遅刻してクビになった。

勇敢な兵士と勇敢な將軍の素質は異なるし、優秀な選手が名指導者になるとも限らない（その1）

アンゴラは、アフリカ大陸南西部に位置する共和制国家である。人口は約2億5千万人。面積は南アフリカとほぼ等しく、国土の西岸を大西洋に面している。

その独立はアフリカの春といわれた1960年代よりも遅れた1975年。宗主国たるポルトガルが独立を認めず、独立戦争が長引いたためだ。宗主国が革命により手を引いた後も、豊富な地下資源や複雑な民族背景もあり、南アフリカや周辺諸国に旧ザイール国内の諸勢力も絡んだ複雑な内戦が、なんと2002年まで続いた。

アンゴラウサギは、そのアンゴラ共和国と一まったく関係がない。トルコ共和国を構成するアナトリア半島（小アジア地域）に、アンゴラ地方（現在のトルコの首都アンカラの周辺地域）がある。どうもこの地方の原産ゆえにアンゴラウサギと呼ばれていたらしい。諸説あるが、このウサギが世界各地に持ち運ばれ、その豊富な毛を効率よく採取するために何世代にもわたって交配させられたものが、現在の長毛種のアンゴラウサギになるのだそうだ。つまり蚕や羊と同じく、家畜として品種改良されたウサギということである。これにも諸説あるらしいので、興味のある方は調べていただきたい。

ちなみに私はまったく興味がない。

では何故、そんな興味もない事を長々と並べ立てたかというと

ふうふうふう
!!!!!!

威嚇する猫のように毛を逆立てたアンゴラウサギが、私の前に立ちふさがっているからである。

「……君は前世でウサギに対して、よほど恨まれるようなことをしたのではないか？」

香風老人の慰めとも揶揄いともつかぬ言葉を、まったく否定出来ないのが悔しい限りである。

ちくせう

*

ラビット・ハウスのマスターである香風老人は、コーヒーへの拘りが辟易とするほどに強く（だからこそ美味しいコーヒーを提供できるのだが）、あれこれと見栄を張りたがり、私に対する対応が氷水のように冷ややかであるという、実に幾多の問題を抱えた人物であるが、そうした両手の指を動員しても数え切れない欠点を上回るだけの、大変に善良な人物である（あと孫馬鹿）。

どれくらい善良かという点、自分にはまったく落ち度がないというのに、居眠りが原因でバイトをクビになった私に「起こさなかつた私にも責任がある」「君さえよかつたら店を手伝ってくれないか」と持ちかけるぐらいに人がよい。私が老人を嫌いになりきれない理由は、そこに尽きた。

悪いことは重なるものであり、私はクビになったものも含めてバイトをかけ持ちしていたので「片方がクビになっても、もうひとつがあるさ」と気楽に構えていた。そのため香風老人の誘いも、ありがたいとは思いつつも当初は断った。

ところがもうひとつの市場でのバイト―八百屋での商品の積み下ろしの際、よりにもよって最も高いメロンのぎつしり詰まった木箱（そんなものを何個も詰めるなど言いたい）を地面に落下させてしまい、あえなく耳長の餌としてしまった。

明日から来なくていいという解雇通告に、私は頭が真っ白になった。

ただでさえ生活費が割高なこの街において、人並みの学生生活を送るには両親の仕送りだけでは心もとない。これはいけないと、私はその足で履歴書片手にラビット・ハウスのマスターに土下座すると「安くてもいいから使ってください」と頭を下げた。

しやれっ気の通じるマスターは「いいとも！」と親指を立てて、私の採用を即断した。

いささかネタが古いのもご愛嬌というべきか。エン〇の神様における彼らのネタを覚えている人が一体どれだけいるだろうか。いや、

スリ○クラブは好きだけど、それは相当初期のネタのはずである。

ともかくにも、私はこうして糊口を凌ぐことが可能になったわけだが……まさかラビット・ハウスの店名の由来が、この家で飼育されている耳長？だとは、私も想像していなかった。てつきり、この街の有象無象の耳長に便乗しただけだと思っていたのだが。？をつけたのは、一見するとそれが毛玉にしか見えなかったからである。

その毛玉ーティツピー・ゴーなんとかかんとか……、略称ティツピーは、メスのアンゴラウサギであり、香風家の家畜、もとい愛玩動物である。なんでも紅茶の等級だか品種だかにそういうのがあるそうで、それから名前をつけたそう。どうしてあれだけコーヒーに拘りがあるのに、紅茶から名前をつけたのかは不明である。大方、幼少期の智乃ちゃんが「これがいい」と主張したからだろうと、私は目算をつけた。

さて智乃ちゃんである。

香風老人の孫である智乃ちゃんは、地元の公立学校に通う小学3年生である。年齢を聞き、私は随分と驚いたものだ。背格好こそ年相応なもの、中身は随分と大人びている。少なくとも私が8歳の時は、もっと阿呆だったはずだ。香風老人が可愛がるはずである。

私がラビット・ハウスでのバイトが決まった当日、たまたま帰宅した智乃ちゃんと2度目の対面を果たした。

「ど、どうも」

彼女は小さく頭を下げると、そそくさと2階の自宅へと上がっていった。出会いがアレだけに嫌われているのかと、私は柄にもなく落ち込んだが、少し困惑気味な智風老人は「家族以外には大体、あのような感じなのだ」と、その理由を教えてくれた。

もつともその直後に「私はお爺ちゃんと呼んで慕ってくれるがね！」と大人気ないドヤ顔をかましてくれたので、その配慮も無意味となったが。

だから一言多いんだよ……

ともあれ、この店のマスコットの存在として有名なアンゴラウサギは、初対面から親の敵のように私を嫌っており、私がホールに出れ

ば奥に引っ込み、私が奥にはいればホールに出るといいう有様。

実は智乃ちゃんと私には、動物に好かれにくいという意外な共通点があった。長所よりも欠点のほうが、時には共通性を通じた関係構築に役立つと考えていた私は密かに喜んだが、智乃ちゃんは私とは異なり、ティップピーには大変懐かれていた。

自分に唯一懐くペットが嫌う人間、それも年齢がかなり離れた人物と積極的に交流を持つ理由が、人見知りの智乃ちゃんにあるわけもない。たまに店の中や通路ですれ違っても、智乃ちゃんの頭の上に陣取るアンゴラウサギが、海栗か毬栗のように毛を逆立てて威嚇するものだから、挨拶以外の会話を交わすことすら出来ない。その度に智乃ちゃんが申し訳なさそうな顔をするのも、私にはいたたまれなかった。

私としては耳長に嫌われるのはいつものことだとあきらめていたが、小動物のような智乃ちゃんに避けられているというのは、精神的につらいものがあった。

*

さて、肝心の「ラビット・ハウス」における私の仕事についてである。

香風老人と同じバーのマスターのような制服を提供してもらい、子供のようにはしゃいだのもつかの間、私は早速、裏の倉庫整理を命じられた。素人にいきなりカウンターは務まらないし、メニューもまだ覚えていない段階でホール業務も無理だろうと考えながら、私は通路を抜けて、店の裏へと向かった。

「……なんだこれ」

そこは倉庫とは名ばかりの、物置小屋と化していた。

香風老人の拘りのあるコーヒー豆の置き場こそ、整然とネームプレートによる場所が決められて順番通りに並んでいたが、逆に言うところ以外はほとんど手付かずである。

昔に仕入れてそのまま放置されたと思わしき袋詰めの小豆（喫茶店だよな?）、20kgの業務用上白糖（1kg×20袋入り）は、業者が乱暴に積んだためか、その横にある小麦粉の袋の上に覆い被さるよ

うに崩れ落ちている。中双糖や黒糖（規格は上白と同じ）に至っては、元の場所とはかけ離れたところに置かれていた。

受領書を入れる箱はなぜか3つもあり、何か種別や業者ごとに分けられているのかと思いきや規則性は見当たらない。受領印のスタンプにいたっては4つも転がっている。

これは、一体どこから手をつけたらいいものか……

「すいませーんー！」

途方にくれていた私に、裏口から声が掛けられた。

はいはいどちら様ですかと顔を出せば、そこには明らかに肉体労働に従事すると思しき日焼けした男性が1人。彼は砂糖関係を納品する業者だと名乗った。内線電話でマスターに確認を取ってからOKを出す……上白糖って、まだあるよな？うん？中双糖ってそれも……って、あの奥の山って、まるまるそうじゃないか！……げっ！これも?!

「あの一ー」

「あ、はいはい、ちょっと待ってください。えーと、そこに置いて……いいの?」

「いや、私に聞かれましたも……」

それはそうだけど、いやでもこれどうするんだ。元の場所に置いたら古いのが下に、新しいのが上になるぞ。でもこれ、受け取らないと。

じゃあとりあえず台車に仮置きで……って、なんで台車に既に商品が乗っているんだ?! つかこれ、今日の日付じゃないか! こんなの受け取った記憶ないよ私!?

「すいませーん。脱兎運輸なんですけど、受領書にサインか受領印を願います」

え? 次の業者って、いや、なんで受領印押さなきゃいけないの? 私には貴方から商品受け取ってないんですけど……え? 表の冷凍庫? なにそれ、鍵は? え? 置いている場所を聞いてて、いつも勝手に入れている? そんなの確認しようがないんですけど。だって私、今日からですよ。なにか間違いないかも、私は責任取れませんよ。バイトだし……いや、冗談じゃなくて、これが本当だから困るんで……

「ラビット電力です」

え？電気屋さん？

「はい、ラビット電力です。来月の定期検査について確認したいことがあります。お時間をいただけないかと」

「一兎宅配便です！ラビット・ハウスさんあての商品があります！冷蔵3つに常温2つなんですが、いつもの場所に置いてもいいですか！」

「宇佐商会です。昨日お電話差し上げたように、新人の紹介も兼ねて営業のご挨拶と新商品の紹介に伺いました！香風店長はどちらに？」
「すみません、私こちらの配送じゃないんですけど、この甘兎庵ってどういけば……」

ちよ、ちよっ!!ちよ!!!

あと最後!!!

*

「っ、疲れた……」

時刻は既に午後の4時。私は服が汚れるのも構わず、倉庫の床に大の字で寝そべっていた。

あれから私は別口で6件の運送業者から商品を受け取り、それに関する商品のチェックをしてから受領印を押し、倉庫を片付けて古いものと新しいものを日付をチェックして入れ替え、4件の飛び込み営業についてマスターの判断を仰いだ上でお引取りを願い、さらに倉庫を片付けと、コマネズミのように駆けずり回った。

せつかく着たばかりの制服もホコリと粉にまみれて、ホール作業どころではない。

内線でその事情を事細かに説明して許可を得てから、せめて荷崩れた山だけでもなんとかしようと思い再び倉庫を上から下へ下を上へ、右を左へ左を右へと動いて走って、跳んで、運んで、運んで、また運んで……少なくとも大学生活が始まってから従事したどのアルバイトよりも労働したと断言出来る。

「おおい、生きてるか……おおい！綺麗になってる！」

倉庫の入口から香風老人の声が聞こえ、私の労働の成果を見て、弾

んだ声を上げた。喜んでもらえたのなら幸いであるが、私としてはどうしても経営者たる老人に、言つてやりたいことがあった。

「おお、ここもここも、おお！床が見え……うおっ!!な、ど、どうして床に寝ているのだ?!」

「マスター、今日の商品の受領書はそこにあるんですが、中双糖はまだ奥に3体ありましたよ」

「……え?本当?」

「あと丸鬼印のキャノーラ油の一斗缶も3缶ありました」

「嘘、どこにある?てつきり無いと思つて、今日来た営業さんに言つて丸鬼の取扱店に注文しちゃったよ。取り消さないよ」

冷や汗をかく店主に「あれですよ」と場所を指さす。

「1×15入りのダンボール入りの薄力粉の下に置いてありました。それと、この上白糖は賞味期限は来年の12月までありますけど、来年の11月までのものと逆さまに置いてありましたので、場所を入れ替えておきました」

「え?上白糖は明日来るはずなんだけど、まさか注文ダブった?」

安易にアルバイトなんか引き受けるんじゃないやなかつた。私は蘇ったゾンビのように上半身を起こすと、冷や汗を流すマスターを見据えながら告げた。

「マスター、夏になる前に倉庫を一度、整理しましょう」

勇敢な兵士と勇敢な將軍の素質は異なるし、優秀な選手が名指導者になるとも限らない（その2）

勘違いをしていただいては困るが、ラビット・ハウスのオーナー兼マスター兼バリスタ兼料理人である香風老人は、非常に多彩かつ優秀な人物である。

デザートのケーキ類こそ近くの洋菓子店から購入しているが、コーヒーはその殆どの工程が自家製であり、紅茶についても基本的には葉から抽出する本格派だ。パスタやトーストといった軽食類、パフェやパンケーキなど、店のメニューの内、9割が自家製である。これは喫茶店のみならず飲食店としては異例の割合だろう。バイトとしての最肩目を抜きにして、これだけのものを手伝いもなく1人で作れる料理人は、そうはいないに違いない。

そしてその全てが美味しい。賄い等で私が自分の舌で確認しているので、間違いない。

最近では接遇というらしいが、接客態度も実に品格がある。必要以上にニコニコすることもないが、かといって無愛想というわけでもない。身だしなみは常に清潔であり、頭髪も髭も整えられており、爪の手入れにも余念がない。店主として客の言動に干渉せず、かといって無関心ではない。店内で発生するあらゆる事象に鋭く目を光らせており、知りながら知らないフリをすることもあれば、問題を未然に防ぐために先手を打つこともある。

その全ては、自らが理想とする憩いの空間において、至高の一杯を提供するため。茶道における一期一会の精神を喫茶店において体現しようとしているのかもしれない。

こうした不断の努力と積み重ねにより、常連客の殆どはマスターのファンであり、新規のお客様であっても、マスターに魅了される人は多い。

しかし欠点が長所足り得るように、長所もまた欠点たりうる。

料理人としての香風老人は、品切れによるサービスの不徹底を恐れ

るあまり、必要以上に商品を仕入れる悪癖に繋がっている。自らが理想とするものにふさわしいものを出そうとする料理人としての創意工夫と誠実性は、食材や原料のコストが高止まりになる傾向がある。基本的に1軒の喫茶店が仕入れる材料など量が知れているため、どうしても営業所や仲卸業者としては価格を高く見積もらざるを得ない。そのため、ただでさえ高い原価に、さらにプラスされることになる。専門の事務員が別にいれば、客観的な視点からそれを指摘出来るのだろうが、「ラビット・ハウス」の場合は1人（つまり店主である香風老人）ですべてを兼任している。ホールはもちろん、掃除や片付けも基本的には自分でしているために、発注作業は「ながら作業」になりやすく、電話注文による二重発注が発生しやすい。

日々の売り上げ入力に、仕入れ伝票の会計ソフトへの入力、仕入れ価格のチェックに、締め日ことの集計といった経理業務、郵便物の分けと決済、保険の更新手続きや行政からの広報確認等々……

また加えて、おそらくこれが一番精神的なストレスになるのだろうが、仕入先への期日ごとの支払いや、資金繰りの算段、会計事務所との打ち合わせや、借入れの残る金融機関との返済計画の折衝といった経営者としての判断が必要になる業務。これらは誰にも肩代わりが出来ない、そして一番重要な仕事である。

取引銀行に当座貸越があるからと甘えていては、直ぐに足が出る。ガスや光熱水費は基本的に引き落としであるため、これを資金繰りに忘れていると大変なことになるし、これらはあくまで「毎月」のことだ。

決算月には会計士とも相談した上で法務局など各役所を走り回って膨大な書類を提出し、金融機関にその内容を説明して、来季を生き延びるためのつなぎ融資を要請するために、実現性に乏しい事業計画を説明するために飛び回る。固定資産税、住民税に地方税、1年間をまとめて支払う消費税等の支払いなどがある月には、さらにその負担が重くなる。

「よく今まで、ひとりでやってこられましたね」

「私もそう思うよ」

銀行や会計事務所との打ち合わせを行うため、ラビット・ハウスの定休日は水曜日である。香風老人は午前中に事務処理を片づけ、私は午後の授業が臨時休講になったこともあり、昼からは老人と一緒に倉庫の整理作業に従事していた。

ラビット・ハウスの棚卸（年間決算に使用する在庫調べ）は9月末だが、今回は二重発注を防ぐための臨時調査であり、倉庫整理も兼ねている。棚卸しの商品を記入する用紙をコピー機にかけ、クリップで留めるタイプの下敷き型バインダーに挟んだそれを、香風老人が持つ。私が商品の名前を確認して読み上げ、マスターが品名と数量を記入するといった役割分担をすると、片っ端から商品を数え上げていく。

「マスター、これはどうします?」

私はバイト中は香風老人を「マスター」と呼び、基本的に敬語で話しかけることを心がけている。こうした場面でな―な―で馴れ合うと、結果としてろくなことにならないのは高校時代のアルバイトで経験していたからだ。

そのマスターは倉庫整理を始めてから澁面を浮かべ続けていたが、私が奥から取り出した変色した袋に、さらにその皺を深くする。

「初めて見たな。そんなものを注文した記憶はないんだが」

「どうしてマスターが見たことがないものが、ここにあるんですか」
「……とりあえずは廃棄処分です」

マスターの判断に従い、私は期限切れの商品や空箱を外に運び出していく。さすがにコーヒー豆に関してはマスターは在庫を正確に把握していたが、それ以外のものとなると、まあ出てくるわ出てくるわ……

「今まで一体どうしていたのです?まさかどんぶり勘定のまま何年もやってこられたわけではないでしょう」

「去年までは息子がこの倉庫を管理していたからな。あれは締めまり屋でな」

「息子さん?ああ、智乃ちゃんのお父さんですか」

「そうだ」

よく喧嘩したものだど、香風老人はどこか懐かしそうに語る。死んだわけでもあるまいし、出稼ぎに出ていただけなのにどうしてそのよなことをいうのか。私にはどうにも理解しかねた。

「まったく、昔の付き合いだかなんだか知らないが、実の娘をほつたらかしてして傭兵稼業に戻るなど、あれの考えることはわからん」

何やら不穏な単語が聞こえた気がしたが、私は聞こえなかったふりをした。あまり他人の家庭の事情に深入りするべきではない。それにしても、ここは本当に日本なのだろうか。私は再び、その疑念を強めた。

「ところで最近、智乃ちゃんはどうです」

「それだよ」

よくぞ聞いてくれましたと言わんばかりに、香風老人は孫自慢を始める。

「どうやら「私がこの店を守る」と宣言した8歳の少女の決意に偽りはなかったようであり、あれから智乃ちゃんは祖父に対して、コーヒーに関する教えを請うようになったそうだ。

自身が一生を費やしたコーヒーについて、目に入れても痛くない孫が関心があるという事実が、香風老人には嬉しくてたまらないようだ。智乃ちゃんは私がアルバイトのシフトに入っていない時には、カウンター席に陣取りながら手とり足取り祖父の動向を注視し、気になったことがあれば直ぐに尋ねているという。なるほど、これ以上ない英才教育であろうと私は納得した。

しかしそれはそれとして、人見知りだからと頭では理解していても、智乃ちゃんに避けられているような気持ちになり、非常に落ち込んだ。

「智乃が継いでくれれば、ラビット・ハウスは20年、いやあと30年は安泰じゃな！」

「そうですね。そのためにはまずここを片付けないといけませんね……丸兎印のキャノーラ油が5缶、いや6缶」

使い切るのに何ヶ月かかるのでしょうかという本音半分、皮肉半分の私の発言に露骨に嫌な顔をするマスターを尻目に、私は商品の

チエツクを続けた。

*

「……取りすぎたな」

臨時の在庫調べを兼ねた倉庫整理と冷蔵庫、冷凍庫の片付けを終えた香風老人は、カウンターで頭を抱えていた。

その理由はほかでもない、倉庫から山のように出てきた業務用砂糖である。

先月砂糖を仕入れた時は黄金週間前ということで非常に忙しく、また冷凍の鶏肉業者が値段交渉のために来ていたこともあり、別の場所に一時的に仮置きをした記憶があると、マスターは青い顔で振り返る。

確かに砂糖はそう簡単に腐るものではないし、賞味期限は基本的に2年以上を前提としている。砂糖が贅沢品から一般嗜好品になるに従い、現在では国内の複数の大手商社が、河上の製造元から、河下の小売業者やメーカーの流通まで全てを掌握しつつあるので、短期間で極端に値段が変動するものでもない。仮に1ヶ月や2ヶ月程度、間違えて多く入れたところで、砂糖は料理であれ菓子であれ、必ず使用するものだ。そのため賞味期限切れになって廃棄することは、基本的に想定されていない。

どうにもそれが慢心の元であつたらしい。ラビットハウスの倉庫には、1年使つても使い切れないだけの上白糖と中双糖が積み重なつていた。

賞味期限は2年弱あるので問題ないといえはそうなのだが、これが在庫として来年の決算まで残り続けるというのは精神的に良くないし、何よりお客様に申し訳が立たない。黙つて出せばわからないとは思ふが、香風老人の料理人としてのプライドと誠実さが許さないのである。老人は根が真面目なだけに、真剣に悩んでいるようだ。

こればかりは営業判断であるので、私も口出することは出来ないし、許されるべきではない。人は立場と給与に応じた責任しか背負えないのだと、私は両親から叩き込まれていた。

「……仕方あるまい」

10分以上もそうして唸り続けていた香風老人であったが、ようやく顔を上げる。そして「ラビット・ハウス」のマスターは虚ろな目のまま、断腸の思いで決断したという自らの解決策を私に伝えた。

「あのババアを頼るしかあるまい」

*

「帰んな！」

「え、ちよ、塩お!!」

私もそれほど長生きをしたわけではないが、顔面にいきなり塩を、それも塩壺一杯程もあるそれをぶつけられる経験は初めてだった。

「ラビット・ハウス」の営業時間終了後、店から10分ほどの距離にある和菓子屋店舗兼喫茶茶屋の『甘兔庵』あまうさあんをマスターの代理人として訪れた私は、突如としてオーナーである老女からの手痛い洗礼を受けた。

私はてっきり余剰に仕入れた商品の買取を依頼するぐらいなので、相当程度関係の深い――少なくとも友好関係にある店だと考えていたのだが、それはどうやら大いなる勘違いであつたらしい。それにしても、マスターが連絡を入れると言っていたにも関わらず、この対応はどうしたことか。なにか連絡の行き違いがあつたのか、それとも人違いなのか。さすがに私は嚴重にその場で抗議しようとしたが、塩の量があまりにも多く、鼻や口に入り込んだそれが原因でひどく咳き込んでしまった。

「しゃろちゃん！あれがオニじじいのてしたよ！さあ、どんだんなげちやえ！」

「やだよー、こわいよー……」

涙でよく見えないが、どうも老女の孫と思われる少女達も一緒になって塩の塊を投げつけてきている。どうも人違いではなく、意図的な攻撃のようだ。

「ラビット・ハウス」と「甘兔庵」の関係がどんなものなのか知らぬままに引き受けた私もよくなかったのかもしれないが、それでもこの対応はあんまりではないか。地元では温厚篤実な聖人君子の変態紳士として知られる私も、これには堪忍袋の緒が切れた。

「いくらキロ単価が、げふっ、安いからといっ……がつくしゅん……し、塩をこんな粗末にすると、バチが、ふえつくしよん!!……あたり、ますよ……ふえつくしゅー!」

「心配しないでいいよ……どうせそれは外に置いた盛塩を回収したやつだからね!いつかジジイにぶつけてやろうと思つて貯めておいたやつぎ!」

「し、心配とか、そういうもんだいじゃ、ね、ねえだ、ふあつくしよええ!!」

「きつたないねえ!ジジイはどんな店員教育をしているんだい!」

「しゃろちゃん、ぼでーよ!ぼでーをねらうのよ!おうごんのみぎよ!」

「もうやだー!!わたしおウチにかえるー!!」

「ジジイに伝えな!頼みごとがあるのなら、バイトなんかやらせないで、自分で頭を下げに来てね!」

私は這々の体で、くしゃみを何度もしながら台車を押して逃げ帰った。

*

ラビット・ハウスに戻ってみると、マスターが私の様子とは全く関係なしに、何故か臨戦態勢へと移行していた。

どうも電話口で相当激しくやりあったらしく、その顔は普段の冷静さをかなぐり捨てており、血が上っているのか朱に染まっている。制服を肩まで腕まくりをして、背中の中心でクロスをするように襷をかけて固定。頭にはハチマキをして、どこから引つ張り出したものか竹刀を両手に持っている。今時、北関東の暴走族でも警察の視線を憚つて、もう少し大人しめの格好をするだろう。

「糞ババアに舐められてたまるか!」

私は出来る限りかわり合いになりたくなくなかったが、ともかくこのままではしゃべることすらままならない。私は外の水道の蛇口をひねると、顔に付着した塩を念入りに流水で洗い流した。

水で頭を冷やししながら、私はどうするべきか思考を巡らせる。

砂糖の在庫を見つけたのは自分だが、二重発注はマスターの責任で

あつて、バイトである私には何の関係もない。そして同じように、雇用する義務などなかった自分をバイトとして雇ってくれたことを考えると、頭から関わり合いになることを否定することは、どうにも不人情の不義理に思われた。

いかにもブラック企業でサービス残業を肯定する従業員のような発想が自分にもあつたことに、私はたいそう驚いた。しかし結局のところ、この爺さん突き放すだけのことが出ないだけなのかもしれない。私は自分の優柔不断さを情けなく思ったが、同時にそんな自分も、そしてこの老人も嫌いにはなれずにいた。

私は塩を洗い流すと、しかたなく香風老人に向かって、私が塩を投げつけられた理由の説明を求め、そして老人の奇行について尋ねた。

「あの糞ババア、こちらが下手に出ればいい気になりおつて！戦争だ！！」

「そのま、前…ふえっクシュ！…前にですね、あの、甘兎庵の主人に、何を言われたんですか」

香風老人は顔面を真っ赤に染めて、私に竹刀を突き付けて叫んだ。

「あのババア、ワシがせっかく『定価の1割引で上白と中双を200キロずつ売ってやる』と伝えたのに『また買いきすぎたんだらう！3割引だよ！』と言いつ返しやがった！前にババアが間違つて三温糖を買いききた時は、ワシが4割引で協力してやったのに、そんなことが許せるか！こちらから作業場に運ぶサービスもつけてやろうというのに、人の足元を見るとはあの因業ババア、商売人の風上にもおけない！前は2割で妥協してやったが、今回は絶対に譲らんど！戦争だ！いざ出陣、我に続けえい！」

「あ、私時間ですので帰りますね」

お疲れ様でしたー

*

翌日、マスターは上白220キロと中双220キロを引き取ることを条件に、前回と同じ2割引で、ただし基本価格は業界全体が6月に為替変動の影響で値下げする前の価格にすることで折り合いをつけたと、私に対して得意げに語った。

私の知ったことではない。

結局、塩を顔面に投げつけられた私が一方的に損をしただけではな
いか。ナメクジなら即死だったぞと憤慨していると、マスターは「糞
ババアからだ」と言っつて、甘兎庵特製の栗羊羹と芋羊羹を一本ずつ渡
してきた。「流石にやりすぎた」ということで、どうもお詫びのつもり
らしい。

私はどこか生き生きとしていた、砂かけ婆ならぬ塩かけ婆の姿を思
い出しながら、大きなくしゃみをした。

*

翌日、私は病院で流感の診断を受けた。

勇敢な兵士と勇敢な將軍の素質は異なるし、優秀な選手が名監督になるとも限らない（その3）

私が「ラビット・ハウス」でのアルバイトを始めて、まもなく1ヶ月になろうとしている。働き始めた当初は梅雨の真っ只中であつたが、今年の梅雨前線は北上が早かつたようで、この街を含んだ地域の梅雨晴れが発表されたのが2週間ほど前のことだ。蟬の鳴き声こそまだ数えるほどしか聞こえないが、街はすでに来るべき夏への備えを始めていた。

この店のマスターである香風老人も、夏季限定のアイス・コーヒーを提供するための用意に着手していた。最も当人は「そもそもコーヒーの本来の楽しみ方とは」だとかなんとか、ぶつくさ文句を言つていたが。

気候変動による異常気象や年々早くなる季節商戦の影響で、日本古来の四季の風情が乱れていると言われて久しい。それでも街を行きかう人々の装いが次第に薄着に変わりつつあるのは、初夏の始まりを告げる風物詩の一つである。古来から三寒四温と言われてきたように、一挙に季節が切り替わることはない。それこそ一斉切り替えの衣替えのように季節が移行すれば、風情もなにもあつたものではない。つまりとところ合法的に女性が薄着になつていくのを楽しめるようではないか。男として生まれてきた甲斐がないではないか。

私は店の裏口からぼんやりと外を行き交う人を眺めながら、そのようなことを考えた。

いくらこの店が暇とはいえ、ラビット・ハウスも昼食時にはそれなりに混雑する。賄い飯を胃袋に掻きこんだ私は、少し遅い昼休みを潰す為に、自分の指定席となりつつある裏の勝手口へと向かつた。

店の中ではあの忌々しい毬栗耳長と出くわす可能性がある。その点、勝手口であれば運送業者や営業にも対応しやすいし、内線電話での呼び出しにも対応可能。それにお客の目を気にすることもない。私は胸元の蝶ネクタイを緩めると、日毎に熱を強める太陽光を避ける

ように裏口の屋根の下に陣取り、椅子として愛用している木箱を逆さにして腰掛けた。

この木箱は在庫調べの時に私が見つけたもので、側面の絵や文字を見る限りおそらく海外産のワインが入っていたらしい。中にいくつもの仕切りがあり、作りも丈夫なところをみると、相当高級品だったようだ。どうして喫茶店にワインの空き箱があるのかとも思ったが、私はマスターの了承を得て、この木箱を自分専用の椅子として使用する許可を得ていた。

選挙権が引き下げられたというのに、酒と煙草の年齢はなぜそのままなのか。此処で煙草でも吸えば、絵になるかもしれない。私は一瞬そのようなことを考えたが、嗜好品で自分を飾るという考え方が、いかにも中二病めいたものではないかと考え、自分の頭をブルブルと、あの忌々しいアンゴラウサギの水切りの如く振った。

この「木組みの家と石畳の街」は学生には優しくない街であるとい前に述べたが、学生向けの短期のアルバイトでも同じ傾向にある。

ただでさえ大手のチェーン店が極端に少ないため、これらのアルバイトは大学生の間で奪い合いになる。地元資本の飲食店や小売業は、減多に求人募集していないし、出来れば身元の確かめやすい地元出身の学生を雇用したいというのが人情というもの。ただでさえ厳しい前提条件の中、私は後述する理由からとにかく手取り早く金を稼ごうと、短期の割のいいものを選んで、あらゆる職種を渡り歩いたものだ。

そう考えると、地元資本のラビット・ハウスにアルバイトとして潜り込めたのは、私は運が良かったのかもしれない。私としても当初は「次」が見つかるまでの繋ぎのつもりであった。ところが労働条件の緩さもあり、私としては異例の長期勤務となっている。

その間に私は倉庫整理をしたり在庫調べをしたり、商品の納品作業に従事して倉庫の片付けをしたり、店のマスコットであるアンゴラウサギに威嚇されたり、塩かけ婆とバトルをしたり……あれ？掃除しかしてない？

ともかく忙しく働いているうちに、大学の夏期休暇が始まった。

私が蓄財に励んでいた理由は、大学の同級生との遊興費にあてるつもりだったからである。ところが私は肝心の計画の段階で、季節外れの流感によって乗り遅れてしまった。おまけにオリエンテーションにおける「奉仕活動」発言により女子にそっぽを向かれる状況が続いていた事もあり「お前が来ると女の子が逃げる」として、丁重なお断りをくらってしまったわけだ。

ちくせう

ともあれ遊びに行くつもりで貯めていた資金を生活費に回せるとあって、懐にいささかの余裕が出来た今となつては、新しいバイトを探すにしても熱が入らない。また香風老人は、私の扱いこそ極めてぞんざいであったが、シフトに関しては「手が空いている時に入ってくればいい」と労働時間は申告制で、希望すれば賄いも出してくれるという破格の条件である。

神様・仏様・香風様である。

ところが実際に働いてみると、中々どうして難しい職場であるということも見えてきた。

確かに働いた分は必ず給与を渡してくれたし、賄い付きなのはありがたい。

問題は肝心の業務内容にある。裏の倉庫を例に上げると、ひとつ納品業者を片付けければ2箇所整理したいところが見つかり、2箇所の整理が終われば3つの在庫が気になるといった具合だ。

マスターからは「そんなに給料も払えないんだから適当でいい」と、これまたありがたいお言葉を頂いている。そんなことだからいつまでたつても倉庫が片付かないのだと思いつつ、私はふと考えた。

実家にいる時、私はよく母親に「あんたは自分のお気に入りのところしか片付けない！」と、私の散らかった部屋と、きれいに整理された本棚を見比べて怒られたものだ。

実際、これまでお世話になったバイト先では、これほど熱心に働いたことはない。

では私は「ラビット・ハウス」を、今の職場を気に入っているという事なのだろうか？

*

あの忌々しいアンゴラウサギの毛玉の故郷とされるトルコには「一杯のコーヒーにも40年の思い出」という諺がある。

トルコにおいて40という数字は、日本でいう八百八町とか八百八橋等で使われる「八百八」と同じ「とにかくたくさん」「数え切れないほど多くの」という意味である。すなわち「一杯のコーヒーを馳走すれば、それだけで40年分の長い思い出に匹敵する。コーヒーを飲むたびに、その思い出が蘇る」ということらしい。

日本の「情けは人の為ならず」という意味に近いとされるが、正確なニュアンスはもう少し複雑なものらしい。民族的、あるいは文化的な差異を考慮せずにこの手の諺を使うと、しばしばすれ違いが起こりやすい。同じ文化圏で育った男女ですら結婚生活が破綻するのだから、むべなるかなである。

さてラビット・ハウスには今日も40年の思い出を求めて、千客万来商売繁盛……

というわけではない。

店のオーナー兼マスターである香風老人は、隠れ家的な静かな雰囲気、の喫茶店を理想としている。忙しい日常の中の一服の清涼剤として、厳しい現実には追われる現代人にひと時の安らぎとコーヒーを。第2の我が家としてくつろいで欲しいそうだ。

なるほど、結構なことである。その理想が実現しているとあれば、別に私があればこれ言う筋合いではない。香風老人がバックヤードの事務所で、返済が苦しいだの金がないだのと栄養ドリンク片手に電卓を叩いていなければ、実に説得力があっただろう。

「嫌味か貴様！」

請求書の山を片付けながらも、決して私の質問を「つまらない事」とは切り捨てないのは流石である。

私がマスターを尊敬している点があるとすれば、そうした裏方の苦労があったとしても、一旦店頭に立てば微塵もそれを感じさせないところにある。アヒルの水かきというか、見栄っ張りというか。痩せ我慢もここまで徹底すれば大したものだと思う。

自分の仕事に対する良い意味でのプライドと責任感。それを見てみると、生来のなまけものである私ですら、おなぎりな仕事はしないでおうという気にさせられる。最も本人にそんなことを言えば、またいつものドヤ顔をするに決まっているので、絶対に言ってはやらないが。

隠れ家がどうだのといいながらも、この店には意外と若い女性客が来店する。女三人で姦しいとはよく言ったもので、彼女達が来店されると、店の雰囲気は一挙に賑やかなものとなる。大学生や高校生、あるいは中学生と年代は様々だが、彼女達のお目当てはマスターだというのだから、世の中は理不尽だ。

そんな彼女達は決まってカウンター席に地蔵のように並んで座ると、異口同音にトルコ・コーヒーを注文する。いま来店された私服の御客様方―おそらく大学生の集団も、そうした例に漏れない。

「少々お時間を頂戴いたしますが、よろしいでしょうか」

そう言うと、マスターはトルコ・コーヒーの用意を始める。

このトルコ・コーヒーだが、コーヒー豆の種類のことではない。コーヒーの淹れ方のことだ。400年以上の歴史を持ち、ユネスコの世界文化遺産にも登録されているというのだから、日本人としてはコーヒーにかける情熱に驚くしかない。

トルコ・コーヒーの起源は、オスマン帝国のイエメン太守がコーヒー豆をスルタンに献上した際に一緒に伝わったとされ、オスマン帝国の影響を受けた欧州側の地中海諸国や小アジア、中東アラブ諸国に広まった。現在ではそれぞれの地域の名前で呼ばれている。特にムスリム諸国は飲酒が禁止されているため、煙草と並んだ貴重な嗜好品として広く伝わったようだ。

トルコ・コーヒーを簡単に説明すれば、水から煮立たせたコーヒーの上澄みを飲むという、極めてシンプルなものだ。

具体的には、まずスプーン1杯づつの粉にしたコーヒー豆と砂糖を用意する、カップ1杯(約100mL)の水を小鍋で沸騰させる。この際、専用の道具があれば良いが、なくても構わない。そして沸騰させた水を弱火にして、あるいは沸騰する前の水、もしくは水を入れる

前の鍋に粉と砂糖を入れ、沸騰寸前まで沸き立たせる。吹きこぼれる寸前、泡が全体を覆うように幕を貼れば、火を止める。スプーンで泡をすくい、カップに入れる。残った中身の上積みだけを、慎重にカップに注げば完成だ。

濃さや甘さを調整したければ、スプーンの大きさを変えたり、粉と砂糖の投入のタイミング、大鍋を使うやり方など地域によって、あるいは個人の好みによって入れ方は多種多様。注意すべきは鍋の中身を全部、カップの中に入れてはいけないという点であろう。溶けきれなかったコーヒートの粉が溜まっているため、飲めたものではなくなるからだという。

閑話休題

小鍋をいくつもガス台に並べて、マスターが用意をしている間、彼女達はピーチクパーチク、きやいきやいわいわい騒ぎながらコーヒートを待つ。私なんぞは大鍋で一挙に入れてしまえば楽なのにと思うが、さすがにマスターの逆鱗に触れそうなので進言したことはない。

手際よくスプーンを駆使し、カップに注ぐと、マスターは待ちかねた彼女達に何やら気障ったらしい言葉を添えて渡す。尻の痒くなりそうな台詞は、ここでは紹介しない。

自らのコーヒーを楽しむ女性たちを見守るマスターの柔らかい視線は、私に対する邪険なものとは同一人物とは思えない。おそらくジキル博士とハイド氏を胸中に飼っているのだろう。

彼女達は飲み終えると、空になったコーヒークップをソーサーごとマスターに渡す。するとマスターはカップを天地逆さにひっくり返し、しばらくしてから元に戻す。カップの底をしげしげと覗き込むマスターに、女性達は興味津々だ。

「そうだね。君の探しているものはおそらく君の部屋のお風呂場か、彼氏の部屋にあるよ。それと誕生日は来週かな?」

「え、嘘、あんた彼氏いたの?!」

「いや、え、ちよ、マスター!なんでわかったの?!」

「やだもー!何で隠してたのよー!」

やだもー!マスターったら、適当なことばかり言って、女の子の

気を引こうなんてー!

「何か変なものでも食べられたのですか?」

……女神に聞かれた。死にたい。

*

カフエ・ド・マンシー、直訳すると「コーヒー占い」である。

その発祥は中東欧とも欧州とも。種類や占い方に解釈と、こちらもトルコ・コーヒーのように多種多様であるが、共通しているのは飲み終わったコーヒーカップの底に残った文様で運勢を占うという点だ。

先の女性達が揃ってトルコ・コーヒーを注文していたのは、この入れ方だと底に粉が残りやすいので、より多様な分析が可能になるからである。マスターはトルコ・コーヒー注文後のサービスとして、この占いを無償で提供していた。

文明人の私は「そんな物で何がわかるのか」ときわめて懐疑的であるが、そんな事よりも私が理解に苦しむのは、この店のマスターがその占いの名人と呼ばれ、若い女性にひそかな人気があるという点である。あんなパチもん臭い和製ション・コネリーの言うことをまともを受けて一喜一憂するとは、日本の将来を担うお母様方は大丈夫なのか。

もつとも私としてはカウンター対応に追われるマスターに代わり、青山女史にブルーマウンテン・コーヒーを献上する名誉ある役割を賜ったので文句はないが。

しかし青山女史という人は、実に神出鬼没である。先ほども、いつの間にか私の背後に佇んでいた。ドアが開けばベルが鳴るはずなのに、今回もそうした気配はなかった。私としてはそれほど鈍感ではないと考えているので、不思議で仕方がない。

ひよつとすると青山女史は忍者なのだろうか?しかし女性は秘密の多いほうが魅力的ともいう。つまり女神なので何の問題がない。私はそう結論付け、彼女の机にコーヒーを置いた。

「ありがとうございます」

「騒がしくて申し訳ありません」

私としては気を使ったつもりで添えた言葉であったが、青山女史は

口元に手を当てて笑う。

「占いの嫌いな女の子はいませんかね」

「貴女もですか?」

「私は、そうですねー」

そう言つてこてんと首を傾げて見せる我が女神。

可愛い。

衣替えの移行期間ということもあり、青山女史は冬服と夏服の中間のような格好をしていた。私服も素敵だったが、期間限定の制服も実に尊い。女神は私のような下賤の人間の問いかけにも真摯に考慮し、自らの神託を告げた。

「当たったら面白いですし、当たらなくても面白いと思います」

なるほどその通りである。当たるも八卦当たらぬも八卦。古代のシャーマニズムではあるまいし、占いを信じるか信じないかではなく娯楽として消費する。実に合理的かつ茶目っ気のある回答だ。さすが女神。略してさすめが。

「店員さんはどうなんですか?」

「大きな声では言えませんがね、泡だの粉だのので何がわかるというのは。ただのサービスだからいいようなものの、金を取れば詐欺ですよ、詐欺」

私のあけすけな回答に、女神はころころと鈴を転がすように笑う。

「でもマスターの占いはよく当たると評判ですよ?」

「それは長年の接客業で培われた、無意識の観察眼によるものでしょう」

私はひとつ種明かし——というよりも、自分の考察を披露する。

例えば先ほどの女性ならば、探し物があるという点は、左手薬指の指輪の跡でわかる。左手の薬指は願いや愛を深めたい時に指輪を通すもの。あれほど強い跡が残るといふのは長期間つけていたのだろうし、外したのはごく最近ということになる。つい最近まで彼氏かそれに類する大事な人がいたのだろうが、顔に暗い色がなかったので別れたわけではない。そして大事な指輪を外すなら自宅か、あるいはその大事な人の部屋……とまあ、このようになる。

もつとも私はしばらく観察して考えてから、しかもマスターの占いという結論と反応を見てから結論に至ったのだが、これを無意識で即座にやってしまうのがマスターの「占い師」としての腕を証明しているのだろうか。

私の解説を聞いていた青山女史は、当初こそあつげにとられたような顔をしていたが、最後まで聞き終えると「お見事です」とパチパチと手を叩いた。女神に褒められた。私の人生、今死んでも悔いはない。

「推理物、お好きなんですか?」

「まあ、人並みには……」

西村京太郎、内田康夫、東野圭吾……いざ自分の中で名前を挙げてみると、いかにもそれらしい作家の名前しか出てこないのが悲しいところである。氷菓の作者の名前は何だったかな。漫画も含めるのなら青山剛昌は……あれは推理物というより、コナンというジャンルと考えたほうがいいかもしれない。

「別に占いに意味がないとか、そういう身もふたもないことを主張するつもりはありませんけどね」

私は頭を掻きながら、マスターのカフェ・ド・マンシーを擁護する意味合いも込めて続けた。

「占いを信じるのも自由なら、信じないのも自由です。でも私は自分の将来が、自分のどうにもならないところで全て決められているかもしれないという、生悟り坊主のような諦観染みた運命論は、あまり好きじゃありません」

「自分の意思とは関係なく決まることもありますよ?」

「確かにそれは否定しません。極端な話、生まれる時代も場所も選べませんからね」

今から考えると、当時の私は青山女史に良い格好がしたいばかりに、聞きかじりの知識や人生観を継ぎはぎにしたものを臆面もなく話していただけである。自らの血と汗による体験の伴わない知識ほど、薄っぺらいものもない。

「自分の選択と決断だけで世界が変えられると信じているわけでもあ

りません。だけど限られた環境の中でも、自分の決断によって選択肢を増やしたのなら、必然的に占いの結果も代わってくるとは思いませんか？」

過去も当時も、そして今も周囲の環境に流されるまま、これという努力もしてこなかった自分の言葉であることを思うと、今でも顔から火が出そうだ。

「……そうですね。きっとそうだと思います」

薄っぺらい私の言葉に感銘を受けたためではないだろう。青山女史は一瞬だけ驚嘆したように、その目をくるりと見開いて私の顔を凝視する。そしてすぐさま考え込むように、視線を机に伏せてしまった。

何か気に障るようなことを言ってしまったかと慌てたものの、ちょうどその時、カウンターのマスターが視線で時計を指す。見れば『甘兎庵』に砂糖袋を運搬する予定時刻が迫っていた。

私は青山女史に一言断りを入れてから、急いで裏の倉庫へと向かった。

*

引越し作業や八百屋でのバイトの経験から言わせてもらうと、人間その気になれば20キロの袋は流れ作業（バケツリレー方式）でも何とか持てるが、30キロとなると途端に難しくなる。たかが10キロ、されど10キロだ。

香風老人が二重発注を行った上白糖や中双糖は、スーパーで販売されている1キロの袋が、ペーパーバックに20個入ったものである。しかしこれを油断して手だけで持ち上げようとすれば、たちまち腰をおかしくしてしまう悪魔の荷物だ。私は慎重にしゃがみこむと、腰から持ち上げるようにして上白糖の紙袋をひとつずつ運び上げ、表に置いた折りたたみ式のスチール台車に5袋を積載した。

まだ台車の重量的には5袋ほどつめるが、あまり積載しすぎると、路上で何か問題発生した時に身動きが取れなくなるし、一度にたくさん運んでも、相手が荷受け出来ないだろう。

私は電話越しの塩かけ婆の怒声と剣幕を思い出して辟易としなが

ら、ボールペンで仮伝票を書く、それを手に甘兎庵へと向かおうと
した。

「ちよつと君」

「はい、なんで……」

私が振り返ると、そこにはえらくダンディな迷彩服の男性が大量の
荷物を背負いながら立っていた。

……、本当に日本なのかなあ……

ある映画の中で主人公の母親が「黒は女を美しく見せる」と言ったらしいが、賢さについては触れていなかったと思う（その1）

人類発祥の地とされる東アフリカのエチオピア連邦民主共和国には「コーヒーのあるところに平和と繁栄あり」という言い伝えがある。そもそもコーヒー豆を実らせるコーヒーの木は、被子植物のリンドウ目アカネ科「コーヒーノキ」属に属する植物の俗称である。

まんまやねー

このコーヒーノキ属の植物の実を採取して、その種だけを取り出して焙煎加工等、さまざまに人の手を加えたものが、コーヒー豆として出荷されるわけだが、このコーヒーノキ属は非常に寒さに弱い。そのため赤道を中心とした南北わずかの緯度に属する熱帯地域でしか栽培が出来ない。国民的お巡りさん漫画でも一時期やたらと取り上げられていた「コーヒーベルト」である。

その地域は、大雑把にメキシコ以南から南米の山岳地域、アフリカ大陸の中央部、南インドに東南アジアと、見事に発展途上国と重なる。これらの国々にとっては国内産業育成を通じた雇用創出に繋がると同時に、貴重な外貨獲得手段でもある。

前述の理由で競争相手は限られているし、麻薬などの危険な商品作物に比べると需要も供給も安定しており、かつ安全。麻薬を摂取する人間は限られているが、コーヒー愛好家は世界中に存在している。何より政府を敵に回す必要もない。まさにエチオピアの言い伝えにある通り「コーヒーのあるところに平和と繁栄あり」といったところか。「また一段とガラクタが増えたな親父……何だこれは？」

「ガラクタとはなんだ！ガラクタとは！お、それか？これはこの間の^古ブロカント^市で見つけた掘り出し物でな！なんでも戦前のオランダの東インド会社総督府で使われていたという、水出しコーヒーの機械なのだ。ワシはダッチ・コーヒーには懐疑的だったのだが、これで入れると、ロブスタ種の苦味が緩和されて……」

「これ、裏に1983年と彫られてるんだが」

「……と、とにかく。お客様に満足するコーヒーを入れるためには日々努力と研鑽が必要なのだ！断じて無駄遣いではない！」

「努力は努力でも必要なのは経営努力なんじゃないか？また砂糖をこんなに買い込んで……」

「それは今は関係ないじゃろが！」

……平和？

*

「新しいバイトさんかい？」

「はい、確かについ最近入ったバイトですけど」

「ラビット・ハウス」の勝手口に現れた迷彩服の男性は、どこかで見たような顔の造作をしおり、どこかで聞いたようなバリトンボイスをしていた。はて、初対面なのは間違いないのだが、どこかであった気がするのは何故なのか。既視感の正体がわからずに首をかしげる私に対して、男性は自己紹介を行った。

「香風^{かふう}タカヒロです」

「ああ、マスターの息子さんでしたか」

「ラビット・ハウス」のマスターである香風老人の息子であり、出稼ぎ(?)に出ていたという智乃ちゃんの父親、それが男性の正体であった。初対面であるはずの私が男性に既視感を感じたのも道理というものである。何せ毎日のように、男性の親族と顔を付き合わせているのだ。

勝手知ったる我が家と店内に入ったタカヒロさんに対して、マスターは開口一番「連絡ぐらい入れんか」と怒り出し、学校から帰ってきた智乃ちゃんは「おとうさん！」とその胸に飛び込んだ。それを見ていたマスターの機嫌が再び悪くなったのは、おそらく気のせいではあるまい。

そのタカヒロさんは、白髪交じりの頭に、鼻筋の通った顔立ち。鼻の下とあご全体に薄い髭を生やしており、その目は優しさをたたえながら、同時に意志の強さを感じさせる。身長は男性の平均身長に近いが、その胸板は服の上からでもわかるほど引き締まっている。ボディ

ビルダーのようなわかりやすい筋肉というよりも、無駄な肉がついていないのだろう。低く艶のある声に囁かれれば、男性経験のない女性はこちらと参ってしまうかもしれない。

父親である香風老人とは路線が異なるが、イケ面といってもよい。俳優で例えるなら竹野内豊をうまく老化させたというか。和製の竹野内、では日本語としておかしいな。

ラビット・ハウスの竹野内豊。うん、これだな。

「ここはコーヒーを提供する喫茶店であって、男の魅力を売り込む筋肉執事喫茶ではないわ！」

事務作業や経理処理、倉庫整理などの負担となっていた業務の多くを、息子であるタカヒロさん（漢字を聞きそびれた）に任せられるようになった香風老人であったが、むしろ以前より不機嫌そうにブツブツと文句を言続けている。それをまったく接客態度に反映させないのは、やはりたいしたものだが。

倉庫整理をしていたタカヒロさんに、その理由を尋ねてみたところ「拗ねてるんだよ」という、思いもかけない回答が返ってきた。

「息子さんのタカヒロさんに、お孫さんの智乃ちゃんをとられたからですか？」

「ははは、それもあるだろうけどね」

タカヒロさんは闊達に笑いながら額に流れる汗を、首に掛けたハンダタオルで拭いた。しかし何をしていても絵になる人である。こちらはすでに上半身はシャツ一枚で、オーブンに突っ込まれた子豚の丸焼きのような汗と、締りのない腹をさらしているというのに、タカヒロさんは青春漫画の世界から飛び出してきたイケ面主人公のような非現実的な爽やかさを無駄に振りまいている。

何故だ、どこで差がついた。

「身内の鼻根目じゃないが、うちの親父はバリスタとしても料理人としても優秀だからね」

確かに優秀でなければ、タカヒロさんが留守の間、1人で店を切り盛りする事は出来なかっただろう。むしろ私がない時はどうしていたのか、想像すらつかない。被雇用者でありながら雇用者をあれこ

れ評価するのは僭越であるが、たいしたものだと思う。

私がそう口にするのと、タカヒロさんは再び流れる自分の汗を拭いながら続けた。

「職人としての能力の高さは、プライドと比例するものだからね。悪く言えば器用貧乏ということになる」

「ああ、なるほど。完璧主義者というわけですか」

タカヒロさんの父親評に、私は月末や締日に電卓を叩きながらパソコンとにらめっこをしていた香風老人の後ろ姿を思い出して得心する。

「プライドが高いだけなら、煽って祭り上げてしまえば、人に任せるということも出来たんだろうけどね。だけど親父は、それ以上に責任感が強いんだ。自分の腕に自信があるし、実際に仕事は出来るんだよ。事務処理でも経理作業でも料理人としても、それを人並みに以上にやってしまえるんだな」

「二兎を追うものは、一兎も得ずといますけどね」

「親父は二兎を捕まえたなら三兎を探したくなる完璧主義者だからね。人に任せるぐらいなら、自分でやってしまいたい性質というのは、悪く言えば人を使うのが下手ということさ。山本五十六の『やらせてみせ』が出来ないんだな。それは完璧主義者の親父自身が、一番不満だったと思うよ」

タカヒロさんは「困った親父だよ」と言いながら肩をすくめたが、その態度には父親に対する敬意が溢れていた。そうでなければ、母親を亡くして多感な時期の娘を預けて、長期間の出稼ぎ？には行けなかつただろう。そのあたりの事情は、私としても深く聞くつもりもないが。

黙々と作業を続けていると、私に気をつかってかタカヒロさんが話題を振ってきた。

「……親父の相手は大変だっただろう?」

「ええ、それはもう大変でした」

直球で答え返した私に、タカヒロさんも作業をする手を止めて「困ったものだ」と苦笑する。

「ははは、そうかい。でも私はあの親父が、よく人を雇って長続きしていると感じているんだ。親父は自分にとことん厳しい人なんだが、他人の仕事にも自分と同じぐらいの責任感と姿勢を求めるからね」

香風老人は事細かに指導するため、バイトが長続きしないのだという。聞けば1月以上バイトが続いたのは、私が初めてかもしれないとのことだ。その理由を私自身考えてみると、私はそもそもが無神経であるし、香風老人の仕事の段取りの説明と業務命令以外の説教や小言は基本的に聞き流しているのです、その点では適任かもしれない。

私がそう正直に答えると、タカヒロさんはまたもや白い歯を見せて笑った。

その笑い方は香風老人と瓜二つであつたと付け加えておく。

*

全国高等学校硬式野球大会の地方予選も順調に日程をこなし、続々と代表が決まり始めた8月の初頭。私は砂糖の乗った台車を必死に押しながら、甘兎庵へと向かつていた。タカヒロさんの帰還により、一時中断していた上白糖と中双糖を配達するためだ。

塩かけ婆—もとい甘兎庵の女主人である宇治松^{うじまつ}夫人からは「このくそ忙しいときにジジイのところからお願ひしてきた話なのに、爺の都合で一時中断とはどういうことだ!」という抗議の電話に、私としては電話の受話器をジジイ—もとい香風老人に渡すだけである。2人の間でどのようなやり取りがかわされたかは知らないが、私がこうして汗を流しながら炎天下の中を運んでいる以上、問題はなかったのだろう(と思いたい)。

「ちのーちゃんのためならー、地の果てまでー、爺さんのためなら、しつたことかーつと!」

替え歌を歌いながら台車を押す私に、観光客が奇異な視線を向ける。しかし私としてはそうでもしないと、こんな炎天下の中で仕事をする気になれないのだ。

砂糖の袋に汗が落ちないようにカバーで覆いをかけ、それが崩れないように慎重に、かつ力をこめて台車を押し続ける。歩いていけば10分ほどの距離だというのに、この町は文字通りの「木組みと石畳の

街」なので、台車を押し進むには向いていないのだ。

さて木陰で3度目の休憩をしようかという私の視界に、ラビット・ハウスで見慣れた制服が飛び込んできた。

「先輩ー、どこですかー！早く出てきてくださいー！」

私の記憶が正しければ、女神と同じお嬢様学校として有名な女子高等の制服であるはずである。しかしこんな炎天下の中、傘もささずにあんな大声で……って、足元がふらついてないか？

おいおい、それ以上叫ぶな！とりあえず日陰に入れて……ええい、もう。世話の焼ける！

私は急いで台車を道路の端に寄せてストッパーを止めると、その女学生に駆け寄って声をかけた。

「ちよつと君」

「はい、何ですか？ナンパですか？すみません、私、汗っかきの人は生理的に無理なんです」

振り返った途端、そこにいた見覚えのない顔（つまり私だ）に怪訝な表情を浮かべていた女学生は、私の想像した通りの青白い顔のまま、いきなりのマシンガントークを繰り出した。それも初対面の相手に対して、ひどく威勢がいい内容である。

これだけ言葉を捲し立てるだけの元気があることには安心したが、何でいきなりフラれなきやいけないのだろうか。この自意識過剰のぺちやぱいめ。こちらは仕事の手を止めてまで、わざわざ声を掛けてやったというのに。

私はこの無礼な女学生を、正面から睨んでやった。

黒のショートカットに化粧つ気のない顔。綺麗というよりも可愛といった感じのタイプであり、制服はこの暑さの中でも着崩すことなく校則通りに着ている。青山女史もそうだが、彼女もどうにも今時の女子高生らしくない。浮世離れしていると評判のあの学校の生徒としては、きわめて標準なタイプなのかもしれないが。

「誰が仕事中にナンパするか」

「え？じゃあ仕事をサボってナンパですか？すみません、わたし不真面目な人はちよつと無理なんでごめんなさい」

こいつぶん殴ってやろうかと思いつつ、私は相手が熱中症寸前の症状による暴言だと考えて、それをぐつとこらえた。

「夏場に汗を掻くのは当たり前だろうが。それよりも君だ。この炎天下の下を傘もささず帽子も被らずに出歩くんなんて、無謀にもほどがある。見ている限りでは足元もふらついているし、熱中症の一步手前だぞ。とにかくこれを上げるから飲みなさい。そして日陰で休むべきだ」

「え？私、貴方が口をつけたのはちよつと無理……」

「新品だよー」

いちいち失礼な貧乳だな！乳が貧しいと心まで貧しくなるのか!!

この御時勢に口に出せばセクハラ認定は間違いないので、私は心の中だけに留めながらも、ともかく私は半ば強引に彼女を日陰に連れ込むと、ベンチに座らせた。女学生は口では文句を言いながらも、素直に従う。抵抗するだけの気力がないのか、やはり相当疲労がたまっていたらしい。私は彼女に、自分で飲むつもりで買ったばかりの、よく冷えたスポーツドリンクを渡した。

彼女は小さな声で「ありがとうございます」とお礼を言うと、500mlもあるそれを一挙に飲み干した。やはり清涼飲料とは看板に偽りのないもので、生気と血の気のなかつた女学生の顔に、たちまち色が戻り始める。そしてしばらく休憩してから、再び礼を口にした。「……すみません。助かりました」

彼女はバツが悪いのか、どこか気まずそうな表情でこちらを見ている。どこぞのラブコメなら、ここから名前なり連絡先を聞き出して出会の端緒とするのだろうが、残念ながら私の甲斐性のなさは、あの「ラビット・ハウス」のマスターのお墨付きというヘタレである。精々が理解のある年長者として振舞い、彼女の行動を注意するぐらいのことしか出来ない。

「いや、いいんだ。目の前で倒れられたら寝覚めが悪いから。しかしこの炎天下に表を走るのは危ないよ」

「はいお手数をお掛けしました」

それに私は、貧しい乳には興味はない。礼儀正しく頭を下げても、

まるで微動だにしないそれに同情しつつ、私は彼女に尋ねた。

「ところで誰かを探していたみたいだけど」

「はい、そうなんです。お恥ずかしい話なのですが、締め切り前なのに逃げ出した学校の文芸部の青山先輩を探していました……」

……あれー、その名前どこかで聞いたことあるぞー？

私の記憶が確かなら、同じ学校の制服を着た同じ苗字の女神が、私がラビットハウスを出る直前に来店して、アイスコーヒーを楽しんでいた記憶があるのだが。世間は広いようで狭いというが、これはいくらなんでも出来すぎではないか？

コーヒーにミルクをいれてかき混ぜたように、疑念と興味が複雑に入り混じった私は、真偽を確かめるため、目の前の彼女に再び質問をした。

「……念のために聞くんだけど。その人は君の学校の2年で、青山翠っていう名前なんじゃない？」

「え？なんで翠先輩の名前を貴方が知っているんですか……っは！まさか」

おい貧乳。お前、今いったいどんな想像をした？そして何故、自分の胸をかばうような格好をした？かばうほどの厚みもねえだろお前！

私の暴言に対して、眉をひそめる紳士淑女の諸君も多いと思う。

だが少し待つて頂きたい。

「え？ちよつと何です？貴方、青山先輩のストーカーなんですか、いや、助けていただいたのは感謝していますけども、ちよつとそれは本当に無理です、生理的にも物理的にも社会的にも無理です。無理無理、無理です。何なんですか貴方。青山先輩と貴方が釣り合うと本気で思っているんですか。頭沸いてるんじゃないですか。今すぐ鏡見てください。そしてその罪深さと己の存在に対して後悔し、二度とそんな寝言を言わないように神様に懺悔してください。お願いします」

これには温厚篤実な変態紳士と名高い私も、堪忍袋の緒が切れた。「この貧しい乳め、何を勘違いしている。胸が貧しいと心まで貧しく

なるんだな。いや、その逆か。このぺちやばいめ。そもそもお前は隠すようなものはないだろう。胸元に手を当てるんじゃない。服の上からでもないのはわかるからな。無駄な抵抗はやめて、その手を大人しく下ろせ」

「なっ、何なんですか貴方！失礼な人ですね!？」

「いきなり人をストーカー扱いする貧乳よりましだ!!」

あとはもう子供の喧嘩である。炎天下の日陰の下、私も相手も、この生意気な男（あるいは女）をどうにか言い負かせてやろうと自分達の知識を存分に使い、より高度な論法でいかに相手を罵倒するかを競い合った。

そして開始から2分も過ぎて互いに蓄えた語彙が尽きると、アホだのバカだのおたんこなすだの、小学生の口喧嘩レベルに成り下がった。

「信じられません、こんな下品な男がいるなんて!」

「おうそうか！俺もお前がスカートをはいてないと、とてもではないが女だとは気がつかなかったな!」

「むつきー!!このチンパンジーめ!」

「やるか、このまな板女あ!」

「納品作業をほったらかして、人の店先で何をしてるんだい!!!」

妖怪・塩かけ婆の盛り塩を掴んだ攻撃が、私と彼女―真手凛まてりんの顔を直撃した。

ある映画の中で主人公の母親が「黒は女を美しく見せる」と言ったらしいが、賢さについては触れていなかったと思う（その2）

テレビドラマの題材ならば、やはり医療ものと刑事ものが二大巨頭だろう。ロシアの文豪レフ・トルストイが「幸せは似たり寄ったりだが、不幸は人それぞれである」と喝破したように、話が作りやすいからだ。弁護士や検事、教師を主人公にした作品が量産されているのも、同様の理由からだと思われる。

ふた昔ほど前に地上波で放映された『振り返れば奴がいる』という医療ドラマがある。舞台はある都市病院。物語は熱血漢の努力家と、クールな天才肌という対照的な医師の対立を中心として物語は進んでいくが、これは『白い巨塔』から続く医療ドラマの王道である。当然ながら私はどちらの作品もリアルタイムで視聴していないが、学生時代の春休みか夏休みだったかの昼間の再放送で、何度か視聴した記憶がある。今ではベテランとして扱われる俳優や女優による熱のこもった演技は、そのストーリーと共に奇妙なまでの強い印象を私の記憶に刻んでいた。

いつの事であったか。私は「ラビット・ハウス」で青山女史とコーヒーを楽しみながら、このドラマに関する意見を交わした。

結論から言えば、この作品の主人公である2人の医師は共に破滅して物語は終わる。いわゆるバットエンドなのだが、考えても見てほしい。片方が破滅して終わるのなら『白い巨塔』と何ら変わりはないし、人生観も価値観も異なる2人が都合主義的に和解して、それぞれの生き方を尊重しあってハッピーエンドでは、面白くともなんともない。

王道ものとはいえ結末までありきたりか焼き直しなものでは、視聴者の不評どころか、記憶にすら残らなかつただろう。後味の悪いバットエンドだからこそ、この作品は、その印象的なタイトルとともに視聴者の記憶に残ったのだ。

「振り返れば青山がいる」と評してもいいほどに神出鬼没な青山女史は、相槌を打ちながら私の話を聞いていたが、それが終わると「そうですねえ」と、首をこてんと傾けた。

『画面の向こうはフィクションとわかっているからこそ、視聴者である私達も、登場人物の不幸を無責任に楽しめるのではないでしょう。私としてはハッピーエンドのほうが好きですね』

『世の中に不幸な話はいくらでも転がっているから、創作物の中ぐらい夢を見たいというわけですか？』

『そうですねえ』

あおやまみどり
青山翠という女性は、いわゆるドーナツツの穴ではなくドーナツツを見る樂觀主義者でもある。一見するとつかみどころのないふわふわとした雰囲気を漂わせているが、その胸の内には、創作者ならば誰もがもつ強烈な価値観を秘めている。

とはいえ基本的には内向的な性格であるため、青山女史は自分と異なる意見や見解であっても、それを正面から否定しない。相手の主張に理解を示しながら、持論をやんわりと主張する。もつとも私がそれに気が付いたのは、かなり後になってからのことだったのだが。

『私はどちらかといえば、物語の登場人物に感情移入をしながら見たり読んだりすることが多いんです。彼ら、あるいは彼女たちが作品の中で悲しくなれば、私も悲しくなってしまうし、彼らが傷つけば私も傷ついた気持ちになってしまう。だからハッピーエンドが好きなのかもしれませんね』

自分の作品において「神」となる資格を持つのが、創作者である。その手にかかれれば物語の世界観はおろか、時間軸に舞台背景、登場人物の性別から出生に性格、もつとも極端なものでは、その世界の運命まで、何物にも阻害されずに自分の一存で決められるからだ。

聞き方によつては青山女史のそれは、自分の志向を物語よりも優先させるといふ「神の傲慢」であると非難されたかもしれない。しかし私は彼女と直接会話を交わした経験から、それは彼女の自制された感受性の豊かさの証左であり、同時に創作者としての責任感と誠実性であると、少なくとも私は解釈していた。

「それが先輩なんですよ」

私の評価に対して、青山女史の文芸部の後輩である真手凛君は、薄い胸を必要以上に反りながら、敬愛する先輩のことを誇って見せた。

*

いったいどうして、こんな奇妙な展開になってしまったのか。こちらを恨めしそうに睨む真手君の仏頂面に辟易としながら、私は『甘兎庵』のテーブル席に、この青山女史の後輩君と向かい合うように座らされていた。

公衆の面前で塩を投げつけられた私は、塩を投げつけた張本人である塩かけ婆—もとい宇治松夫人うじまつに対して、同じく塩で悶える真手君が熱中症になりかけだったことを説明した。

「何やってんだい、この馬鹿！」

「いや、その……すいません」

口論でヒートアップして真手君の体調不良を忘れていた私としては、ぐうの音も出ない。宇治松夫人は口汚く私達を叱責しながら「店の中で休んでいきな！」というと、真手君の腕をとり、半ば強引に店内へと連れ込んだ。私もそれについていこうとしたが「砂糖の納品は？」と、冷たい視線と共に眼前でドアを閉められた。

この糞婆と怒鳴り散らしたところではあるが、まったくの正論であるだけに余計に腹が立つ。私は立っているだけで汗が噴き出す炎天下の下、砂糖の納品作業を終わらせた。そして納品伝票にサインをもらうと、真手君を宇治松夫人に任せて帰ろうとした。

「じゃあ確かに納品しましたので」

「……まさか帰るんじゃないだろうね？」

「え？いや、まあ、納品も終わりましたし」

次の瞬間、宇治松夫人は目にも止まらぬ速さで羊羹を切っていた包丁を私に向けて宣言した。

「ジジイへの連絡はしておいたから、あの娘が落ち着くまで一緒にいてやんな！見捨てて帰ったら承知しないよ！」

実に男前な態度ではあったが、婆のツンデレなんぞ誰得なのか。

私は不承不承、宇治松夫人の提案を受け入れ、この失礼な女子高生と同席する事になった。当然ながら夫人との会話は、この胸の貧しい女学生にすべて見られており、彼女は道端の耳長の糞を見るが如き視線を私に向けているばかりである。

真手君と向かい合って座ったはいいものの、先ほどまでの口論の影響もあり、実にギスギスとした雰囲気が漂っていた。初対面の女子高生と盛り上がるようなウイットに富んだ話題や甲斐性が私にあるわけもなく、どうしたものかと私は途方に暮れた。

見知らぬ他人同士を結びつけるのは、共通の話題か知人の存在だ。私と真手君の場合、それは青山女史の存在であった。検察官のように青山先輩との関係を問いたす真手君に対して、私はこれまでの経緯を率直に話した。そして「青山先輩大好き娘」である真手君から請われるがままに、私の青山女史に対する印象や「ラビット・ハウス」における出来事などをつらつらと語った。

神様、仏様、青山様である。

当時の私の認識は、青山翠という女学生は、神出鬼没な女神であることを差し引いても、実に不思議な人であるというものであった。お嬢様学校の生徒らしく、ちよつとした立ち居振る舞いや言葉遣いは実に柔和そのものであり、知性はあつても鋭さを感じさせない。そんな普段の彼女の在り様が「自分の作品の事になると、頑固な完璧主義者に変貌する」という香風老人かふうの評価と、私の中では結びつかなかったからだ。

ある時、青山女史は助詞の使い方がどうしても気に入らなく、カウンター席で2時間近くも悩み続けたという。頑固という言葉がこれほど似つかわしくない人もいないが、同じく頑固な職人肌のマスターの評価だけに、一概に見当違いであるとも思えなかった。

真手君は、私が青山女史を「地上に降り立った女神」と表現した点については「気持ち悪いです」と一刀両断に切り捨てたものの、それ以外に関しては「わかります」と何度も頷いた。

「青山先輩の作品の魅力は、そこにあるんですよ。どんな些細な点や疑問もおろそかにしないんです。森羅万象のあらゆることを、青山翠

の世界に取り込んで咀嚼し、新たな糸として紡ぎ出した言葉を縦糸に、青山翠の世界観を横糸として、新たな物語という布を織ってしまふんですよ」

私も真手君に青山女史との出会いについて尋ねた。やはり青山女史と同じ有名なお嬢様学校の1年生である真手君は、入部した文芸部で活動していた青山女史と出会い、彼女の作品の世界観に魅せられたという。

「キーボードでの執筆を否定するわけではありませんが、辞典を片手に原稿用紙と真つ向から向き合う。本気モードで執筆に取り組む先輩には、居合いの立会いのような真剣勝負の気魄があります。でも、その本気モードになるまでが大変なんですけどね」

これらは真手君が青山女史について語ったほんの一部に過ぎない。真手君は実に生き生きとした表情で青山作品の魅力を事細かに語ってくれたのだが、ここでは割愛する。

真手君曰く、青山女史は「自由人」であり放浪癖があるという。興味の範囲が広いことは作品の世界観の深化につながっているというが、それゆえに執筆活動に集中する事は珍しい。「創作活動のネタ探し」をお題目に、学校中のクラブ活動を荒らしまわったかとおもえば、校外でお店巡りを楽しむなど、とかく神出鬼没で自由奔放。

そして文芸誌の締め切りが迫る度に、放浪中の青山女史を部室へと連れ戻すのが「青山係」である彼女の役割なのだそうだ。

「随分と惚れ込んでいるんだな」

「当然です！私は青山先輩のファン第1号ですからね！」

むっふーと得意げに鼻の穴を膨らませる真手君は、どうにも言動が子供っぽい。小型の愛玩犬のような印象を受ける。

それにしてもこの娘、青山女史のことが好き過ぎやしないか？私が真手君のフラットな胸を見なら、そんなことを考えていると、青山大好きっ娘は、またもや腕と手で胸元を隠しながら言った。

「何ですか？私に興味があるんですか？すいません、私は今のところ青山先輩にしか興味がありませんので、イケメンに生まれ変わってから出直してきてください。中身がそれじゃイケメンになっても生理的

に無理ですけど」

「何を言うか、このフラット娘が。俺はこう見えても地元では性格だけはイケメンだと評判だったんだぞ」

「女性の外見をからかう人の、一体どこが性格イケメンなんですか？ 頭おかしいんじゃないですか？」

「お前、自分のこれまでの言動を、一度でもいいから振り返ってみたら？」

「それにしても貴方のような性格破綻者にも優しく接してあげるだなんて、青山先輩はやっぱり天使ですね」

「さつき青山さんを女神と賞賛した俺のことを、気持ち悪いって言うてなかった？」

「……あんた達、いい加減にしないと店から放り出すよ」

「すいませんでした」

宇治松夫人の一言に、私と真手君は即座に頭を下げ、恭順の意向を示した。

*

どうにも宇治松夫人は、せっかく似た年恰好の男と女を同じテーブルに座らせたというのに、色気のかけらもない話を続けていたのが癪に障ったらしい。一定以上の年齢を越えたご老人方というものは、どうして若者同士の好いた惚れたの話に、必要以上に首を突っ込みたがるのであろうか。一方的に期待されても、ほとんど初対面同士では無理がある。

といつても、女主人に逆らつてもろくなことにはならない事は経験済みである。私は冷たい日本茶を飲み干すと、女主人に丁寧に礼をする真手君と一緒に甘兎庵を出た。

冷房の効いた店内から表に出た途端、まとわりつくようなジトツとした湿気と熱気が、私の体を包み込む。眉を寄せて忌々し気に太陽を見つめて帽子をかぶると、私は台車を脇に抱えた。そしてあとは分かるだけというタイミングにも関わらず、なぜか真手君は私のほうをじつと見つめていた。

「……何か俺の顔についてる？」

「勘違いしないでください。「ラビット・ハウス」という喫茶店から配達に出る前、店内で青山先輩を見かけたと言っていたじゃありませんか」

真手君は赤いベルトの腕時計で時刻を確認しながら言った。

「もうこの時間だと、他の店に出られているかもしれませんが、念のため確認に行こうと思います」

「そうか。じゃあな」

「貴方、人の話を聞いていましたか？」

真手君はじとつとした視線をよこし、身長差のある私を呆れた様に見上げた。

「私はその喫茶店を知らないと、先ほどお伝えしましたよね。だとすれば場所を知らないのは当然じゃありませんか？やっぱり頭が残念な人なんですね」

初対面のはずなのに、よくもまあポンポンと悪口が出てくる娘である。

「それじゃ、ついて来たらいいよ」

「何ですか？それ新手のナンパですか？」

反論するのも馬鹿らしく、私はさっさと歩き始めた。

*

欧州には欧州の建築があるように、日本には日本の建築がある。フランスのある都市をモデルとして都市計画と建築が進められたという「木組みの家と石畳の街」は、明らかに日本の酷暑に対応したものではない。もっともそれは、伝統的な日本家屋であっても似たようなものだろう。打ち水をした先から水蒸気となって蒸発してしまうようでは、大した差はない。

上からの日差しを日陰で回避したとしても、石畳で舗装された地面から照り返す熱気は避けられない。じとつとした熱気に辟易としてつ、私は真手君と共にラビット・ハウスへの道程を歩いていた。

「……暑いですね」

「……夏だからな」

何を当たり前前のことを言っているのだ、この女は。考えないように

していたのに、余計に暑くなるではないか。とはいえ先ほどまで体調が悪かったこともあり、私はタオルで額を拭きながら、横目で真手君の様子を確認する。

真手君は甘兎庵での休養ですっかり元気を取り戻したらしく、暑さで顔をしかめてはいたものの、日陰を選んで歩く足取りはしつかりとしていた。袖タイプのブレザーの学生服に汗をかいており、なんとも色っぽくともなんともない。

本当に残念な奴である。私は心の中で合唱をした。

「……あ、ジェラート屋がありますよ」

「……そうか」

確かに私たちの進行方向から向かって右側の横手の広場には、野外のジェラート屋が暑さに耐えながら、今か今かとお客を待っている。車についた冷凍機の換気扇からは、台風のような轟音が鳴り響いていた。

この場において真手君が私に何を求めているのかを私は理解したが、あえて物分りの悪い振りをしてやり過ごそうとした。すると真手君の視線が再び険しさを増す。

「……ここは性格イケメンという、男の甲斐性を見せる所じゃないですか?」

「それにふさわしい相手なら……痛い痛い、脛をけるな!脛を!!」
的確に急所を狙うとは、未恐ろしい女だ。

私が足をさすりながら「ラビット・ハウス」までは間もなくであることを伝えようと、それまでぴーちくぱーちくやかましかった真手君が急に黙り込んだ。また体調が悪くなったのかと様子を伺うが、どうもそうではないらしい。俯いたまま、私の横を歩く足取りに変化はないが、その歩幅は確実に小さくなっていった。まるで目的地に到着するのを遅らせたかのように。

先ほどまでの遠慮のない会話が突然途切れたことに、基本的に沈黙に耐えられない私は、妙に居心地が悪くなった。人のプライバシーには深入りするのは私の流儀に反するが、私は止む無く真手君にその理由を尋ねた。

真手君は最初こそは「なんで貴方にそんなこといわなきやいけないんですか」と減らず口を叩いていたが、私はそれをどうにかこうにか宥めすかす。そして、どうにもまとまりのない話ではあったが、それを真手君から聞き出すことに成功した。

「青山先輩が部室からいなくなるのは、私のせいなんじゃないかと。私があんまり口煩くいうから、先輩が書くのを嫌になってたら……」
文芸部に入部するだけあり、真手君自身も創作活動の経験はあるそう。書くことの難しさというものは、書いたものにしかわからない。自分の中の知識や経験、想像を搾り出して原稿用紙やキーボードにぶつける。その苦しさは経験したものでないとわからないと真手君は語った。

青山先輩の作品が、真手君は好きだという。なのに青山先輩が書きたくないというのに、無理やり書かせようという自分は、本当に先輩のためになっているのか？ 締め切りを理由に、自分が読みたい作品を青山先輩に強要しているのではないか？ 「優しい青山先輩」は、直接それが言えないから、放浪という形で姿をくらませているのではないか……とまあ、大体このような趣旨の話であった。

その話し方や態度からすると、真手君本人は真剣に悩んでいるようだ。

だからこそ私は、意図的に軽い口調で応じた。

「青春してるねえ」

私の言葉に、真手君はきつと鋭く睨み返す。

「茶化さないでください！ 他人事だと思っで!!」

「他人事だよ。俺と君は他人だし、青山さんと君も究極的には他人だ。俺は君の代わりに問題の当事者にはなれないし、君も青山さんの代わりにはなれない」

問題を抱えると一人で悶々と悩み続け、周囲に相談もできずに視野と思考が狭くなった結果、自分の抱える問題こそが世界のすべてだと勘違いするのは、青年期によくある病気である。感受性の強い文学少女である真手君には、その傾向が人よりも強かったのだろう。

お前はどうかのだと御叱りを受けそうだが、私もこれに関しては身

に覚えがあつた。ならば視線を変えてやるか高くしてやるかして、蒙を啓いてやるのが先達の役割というもの。私は一端の人生の先輩気取りで、真手君の蒙を指摘した。

「他人同士だからわからない。だからこそ、わからないことは聞けばいいんだ」

「……聞いてもいいんでしょうか」

「いいんだよ。だってそれが学生時代の特権なんだからね。現に俺と君は、性別はおろか、考え方も育ってきた環境も違う。でも今は違うだろ？言葉を交わしたからこそ、相手が嫌な奴だと認識する事が出来た」

これは大きな進歩であり相互理解だと、私が厳かに言うと、真手君はようやくよくクスリと笑った。

「確かにそうですね。私も直接こうやって話すまでは、貴方がそんなに失礼で嫌な男だとは思いませんでした」

「その調子だ。しかし君も言うじゃないか」

私がことさら憎憎しげに答えると、日陰の中に立つ真手君は、太陽のようにニカツと笑った。

*

「ラビット・ハウス」に到着した真手君は、外から店内を覗き込んでお目当ての先輩の姿を探す。やはりというべきか、青山女史の姿はどこにもなかった。

「どこにもいませんね。ここで青山先輩を見かけたか、あれだけ自信満々におっしゃっていませんでしたっけ？本当に時間を無駄にしましたよ」

「だから念押ししただろう。俺がここを出た時にはいたと」

「はいはい、そうですねー、言い訳するなんて、実に男らしいですねー」
ふふーんと鬼の首を取ったように得意げな表情をする真手君。先ほどまでの気鬱はどこかに吹き飛んでしまったようだ。さっぱりとした性格をしているようで、意外と根に持つタイプなのかもしれない。

「ところで俺も言いたいことがある。『あなたく、あなたく』って、俺

を呼び捨てにするな。俺はお前の亭主になった覚えはない」

「その裏声、ひよつとして私の真似ですか？ 気持ち悪いのでやめてください」

「急に真顔になるんじゃないよー！」

そういえばこの時、真手君とああでもないこうでもないやり取りする中で、私はいつのまにか会話の中での一人称が、僕から俺になっていた。真手君をからかう時に「僕」では様にならないからかもしれない。

それにしても我ながらどうして、こう、しんみりとした空気のまま別れることが出来ないのだろうか。おそらくその元凶であろう真手君は「もう会うこともないでしょうけれども」と、またもや余計な一言を口にしてから、綺麗なお辞儀をして見せた。

「私も青山先輩と、ちゃんと話してみようと思います。今日はありがとうございました。先輩」

言いたいことを言い終えたのか、真手君は踵を返して去って行った。

……ちくしょう、あんな生意気な性格をしているのに、あの笑顔はずるいじゃないか。

私は顔をタオルでぐしゃぐしゃと拭いてから、店内に入った。

「ただ今、戻りました」

「おかえり」

その時のマスターの「わかっているよ」とでも言わんばかりの嫌らしい笑みは、無愛想ながらもおせっかいを焼こうとした宇治松夫人のそれと大変よく似ていたことを、付け加えておく。

ある映画の中で主人公の母親が「黒は女を美しく見せる」と言ったらしいが、賢さについては触れていなかったと思う（その3）

桜並木が自慢の公園を冬場に訪れる人はいないし、シーズンが終わった春にスキー場を訪問しても、ロッジの多くは閉鎖されている。紅葉が名物の山に一足早く炎天下の中を登る人間はよほどの登山好きに限られるし、秋に海水浴場に行ってもクラゲに刺されるだけ。

つまり、観光やレジャーには、食材と同じく旬が存在する。

とはいえ繁忙期が極端に偏りすぎていては、観光地の経営は苦しい。夏場のスキー場や冬場の避暑地といえども管理要員の人件費や税金をはじめとした諸費用は支払わなければならない。四半期にも満たない短期間の繁忙期頼みの経営は、博打のようなものだ。

「木組みの家と石畳の街」では、オールシーズンを通じた観光客誘致のため、行政と地元商工会、そして融資団体が連携する形で、年間を通じて様々なイベント活動を開催し続けている。

春には桜祭や入学関連イベント、夏には花火大会や夏祭り、秋から冬にかけてはハロウィンやクリスマス、年越イベントにバレンタインといった季節ごとの定番大型イベントに加え、宝探しゲームのシストや古物市のような地元密着のイベントが定期的で開催されている。このほかにも、建築史家の猛反対を押し切る形で明治期の建物を改修した年中無休の大型温水プール、あるいは時期をずらして行われる地元学校の運動会や文化祭など、とにかく考えられるありとあらゆるイベントを総動員している感がある。

とはいえ、どれだけ努力をしたところでも、どうしても観光に向かないシーズンというものは存在する。寒さが一番厳しい厳冬期の2月と、年間を通して最も熱さが厳しくなる御盆前後の8月である。古くから二八にっばちと呼ばれ、小売業の売り上げが下がる時期だが、この街では別の要素も関係してくる。

私としては断じて受け入れがたい事実であるが、この街を訪れる観

光客は野良の耳長を目当てとしている。2月の厳寒期は、あの忌々しい耳長を変温動物でありながら石の裏に張り付いて越冬するカメムシのようにさせるし、恋に焦がれてなく蟬の声が最も煩くなる8月中旬は、日陰や涼を求めて一目散。保温性に優れた毛皮も、耳長にとつては命取りとなりかねない。

そのまま全ての耳長の干物になってしまえばいいと思いつつ、私は「野球はクーラーの効いた部屋で観戦するに限る」という持論に忠実に従い行動していた。

つまりは、高校野球観戦である。

*

全国的に晴れなくても良いのにピーカンの好天が続いた結果、全国高等学校硬式野球選手権の本選は、一度の雨天順延もなく、お盆前にはベスト16が出揃った。見慣れた代表校が多数を占める中、期待のエースを有する新生の私立高校や、復活した名門古豪がちらほら混じるといふ、ファンの期待を嫌が上にも高める顔触れであった。

お盆の真ただ中も営業を続ける「ラビット・ハウス」のカウンター席において、私はベスト8を決める午後からの第3試合を観戦していた。片方は出身県の代表ということもあり、私はそれなりに関心を持って、店内に設置されたTV画面から流れる試合の行方に注目していた。

「それにしても暑いですね」

「そうだな」

「今年の風邪は悪質」と並んで「今年の夏の暑さは異常」というフレーズは、毎年のようにニュースから聞かされている気がする。とはいえ、この暑さはさすがに堪えたのか、痩せ我慢が得意なマスターも、冷房をガンガンときかせていた。

観光客が減少する時期にお盆休みが重なることから、福利厚生に対する理解を有するタカヒロさんは、夏期休暇を提案した。息子さんからの提案に対して妙な意地を張り、「例え一人でもコーヒーを求めるお客様がいる限り、ワシは営業する!」として、父親であるマスターが突っぱねたのが、8月の始めのことだ。私はマスターの決定に反対

こそしなかったものの、積極的に賛成したわけでもない。

そして案の定、「ラビット・ハウス」には閑古鳥が鳴いている。マスターの主張を裏付けるように2、3人の常連の御客様が来店されたものの、むしろ「こんな時期に営業しているのは、ここか甘兎庵ぐらいだよ」と同情される始末だ。これでは店を締めていたほうが安くついたらに違いはない。現に、香風老人の機嫌は、外の気温とは裏腹に、絶対零度を割り込みつつある。

老人の機嫌がよくないのは、夏季休暇中である智乃ちゃんが店にいないことも関係しているのだろう。その智乃ちゃんはタカヒロさんと一緒に外出中だ。おそらく早くに亡くなったという、タカヒロさんの奥さんにして智乃ちゃんのお母さんだった女性の墓参りなのだろう。

いつもは智乃ちゃんの頭上を指定席としている、あの忌々しい毬栗耳長のティップーは、流石に炎天下で長毛種を連れて出歩くにもいかないので、私たちと一緒に留守番をしている。最も、私の前には顔どころか毛の一本も出さないが。

納品業者もお盆休みであるため納品はなく、倉庫の片付けも店内の清掃も終わっている。カウンター席に腰掛け、肘をつきながら野球観戦をしたところで、文句を言われる筋合いはない。「喫茶店たるものは」とブツブツ文句を言っている香風老人だが、その割には「今は罍を進めるべきだった」だの、「ここは代打でいくべきだった」だのと、素人評論家として試合の内容に注文を付けている。

「……あー、駄目でしたね。ここで3人で封じられるのはきつい」

「あのファインプレーの後だったからな。流れが途切れてしまった。しかし随分と守備が堅いな」

「宇佐山第一高校は、堅い守備からリズムを作るのが必勝パターンですからね」

地方大会を勝ち抜いたとしても、それ以上の力のない学校は1回戦でふるいにかけられる。本大会とは思えない数字がスコアボードに並ぶのは、大体にしてそういう試合だ。かと思えば1回戦でたまにとんでもない大番狂わせがあったりするから、高校野球は面白いのだ

が。

ベスト16、そしてベスト8が出揃い、実力が伯仲すると番狂わせは減っていく。前評判通りの優勝候補に、何年か前の優勝高校、いつも何故かベスト8か16どまりの甲子園の常連etc。

私は地方大会を見に行く、あるいは本戦の全試合をTV観戦するほど熱心な高校野球ファンではないが、全国代表が出揃った直後の特集雑誌を買い、暇があればチャンネルを合わせる位には関心がある。

負けたら終わりというプロにはない緊張感が、このものぐさな私の興味をひきつけているのかもしれない。

「私は、高校野球は見ていて辛くなることはありません」

またどこから出たんだ、この人は。

*

いまさら彼女がベルの音も鳴らさずに来店されるのは、私からすれば驚くに値しない。私は青山女史に「いらっしやいませ」と応じた。

「あれ？驚いてくれないんですか？」

「わー、びっくりしたなー、もー」

「もう、ぜんぜん驚いていないじゃないですか」

頬を膨らませる青山女史。ぷんぷん！という擬音が見えそうだ。

「あざとい」という感想よりも「可愛い」という言葉が先に思い浮かんでしまうあたり、私もかなり重症である。

今日の青山女史は、いつもの髪を2本の三つ編みして前に垂らしたお下げではなく、後頭部で大胆に大きく括り、後ろへと垂らしていた。いわゆるポニーテールである。うなじや首筋がよく見えて、実に目の保養になる髪型と言えよう。

それにしても高等学校も夏期休暇のはずだが、この人はわざわざ制服に着替えてから来たのだろうか？

「今日は文芸部の打ち合わせがありましたー。あ、マスター。私ブルーマウンテンで」

私の心を読んだわけでもないのだろうが、青山女史はそう言うのと、私から席を2つ挟んだカウンターに腰掛けた。

いやっほー！っはっはー！労働万歳！

私は先ほどまでの香風老人の経営手腕に対する深刻な疑念については綺麗さっぱりと忘れ去り、胸中で喝采と歓声を上げた。そんな私に対してマスターは「また阿呆なことでも考えているのだろうか」とでも言いたげな視線を向ける。

「夏期講習の帰りかと思っただが、違うのか？」

「KAKIKOUSYU?新しいカキ氷ですか？」

「おい青山」

今更遠慮する間柄でもないのだろう。マスターは青山女史にいささか強めの口調で、からかい半分ながらも彼女を咎めた。

しかし青山女史の様子はいつもと違っていた。軽口に応じることもなく、耳長のようにむんぐと口を噤み、形ばかりの微笑を浮かべただけである。これは妙だと疑問に感じた私は、横目で様子を伺う。青山女史は一見するといつもと同じ柔和なものに見えるが、どこか影が差しているようにも思えた。

マスターは青山女史に理由を問わず、いつもと同じ要領でコーヒーの用意を始めた。流石に接客業で鍛えられただけあって、人との間合いを図るのが巧であると感じしたが、こうなると私としては下手に身動き出来ない。いかにも「何かあります」という雰囲気を漂わせている女性に対する気の利いた言い回しなど、私には思い浮かぶはずもない。沈黙を保つマスターには何か考えがあるのかもしれないが、そうすると私が余計なことをすれば、むしろ台無しになりかねない。

私はTV画面に自分の体を半分だけ傾けると、試合に視線と意識を集中させた。

――…回、全国高校野球選手権大会、大会12目の第3試合、…：
県代表、夏では3回目の出場となる宇佐山第一と、去年ベスト16で惜しくも涙を飲んだ聖ラビット学院大附属の対戦です。勝った方がベスト8、どちらが勝っても両校ともに史上初となります――

この局はラジオ中継も兼ねているので、音声放送だけでも試合の展開がわかるように、実況のキャスターが細かな解説をしている。

解説役は、今年こそは優勝候補とされながらも、大番狂わせの1回戦で敗退した名門私立高校の監督。その監督にとっては記念すべき

45勝を阻止した相手高校も、2回戦で敗退している。それが理由なのか、どこか不機嫌そうな表情とぶつきらぼうな解説が印象的だった。

これはネットで叩かれるだろうなと思いつつ、私はキャスターの実況に耳を傾ける。

— 3対2と点差はわずかに1点。宇佐山第一がリードしています。8回の裏、聖ラビット学院大附属の攻撃。1アウトで走者は2・3塁。ラビット学院大付属は3番の……、今大会の打率は4割5分、地方予選と合わせて合計7本のホームランを叩き出している強肩です。カウントは3ボール1ストライク、マウンド上ではピッチャーが苦しい表情をしています —

マウンドでは宇佐山第一の2年エースが首に手を当てている。打球数は既に100球を越えており、素人ながらも厳しい展開だと想像出来た。

「高校野球ですか？」

「この阿呆の付き合いだよ」

青山女史の質問に、マスターがそっけなく答える。「誰が阿呆ですか」という、TV画面を見ながらなされた私の反論は、マスターに無視された。

ついでにCMの間のジャンケンに負けた。これで4連敗である。
ちくせう

「実のところ、ワシはカフェでTVを付けるのは好きではないのだ。静かにコーヒーを楽しみたい御客様にとっては、騒音でしかないからな。たまに要望があるので仕方なく置いているが」

「だが」と香風老人は続ける。その間、私は青山女史に見えないように注意しながらドアを指して退出した方がいいか尋ねるジェスチャーをしたが、マスターは、こちらも青山女史からは影になる角度で首を振った。そのため私は仕方なく、青山女史に背を向けるように、TVの方向に体を完全に傾けた。

既に宇佐山第一は伝令を使い果たしているらしい。カメラは容赦なく、マウンド上の2年エースの苦しい表情を写し出す。

「高校野球の中継は嫌いではない。騒がしいことは騒がしいが、蟬の鳴き声や夕立の轟音と同じように、一種の夏の風物詩ともいえるわけだし」

「私は……」

いつもの自由奔放な青山女史とは思えぬ、か細い声が聞こえた気がした。カウンターに肘をつけて頬をつきながら実況に集中する私には、当然聞こえるはずもない。

「私は、考えてしまいます」

聞こえないのなら、聞こえないのだ。

「負けた選手の努力はどうして報われなかったのか。勝った高校との違いはなんだったのか」

「練習の量か戦術の差か、あるいは監督の采配如何か。理由を知りたいければ、スポーツ新聞の解説を読めばいい」

「そうですね」

宇佐山第一の2年エースが全身を躍動させて大きく振りかぶる。体全体から上半身、右肩から指の先まで、力を流動させるようにして投げられた硬球は、3年主将のキャッチャーが構えたミットに収まることなく、振られたバットに直撃した。実況が叫ぶが、これはどう見ても……

「ファール、ファールです。ラビット学院大附属の3番……君、3回連続のファールです。これはタイミングがあいませんでしたか？」

「むしろあわせてきていますね。最初は明らかにタイミングが外れていました。宇佐山第一の投手には疲れが見えます」

解説の監督が実況の質問にそっけなく答える。しかしこれ、興味なさすぎだろ。

「継投も考えられるでしょうか。宇佐山第一の控え投手は2人いますが、地方大会ではこの控え選手が先発して、エースの2年を継投させる。あるいはエースで完投するパターンでした」

「この状況ではむしろ浮き足立つでしょうね。宇佐山は守りが硬いとされますが、第1試合の二本耳畜産商業との試合ではエースの

乱れにつけ込まれる形で失点を許しています。――

――今大会初の延長となりました試合ですね。延長11回、4―3で宇佐山第一が勝利しました。――

――……その直前が最初の延長試合です。ちなみに私の学校の試合でした。負けましたがね。――

――失礼いたしました。訂正してお詫びを申し上げます。――
よりもよって放送席をアップにしていたため、カメラは憚然とした解説の表情と、顔色がコロコロと変わる実況の様子をお茶の間に提供していた。慌てて画面が球場の中継席からのものに切り替わるが、これは……今頃ネット掲示板は大盛り上がりだろうなあ。

「はつきりしないな。青山、お前はどうしたいのさ?」

「私は、どうしたいのでしょうか」

「ワシにわかるわけがないな」

気にならないといえれば嘘になるが、聞きたくもないのに後ろの会話が聞こえてくる。

高校2年の夏がどのような意味を持つのか。学生にとって進学の悩みはいつの時代でも変わらない。カフェ・ド・マンシーで合否や見通しを聞かれる度に、マスターは必ず、こう答える。

『努力すれば、道は開ける』

ここで「占いを聞きに来る暇があれば勉強しろ。この間にも、君のライバルは英単語を君より多く覚えているのだぞ」と言わないのが、マスターの優しさなのだろう。相談する方も、そんなことは百も承知。それでも、明かりのない夜道をひとり歩き続けるかのような、日々の苦しい受験勉強を続けるための希望がほしいのだろう。

カフェ・ド・マンシーを観察していると、マスターは相手を見て答え方を変えていることが判る。蝶に海を泳げと言ったり、イルカに陸の上を走れといった無理難題は、決してマスターは言わない。

しかし「自分がどうなりたいか」というものがなければ、マスターとて答えようがない。

――振りかぶって、投げました!あ!うち、あー、キャッチャー追いかけてましたがこれはダメです。ファール。ファールです。――

— あつてきましたね。これは厳しい —

解説の言う通り、宇佐山第一の2年エースには明らかに疲れが見える。主将の3年は素人目にも難しい球を追いかけて、やはり捕球に失敗した。なんとかアウトカウントを稼ぎたい一心からだろう。マウンドの2年エースには来年があるが、彼には次がない。

「凜ちゃんがお世話になったそうですね」

……いきなり脈絡もなく話しかけないでもらいたいものである。私はここにはいないことになっていたので。私は仕方なくTV画面を見たまま「そうですね」と、気のない返事を返した。

「凜ちゃん、店員さんに感謝していましたが、随分と怒ってましたよ？」

「ははは、あれの言うことは無視してもらってもいいですよ青山さん」「あんな失礼な人にはあつたことがないとも言っていましたね。でも聞いても教えてくれないんですよ。店員さんは何を言ったんですか？」

さすがに貧乳だの、洗濯板だの、リバーシブル胴体だのという悪口をそのままいうわけにもいかず、私は「ははは」と笑って誤魔化した。

TV画面には、マウンドに宇佐山第一のキャッチャーが向かう姿が映されている。2年エースは、視線を伏せて顔を合わせようとしない。それとも上げられないのか。TVの向こうの世界とこちら側は、同じ日本であるはずなのに、まるで別の世界であるかのように感じられる。TV越しに見る外の通りには、人通りもまばらである。

私は何やら異世界にでも放り込まれたような気分になった。

そういえばマスターはキッチンカウンターに入ってから、まだ出てこない。

「……どうなるんでしょうか」

「何がですか？」

「試合……なんですかね？」

そこで疑問に思われても困るのだが。

「私、凜ちゃんとお話をしました」

「それは結構ですね。何を話されましたか」

「色々です。本当に色々なことを、たくさん時間をかけて話し合いま

した」

でも私は凜ちゃんが期待するような立派な人間じゃないんです。青山女史は消え入るような小さな声で続けた。

「私だって、キーボードで文章を打つこともあります。だって便利ですからね。楽もしたいし、楽しく書きたい。人に自分の書いた作品を読んで欲しいし、褒めてもらいたいんです」

「自分が思うように書いて、書きたいように表現出来た文章なんて、数える程しかありません。消して書いて、消して書いて、それを何度も繰り返していくうちに、慣れちゃうんです。まあいいかって、妥協しちゃうんです。自分に嘘をついて、これで精一杯やったんだって」

「でもそれが、褒めてもらえたりするんです。違うんですと私が言っても、誰にも聞いてもらえないんです。謙遜するなって……凜ちゃんは例外ですけどね。私の言葉を信じてくれました」

あの貧乳、やるではないか。私は真手君に対する評価をひとつ上げた。

青山女史はおそらく私に聞かせるために話しているのではないだろう。自分自身の中の感情を整理したいがための独白。私は壁打ちの壁のようなものかもしれない。

TVからは、相変わらず実況解説が流れてる。

—— 宇佐山第一のキャッチャーがマウンドに駆け寄りました。球を渡して、何か話していますね ——

「原稿のネタ探しというのも、本当のところは嘘なのかもしれない。でもそれは、絶対に凜ちゃんのせいなんかじゃありません。原稿用紙に向かい合えば、また嘘をつきたくなるから。それが嫌なだけなんです。自分が傷つくのが、嫌なだけなんです」

「でも凜ちゃん、それでもいいって言うてくれるんです。それでもいいって、言うてくれたんです」

「それが辛いんです。どうしようもなく辛いんです。翠ちゃんの文章が好きなんですと、凜ちゃんは言うてくれる。誰よりも私の作品と、正面から向かい合ってくれる。嬉しいんです。でも、嬉しいはずなのに辛いんです」

「私は楽しかったんです。文章を書く事が。物語を書く事が、楽しかったはずなんです」

「だからその楽しいことが、どこかにある気がして、それを探していたんです」

冷房の音にかき消されるかのように、だんだんと青山女史の声が小さくなる。

「でもなかったんです。どこにも。どこにも……最初から、そんなものはどこにもなかったみたい。どこにも……」

「青山さん」

私はようやく視線と意識を画面から外す決意をすると、後ろへと振り返った。

そこには女神などではなく、今にも泣き出しそうな、ただの女の子が座っていた。

なんとも私は、度し難い男だ。そ青山翠を女神だなんだと崇拜するあまり、目の前にいる女性を見ていなかったのだから。

アイドルだってトイレに行くし恋もする。ならば民を導く勝利の女神とて、道に迷うこともあれば、自分の選択に苦しむこともあるのだろう。

私はTVを指差して、そして続けた。

「僕は、いや俺は宇佐山第一がこのまま逃げ切つて勝つと思うんですが、貴方どう思います?」

「……はい?」

念のために繰り返しておくが、私は何も聞いていない。壁打ちの壁から腕が生えて、ボールをやたらめつたら打ち返すことはないのだ。

そもそも試合に興味があるかもしれないと、最初に言ったのは彼女自身である。私は試合を見るために体勢を元に戻すと、再び彼女に背を向けた。

「ほら試合ですよ。見てください、宇佐山のエース。何を言われたか知りませんが、この状況で笑ってますよ」

マウンドの上のエースは、3年の主将とわずかに言葉を交わすと、振り返ってサードの方向を見る。カメラが切り替わり、写し出された

エースの表情は、弾けるような笑みであった。

これまで積み上げてきた全てが失われるかもしれないという危機的な状況の中で、彼は笑っていた。

笑いは神経に働きかけて、体の強張りを解く効果があるという。嘘でも良いから笑えというのは、その意味では正しい。しかし少なくとも私には、マウンド上の彼の笑みは心の底からの笑いのように見えた。

青山女史の目には、彼の笑顔は一体どう映るのだろうか。

「好きで好きで仕方がないんでしょね。野球が」

「好き、ですか？」

「貴方もそうでしょ？」

聡明な彼女なら、これ以上言わなくてもいいだろう。私は口を閉ざした。

何を根拠にそのようなことを言うのかと言われる向きもあるかもしれない。確かに私は、それまで彼女の文章を読んだことがない。彼女の作品について論評するという点に関して言えば、私は不資格だろう。

それでも、私は青山翠の作品については語れなくても、私が「ラビット・ハウス」のアルバイトとして見てきた青山翠の事であれば、自信をもって語る事が出来る。

「ラビット・ハウス」でアルバイトを初めてから2ヶ月にも満たないが、私はそのわずかな期間の間、幾度となく彼女が原稿用紙と向かい合う姿を見てきた。何度も何度も書いては消しを繰り返し、マスターと向かい合う後ろ姿を見てきた。そわそわしながら感想を待ち、厳しい批評に肩を落とす姿を見てきた。

それでも彼女は、原稿用紙を通じて自分自身と対峙することを、決して辞めようとはしなかった。

あれが好きという感情によるものでなければ、一体この世に好きという概念は存在し得るのだろうか。

書く事が好きで、人の感想を聞くのが好きで、褒められるのはもっと好き。

人に認められなければ自己を確立できない幼稚な承認欲求？言いたいやつには言わせておけばいいのだ。すくなくとも青山女史は、あの生意気な後輩という、何者にも代え難い理解者を得ているのだから。それでも何か不満があるというのなら、私がそいつの頭を、高校球児のようにバリカンで丸坊主にしてやる。

私がそう思った途端、画面から金属バットの鋭い音がした。球場全体を揺るがすような大きな歓声打ち消されまいと、声を張り上げて興奮したアナウンサーの実況が続いた。

— 打った、打ちましたが、これはどうだー!!左中間に鋭い打球、どうだ?…:獲った、サードのファインプレー、ショート受け取って、バックホーム!…:アウト!アウトです!!宇佐山第一、8回裏のピンチを切り抜けました!!!—

画面の中で、2年生のエースが海老のように体を反って、天に向かって大きなガッツポーズをしてみせた。また高野連のお偉方は怒るかもしれないが、明日のスポーツ面の見出しは決まったも同然だろう。

「知ってますか青山さん。この投手、貴方と同じ年なんだそうですよ」「ふふっ、そうですか」

背中越しに聞く彼女の声は、いつもの青山翠のものであったと思う。最もそんなに長く付き合ったというわけでもないのに、確証はないのだが。

「はいよ、御注文のブルーマウンテンだ」

いつもの倍以上の時間をかけたコーヒーを、香風老人は青山女史に手渡す。青山女史は神妙な態度でそれを受け取ると、香りと熱を楽しむように、ゆっくりとカップを傾ける。そして「ほう」と、官能的な吐息を溢した。

「…:やっぱり、美味しいですね。マスターのコーヒーは」「何、好きでやっていることだからな」

二人の会話に耳を傾けながら、私は気の狂ったようなブルーベリーや、ながーい銀行のCMが流れる画面から視線を逸らすと、青山女史の様子をもう一度横目で伺った。

「そうですね。好きでやってることですからね」

コーヒーを楽しむ青山女史の横顔は、いつも通りの屈託のない、爛漫な笑みが浮かんでいた。

*

長い銀行のCM空けのじゃんけんにおいて、青山女史は見事勝利を収めた。ちなみにマスターはあいこ、私個人は5連敗となったことを付け加えておく。

試合は宇佐山第一が3対2で勝利し、私の地元代表である聖ラビッツ学院大付属は、去年に続いてベスト16で夏を終えた。

アルコールは二十歳になってからだけど、そもそも飲めない奴だっている（その1）

落語家の立川談志は「酒が人間をダメにするんじゃない。人間がもともとダメな存在だということを教えてくれるものだ」という言葉を残している。二日酔いで沖縄開発政務次官を更迭された御仁の発言だということを踏まえて考えると、なんとも含蓄のある発言である。

酒に関する諺は、コーヒーの格言よりも遥かに多い。アルコールの害を説くよりも、それをたしなむ人間への苦言が多いような気がするのは、いかに人類が長い間、この「キチガイ水」と付き合ってきたかということの証左であろう。

というわけで酒臭いならぬ、生臭い話をひとつ。

アルコールに対する宗教的タブーのない日本は、その取り扱いについて寛大とされる。だがそれは、あくまで嗜好品の対象として購入、あるいは摂取する場合に限られている。昨今の飲酒運転の取り締まり強化によつて、そのタブーも変化しつつあるとされるが、流通や販売のハードルは元から高いのだ。

それを裏付けるように、一昔前まで旧大蔵省において重要な徴税対象だったのは煙草と塩、そして酒である。

酒類、つまりアルコール類の販売には「酒類販売免許」と呼ばれる管轄の税務署長からの許認可が必要であり、またこの免許があったとしても、年に何回かの講習を受ける義務が生じる。仮に受講を拒否したり、販売業者としてふさわしくないと判断されれば、免許剥奪もありうるという厳しいものだ。

「自己の飲食店の中で、食事等と共に提供する」限りにおいては、該当する保険所の許可だけでもよいのだが、販売免許があったほうが、より幅広い商売が可能になることは想像がつくだろう。例えばレストランで提供したワインやウイスキーをお客様が気に入ったとすれば、それとなくお土産としての買い上げを進めることも可能になる。しかし飲食店や酒場は、酒類販売の場所としては「不適格である」と

というのが税務署の見解であり、前述のような商売は本来なら不可能である。

この酒類販売免許だが、新規申請のハードルは極めて高い。既存の経営との厳格な分離、一定以上の資産や販売場所の確保と申請、地方自治体の条件のクリア等々。決して不可能ではないが、とにかく片手間では片付けられないだけの時間と労力が必要である。行政書士による代行も可能だが、思い付き程度の考えで依頼するにすれば、いささか尻込みする金額を要求される。具体的には6ケタ程度。

そのため、休眠状態にある酒屋や居酒屋（申請が今ほど厳格でない時代にとりあえず確保していた）から既存の販売免許を買収したり、名義貸しで営業するという抜け穴的な商売があるとか、ないとか、あるような、ないような……

伝聞であるので事実かどうかは知らない。知らないので税務署さんは来ないでください。

さて「ラビット・ハウス」である。

元々、ここで営業していた居酒屋飲食店から営業譲渡をうけたマスター、つまり香風^{かふう}老人が、店内を自分好みに全面改装して営業を開始したのが始まりである。そしてお上には従順であるマスターは、年間講習を受け続けてきた。

つまり香風老人は、喫茶店のオーナー経営者でありながら、酒類販売免許を保持している。

「ワシは、ラビット・ハウスを酒屋にするつもりはない!!」

経営改善案の一環として、それとなく酒類販売の取り扱いを提案したタカヒロさんに、香風老人は青筋を立てて激怒した。

まあ、そらそうなるわな。

*

毎年のように異常気象が騒がれる中であつても、「暑さ寒さも彼岸まで」の格言は不変のようだ。この街の支配者たる傍若無人な耳長と、被支配者である我ら人類を、等しく頭上から苦しめた夏の太陽射たる炎帝は、8月15日を前後として表情を変える。無慈悲な陽射しは、僅かながらも鋭さを緩め、体感的にも精神的にも開放されたよう

な錯覚を私たちに齎す。ひよつとすると、あちらに戻る御先祖様が、苦しむ子孫を見かねて、茄子の牛か胡瓜の馬の背中に炎帝様を乗せて連れてくのかもしれない。

とはいえ、カレンダー上はまだ8月。炎帝の姿が去ったとしても、喉の奥にへばりつくような残暑は健在である。「ラビット・ハウス」の定休日であるこの日、私は「臨時休館」の張り紙が貼られた図書館の玄関前で、途方に暮れていた。

観光に特化した「木組みの家と石畳の街」の中でも、この街の図書館はちよつとした名所である。大正期の富豪の別宅を改装した建物は、観光客の間でも人気が高いが、同時に公立図書館としても日本では十の指に入る存在だ。

他の公立図書館が財政的に苦境に立たされる中、篤志家からの支援による強固な財政基盤に支えられ、私の通う大学を始めとした全国の教育機関との連携も充実している。寄贈された収蔵書籍の中には、国立国会図書館にすら現物がないという歴史的価値のあるものが多数含まれており、東西を問わない稀覯書や稀書、あるいは珍本の類まで取り揃えている。この図書館を目当てに、国内外から街を訪れる学者先生もいるとか。

とはいえ私のような特に目的意識のない大学生にとっては、安い利用料でクローラーの効いた場所を利用出来るという以上の意味はない。提携大学の学生は無料で利用出来ることから、資料探しの名目で、涼をとるついでに冷房代を節約しようという私の計画は、張り紙一枚であっけなく頓挫した。

どうしたものかと途方に暮れる私の視線に、図書館玄関脇の掲示板に張られたポスターが目にとまった。

「花火大会ねえ」

「去年のクライマックスの、大玉三十連発は壮観でしたよ」

何回目だ、青山。

*

「お暇なら一緒にしませんか」という女神からの御誘いに、何も知らない初な女の子のように（あるいは餌のない針に食らいつくタボハゼ

の如く) ほしいほしい飛びついた私であったが、目的地が『甘兎庵』であると伝えられた際には、少しばかり厭な予感がしたものだ。

そして、私の予想は的中する事になる。

「いらし「ああー!!!」ませえー?」

私と青山女史が『甘兎庵』に連れだつて入ると、女性店員の挨拶を遮るようにして、あからさまに動揺した叫び声が店内に響く。絹を切り裂くような声に、店内にいた全ての人間は驚愕して「何事?」と視線を向けるが、騒動の元凶たる真手凛君は、全くそれに気がついていないようだ。おそらく青山女史しか見えていないであろう真手君は、中央のテーブル席から立ち上がったまま、私達を指さしている。口をパクパクさせている姿は、酸欠の金魚のようだ。

突然の叫び声と奇行に、店内に居合わせた不幸な人々は、相変わらず私達と真手君をキョロキョロと見比べている。和菓子が陳列されたショーケースの向こうでは、宇治松夫人がすざましい表情でこちらを(というよりも私を)睨んでいる。注目されることに慣れていない私は、いたたまれなくなつて、視線を木目調の床に落とした。

「成る程、和風の喫茶店というのもいいですねえ」

薄々感づいていたが、青山翠という人は相当な自由人である。店内の内装や家具を観察するためか、左右や天井に床と、あちこちに視線を投げ掛けながら真手君のいる席へと進む。私はといえば、青山女史の後ろで身を縮こませながら「すいません、連れなんです」と頭を下げて、御嬢様に仕る執事のように続いた。

中央のテーブル席につくや否や、私は真手君に嫌みのひとつでもぶつけてやろうかと考えていた。だが先手を打ったのは真手君であり、この小生意気な女学生は、青山女史と私の顔をじろじろと見比べてから「豚に真珠ですね」と厳しい一言を発した。

ここで大人しく引き下がっては、男の面目が立たない。私は青山女史から見えない位置にあるのをいいことに「ふふん、うらやましいだろう」と自慢する代わりに、にやりとほくそ笑む。

「な、あつ……?!」

あこがれの青山先輩の前で、声を荒らげるのは躊躇われたのだら

う。真手君は声にならぬ呻き声のようなものを漏らしつつ、ぎりぎり
とこちらを睨み付けている。私はようやく溜飲を下げ、心穏やかな気
持ちになった。

「豚に真珠か。俺はさしずめ金華豚かイベリコ豚かな？」

「は？何を勘違いしているんですか？先輩はせいぜい便所豚がいいと
ころです。そもそも豚は本来、綺麗好きな生き物、どうせ万年床の先
輩を豚に例えるなんて、豚に失礼というものです。今すぐ山に入って
イノシシの前で土下座してきてください。そして突き飛ばされてく
ださい」

「凜ちゃん、あまり乱暴な言葉を使っちゃ駄目だよ？」

「やーい、怒られてやんのー」

「店員さんもですよ？」

これには私もぐうの音も出ない。それを見た真手君は「ふふん」と
得意げに胸をそらした。そうしたところで、その板のような胸が膨む
わけでもないのにと私は考えたが、青山女史の手前、その言葉を飲み
込んだ。

その真手君は、白のレディース用カッターシャツに、スニーカー
ンズというシンプルな格好をしている。無意識かもしれないが自分
の容姿に自信がないと、特に足にフィットするタイプのスニーカー
ンズは履けないものだ。可愛いというよりもかっこいいという言葉
が相応しく、悔しいがそのスレンダーな、スレンダーな（大事な事な
ので2回言った）体型によく似合っていた。

一方で、こちらも私服姿の青山女史は、襟首の広い薄緑色のブラウ
スに、前にボタンのついたフロントボタンスカート。小物はそれにあ
わせた品のよいものをいくつか身に付けており、靴は赤いレディース
サンダルを履いていた。ファッションはよくわからないが、女神は何
を着ても美しく可愛いので問題は無い。

その青山女史が真手君から向かって正面の席、すなわち私の横の席
に着席すると、先ほどにもまして真手君があわあわと慌て始めた。

「あ、青山先輩。どうぞ私の横に来てください。そのほうが話しやす
いですし」

「私はここで大丈夫ですよ。それにこの席だと、凜ちゃんの顔が正面からよく見えますからね」

「いえ、でも……」

ぼそぼそと口ごもりながら、真手君が私に視線を向ける。私は特に何も考えていないよう顔でメニューを広げていたが、実際には青山女史の横に着席出来た事に舞い上がっており、メニューなどまったく頭に入っていない。それでも彼女の視線に気がついて顔を上げたが、真手君はぶいっと顔をそらした。

「だ、駄目ですー！そんな変態の横に座ったら、青山先輩が汚れますー！」
はっはーん、なるほど……

私はやたらと攻撃的だった彼女の不可解な言動が、ようやく腑に落ちた。要するに真手君は、大好きな先輩が誰かに取られるかもしれないと焦っているのだ。私の女神に対する信仰を俗人のそれと同一視しているのは気に入らないが、それはそれで面白い。顔を真っ赤にする真手君に対して、私はここぞとばかりに追撃をかけた。

「ひどい、ひどいわ凜ちゃん！そんなひどいことを言うなんて、おじさんは悲しいよー！」

「……なっ、あり、凜ちゃんって!!先輩に私の事を呼び捨てにされる筋合いはありません！大体、先輩は私の一体何なんですか！」

「熱中症になりかけたところに、救いの手を差し伸べた命の恩人だよ」
「むっきー!!」

「やかましいよあんたら!!」

私と真手君の後頭部を、宇治松夫人が両手に持った木のお盆で遠慮なく引つ叩いた。

「あ、お婆さん。私この抹茶と善哉のセットで。お餅はふたつでお願いしますねー」

あ、青山さあん……

*

ほどよく冷房が効いている「甘兎庵」の店内には、焙煎した茶葉と熱を加えられた小豆特有の香りが立ち込めている。木目調で統一されたインテリアの中で、ショーウィンドーに並ぶ色彩豊かな和菓子達

は、鮮烈かつ自然な対比となり、客の目と舌を楽しませていた。

そんな静かで穏やかな時間が流れる「甘兎庵」だが、ひとときわ異彩を放つインテリアが、店の中央に鎮座している。鉄棒を床に突き刺して垂直にした上に、鉄球を半分にかットして突き刺したような謎の装置。単なるインテリアにしては存在感がありすぎるし、実用性があるとも思えない。どのような意図によって、これが設計され、そして設置されたのか。

「なんで先輩がここにいるんですか？」

少なくとも、後頭部の鈍痛に襲われている私には想像もつかない。

「ちよつと先輩、無視しないでくださいよ」

「……ああ、先輩って俺のことか。一瞬、誰のことかわからなかった」

口の悪いリバーシブル胴体こと真手君は、私と同じように後頭部を抑えながら、小声で詰問する。声を出せば頭に響くからだろう。

それにしてもあの婆さん、手加減なしにおもいつきり叩きやがって……まあ、他の客の迷惑も顧みず、店内で騒ぐだけ騒いだ私と真手君が全面的に悪いのではあるが。全く、末恐ろしい婆さんである。婆さんで末恐ろしいというのも妙な話だが。

そんな下らないことに思考を飛ばしながら、私は真手君に対して、青山女史に同道を許可された経緯を簡潔に伝えた。

「青山さんに図書館でナンパされてね」

「なるほど。あの喫茶店をクビになったんですね。おめでとうございます」

「お前、人の話聞いてた？それとも頭叩かれておかしくなったか？」
「私はお前という名前じゃありません。それと先輩は叩かれても叩かれなくても、大して変わりませんね」

ああ言えばこう言う奴である。真手君への反論は山のようにあったが、この失礼きわまりない後輩に大学生としての余裕をみせつけるため、私は断腸の思いで腹の中におさめた。

「いきなり先輩扱いとは、どうした風の吹き回しなんだ？」

「いかに人面獣心の性欲野人な野蛮人であっても、年長者としての敬意は払うべきだと思います。たかが3年で大きな顔をしないで下

さいと思いますけど、先輩であることは変わりませんから」

「それに私は『貴方』の女房じゃありませんし」と、真手君は「貴方」のところを強調する。前回の私の発言を、いまだに根に持っているようだ。

「お待たせしました。抹茶です」

そうこうしている間に、私達が注文した商品が運ばれてくる。先ほど真手君によって発言が遮られた例の女性店員は、見事な営業スマイルを浮かべながら配膳作業を行う。だが、私の鋭い観察眼は、店員が青山女史と真手君の顔を順番に確認してから、最後に「何でこいつここにいるんだ」とでもいいいたげな視線を私に送ったことを見逃さなかった。

「セットの善哉はもう少々お時間がかかります。ごゆっくりどうぞ」

私としては店員の態度に憤慨してもよかったのだが、それよりも差し迫った問題を突きつけられていた。私は内心の焦りを隠しながら、目の前に置かれた抹茶を、茶道で使うような本格的な茶器に入れられたそれを見下ろしていた。

習字で使う墨汁のように真っ黒な色をしたそれは、茶碗というよりも円柱の底を切ったような形をしている。その中に泡立った深緑色の液体が満ちており、コントラストがなんとも美しい。香りと共に、仄かに立ち上る熱を感じさせるそれは、さながら一つの芸術作品のようだ。

……これ、どうすればいいんだ？

確かに私と真手君は、青山女史に釣られるように抹茶のセットを頼んだが、まさか本当に裏だか表だか武者小路だかで使うような器に入って出てくるとは、想定していない。

これはどうしたものかと視線を上げて見れば、真手君と視線がぶつかる。その焦りの表情からして、私と同じような思考を辿ったであろうことは想像に固くない。だからといって、助けを求めるといったような視線を向けられても困るのだが。それに「3年で先輩面しないでくれ」と言ったのは、君ではなかったか。

(先に飲んでいいよ)

(いえいえ、先輩からお先にどうぞ。遠慮なさらず、どうぞどうぞ)

(レディーファーストというだろ。君こそ遠慮しなくてもいい)

(やはりここは年長者を立てるべきかと……早く飲んでくださいよ)

(いやいや、まずは君から)

(いやいやいやいや、まずは先輩から)

言葉を交わさずとも、互いの気持ちは通じあった。アイコンタクトで醜い切実な押しつけ合いを続けること30秒近く。私と真手君の苛立ちと焦りが頂点に差し掛かったその時、穏やかな声が私達の耳に届いた。

「あ、これ美味しいですねえ」

あつけにとられる私達の視線の先で、青山女史は両手で茶碗を持ち上げて、一足早くお茶の味を楽しんでいた。確かに茶席じゃない、ただの喫茶店なんだから、普通に持ち上げて飲めばいいのか。そりやそうだよな。うん。

先ほどまでのやり取りがなんだか居た堪れなく、真手君も私も視線を合わせられない。私達は青山女史を見習い、見よう見まねで右手で茶碗の側面を持ち、左手を底に添える。そして鏡写しのように羞恥心で赤く染まった頬を隠すように、茶器を顔の近くまで持ち上げる。

なんとも馥郁とした香りが私の鼻をくすぐり、私は口をつける前に再度、茶器の中身をじっくりと観察した。

抹茶は混ぜるのではなく「練る」と表現する。流派によって細かな違いがあるようだが、粉の量が多ければ濃茶、少なければ薄茶と呼ばれるらしい。私の見る限りでは、この店の抹茶は濃茶に属するものようだ。私はゆつくりと茶器を傾けると、片栗で薄くとろみをつけたような液体を口に含んだ。

ずずつという音とともに、口の中から鼻の奥まで、鍋で煮詰めたかのような濃厚な茶の香りが広がる。

真つ先に感じたのは、抹茶の苦さである。しかしそれは、例えば収穫から少し時間が経過した野菜のような青臭さではない。ここに提供されるまでの、幾多の丁寧な下処理の工程をたどるように、幾層にも折り重なった重層な苦さである。そして十二単衣のような重ね着

の奥には、確かに旨味と甘さがあり、最後には口腔がそれで満たされた。

以前の騒動の際、香風老人は『甘兔の主人はどうしようもない因業ババアだが、抹茶と餡子に対する向き合いと姿勢だけは大したもの』と評価していた。そういえばメニューにも「当店で提供する抹茶はすべて前日に挽いたものを使用しております」という注意書きがあったはずだ。なるほど、丁寧に挽いて処理をした抹茶とは、こういうものなのか。

私は感心しつつ、さらにもう一口、この苦みを楽しもうと茶器を傾け……

「苦いですねこれ。抹茶オレにすればよかった」

「このお子ちやま舌め。家に帰って氷砂糖でも舐めてろ」

「な、何ですって!」

私は再び真手君と激しい言い合いになり、宇治松夫人から2度目となる嚴重注意処分を受けた。

アルコールは二十歳になってからだけど、そもそも飲めない奴だっている（その2）

老若男女を問わず、圧倒的な知名度と人気を、一過性のブームに終わらず維持し続けることを「国民的」という。この形容動詞に続くものは、団体でも個人でも作品でもかまわない。つまりアイドルでも俳優でも歌手でも、漫画でも小説でも楽曲でも、映画でもアニメでも舞台でもかまわない。そして「総理2年、歌手1年の使い捨て」という戯れ言にも語られるように、熱しやすく冷めやすい人心の偶像居続^{アイドル}けることは、非常に困難を極める。

平成への改元とほぼ時を同じくして、国民的歌手の美空ひばりと、国民的俳優の石原裕次郎が死去したことは、一時代の終わりを象徴する出来事^{イベント}として扱われたという。少なくとも「国民的」と表現することへの違和感や抵抗感は、まだ社会において希薄だったと言える。

そして「国民的」というキャッチコピーが清新さを失いつつあることは、平成の美空ひばりと平成の石原裕次郎が、ついに現れなかったことに象徴されている。一億総アイドル時代の到来と言われた80年代後半を経て、平成を代表する国民的男性アイドルグループが平成の終わりに解散した後、人気や実力において十二分に匹敵するグループや個人は存在していたにも関わらず、彼ら（あるいは彼女たち）に、メディアは「国民的」という形容動詞をつけることを躊躇した。

青山ブルーマウンテンこと青山翠が「国民的作家」に相応しいのか否かは、彼女の作風も含めて評価の別れるところだろう。それでも、幅広い世代の知名度と人気を集め続けているという意味においては、この一風変わったペンネームの女流作家は条件を満たしていると言える。私小説から純文学にファンタジーとなんでもござれの作家にしてエッセイスト、ドラマや映画、作詞や舞台の脚本も手がけ、出版不況といわれて久しいご時勢に、新作小説を出せば重版確定という人気作家だ。

バラエティ番組や教育番組の司会もこなすマルチタレントとして

の顔も併せ持ち、視聴率の女王ならぬ「視聴率の姫」との異名も。どこか幼さを残した容姿にも関わらず、確かに大人であることを証明する抜群のスタイル。芸能事務所から幾度となくモデルや女優業の打診をされたが、「恥ずかしい」を理由に、その申し入れを断っているそうだ。

出る杭は打たれる時世にあり、これだけ多方面で活躍しながら、同時にこれだけ多くの人間に好かれるというのも珍しい。ある雑誌特集が批判記事を書き始めたところ、何故か取材を経た編集会議では「青山ブルーマウンテンの魅力に迫る」になるという、わけのわからなさだ。タレント活動によって本業がおろそかになることもなく、月刊から週刊、小説にコラムにエッセイに台本と活躍を続けている。彼女の個人的な秘書を兼務している敏腕女性編集者の存在があるにしても、これは驚くべきことだ。

さて、うだつの上がらぬ社会人となって久しい私には、一つの自慢がある。

累計発行部数は200万部を突破し、今現在も重版を繰り返して記録更新中。

幾多の文学賞を総なめにして、ドラマに舞台、そして映画と大成功をおさめた化物コンテンツ。

青山ワールドと呼ばれる一連の作品の世界観の基盤となり、ブルーマウンテンの名前を世間に知らしめることになった伝説の始まり。

『うさぎになったバリスタ』の初期構想会議に、私は立ち会ったのだ。

*

バリスタとは何か。

英米法の法体系の国において、法廷での弁論や証拠取調べの職務を行う法廷弁護士のことをバリスタと呼ぶ。ドラマでよくある「異議あり！」を専門にしている弁護士と考えればわかりやすいか。うさぎになった法廷弁護士。なるほど、うさぎのように情報収集を行うのという暗喩にもなっている。耳の長いうさぎになれという比喻表現が

あつたように、情報戦で検察側の立証を崩す。うん。悪くないのではないか。

「違いますよ。」

電子部品にはバリスタとよばれるものがある。これは一つの部品に2つの電極を持ち、一定以上に電圧が高くなると急激に電気抵抗が低くなる特性を生かして、電力機器を急激な異常高電圧である落雷から守る避雷器や、携帯電子機器を静電気から保護する、あるいは――

「違いますねー」

古代ローマから中世初期にかけて欧州で使用された据え置き式の大形弩砲、つまり弓である。これは「てこ」の原理によつて人力ながら弦を極限まで絞り、矢だけではなく石や火炎瓶、大型の槍などを撃ちだした。白兵戦や攻城戦、軍船に載せて海戦に使用することもあり――

「……先輩、わかつてやってるでしょう」

「てへー」

「インチも可愛くないです」

困つたように目じりを下げる青山女史に代わり、敬愛する青山先輩と反比例するかのように目じりがつりあがつた真手君が、法廷弁護士のように私を容赦なく詰問する。ちよつとした悪戯心じゃないかと、私は反論の機会を求めたが「それ以上ふざけていると、わかりますね？」という裁判長兼検察兼弁護士の真手君の無言の圧に、即座に罪を認めて謝罪した。

それにしても、実に奇妙な組み合わせである。風采の上がない男子大学生と、受験が近づく高校2年生(女神)、その後輩の高校1年生。私としては両手に花と言えなくもないが、かたや型にはまらない自由奔放な女神。かたや暴言マシーンである。綺麗な花にはなんとやらだ。それを真手君に伝えようものなら「より好み出来る立場ですか。相手にするつもりはありませんけど」等と憎まれ口を叩くであろうから、口には出さないが。

そ真手君と私が「甘兎庵」の女主人に説教を受けている間、青山女史は焼き餅が2つ入った善哉を完食していた。「ご馳走様でした」と

行儀よく手を合わせた姿は、いかにも育ちの良さ与人柄の善良さを伺わせるものであり、私は大いに癒された。

「尊いです……」

このわけのわからぬ台詞を呟いたのは、サツカリンでもぶちまけられたような恍惚とした表情を浮かべた真手君である。「青山女神論」を公言してはばからない私が言うのものなんだが、この真手君も相当なものである。好いた惚れたの百合ではなく、作家としての青山翠に惚れ込んでいただけとは思うが。

店への謝罪の意味も含めて日本茶の追加注文をした私達は、席替えを行った。4人席で青山女史の正面に真手君、その斜め前、つまり真手君の左隣に私が座る格好である。これは断じて私が青山女史から嫌われたからではなく、彼女の希望で相談しやすいように席を移動しただけである。

さてバリスタだ。

スペインやイタリアなど南欧州でバール（英語圏のバー）は軽食喫茶店、あるいは酒場のことを指す。カクテルなど酒類関係を扱うのがバーマン（米国ではバーテンダー）、非アルコール飲料、主にコーヒー関連を中心に取り扱うのがバリスタと呼ばれる。前者のバーマンと対比して、バールマン（バール全体のプロ）と呼称されることもある。

「ラビット・ハウス」は、言うまでもなく軽食喫茶店、つまりバールである。そしてオーナー店主兼料理人の香風老人は、ほとんど一人で店を切り盛りしてきた。これはタカヒロさんから聞いた話だが、店頭で提供こそしていないものの、カクテル類などアルコールに関する知識も相当なものだとか。なのでバールマンと呼んでもおかしくはないのだが、老人のコーヒーに対する自信と自負、そして覚悟を踏まえらるならば、ここはバリスタと呼んだほうが相応しいだろう。そもそも自分でバリスタと名乗っているし。

これらの前提条件に青山女史の述べたタイトルを付き合わせて考えてみると、何が推察されるか？

「つまり香風の爺さんを、君の小説のモデルにすると」

「マスターを呼び捨てにしてもいいんですか？」

「いいんだよ、バイト中じゃないんだから」

そもそもそこじゃないだろう、そこじゃ。首をこてんと傾けるんじゃない。可愛いじゃないか……もとい。

「本人に許可はとったのか？」

「はい。マスターに直接お会いして、許可を頂きました」

何やってんだあの爺。

私の脳裏に散々もったいぶった挙句「仕方がないな」とか言いながら、まんざらでもなさそうな香風老人の顔が思い浮かんだ。

なんだか無性に腹が立った。

「ジャンルとしては……ノン・フィクションか」

フィクションはラテン語の「作られたもの」を語源とする。作り話や想像、事実ではない事などネガティブな意味合いが並ぶが、文学用語としてのフィクションは「架空の出来事を想像して書いた作品。詩や劇を除いた小説全般」という意味で使われるのだそうだ。

なお、ソースは横で得意げに解説してくれている真手君である。

これに否定のノン(non)がついたのが、ノン・フィクション。つまり作り話は駄目、想像もダメ、事実でないことは論外。史実や記録に基づいた作品全般を指すことになる。小説、映像作品、インタビュー、ドキュメンタリー等々。とはいえ想像がダメだとはいっても、どうしても作品には表現者の問題意識や主観が入るものである。このあたりの表現の問題は難しいのだそうだ。

なおソースは「えっへん」と得意気な真手。

「考えてみれば妙な話だよな。まずは想像上の創作ありきで、その非定を史実や記録を題材にした作品を指す単語にしてしまうのだから」
「普通は逆ですよ。いまさら定着した概念に文句をつけるのも非生産的だと思いますが、その概念を無批判に受け入れてしまったのも問題があったのかもしれない」

「語源はラテン語だったっけ？唯一絶対のキリスト教的な価値観が定着していく歴史の中での抵抗だと考えると面白いけど、実際にはどうなんだろうな」

「すいません。辞典の限界が私の限界なんです」

「あの、違うんです」

私と真手君が柄にもない知的な会話をしていると、この奇妙な会合の呼びかけ人である青山女史が、申し訳なさそうに口を挟んだ。

「すみません。作品の主人公のモデルとさせていただけだけで、実際にはフィクションにするつもりです」

さいですか。

さて、そうになると私としては青山女史の言わんとすることが理解できず、困ってしまう。そもそも私は彼女の作品を読んだことがなく、どのような作風や文体なのかも知らないのだ。相談相手としてはいささか不適格ではないかと考えていると、私の右隣の真手君がここぞとばかりに身を乗り出した。

「うさぎになったバリスタ。隠喩や暗喩ではなく、文字通りの意味なんでしょうか?」

「そうなの。さすが凜ちゃん」

青山女史の言葉に、照れたように下を向く真手君。
なるほど、わからん。

私が阿呆面を晒しているのを見かねてか、真手君の解釈に青山女史が説明を付け加える。

「本格的な空想的な科学小説、つまりサイエンス・フィクションではなくて。強いて言うのなら少し不思議な・フィクションでSFといったところでしょうか」

「時をかける少女みたいなのですか?」

昭和42年(1967)初版の、今や古典といってもよいタイムトラベル学園青春群像小説の名前を上げる私に「あの作品ほど強いわけじゃないですね」と青山女史。そういえば作者の筒井康隆先生が、とある番組で「この娘はよー、金を稼いでくれる孝行娘」と語っていたことがあったなあと、私はどうでもいいことを思い出していた。

「タイムトラベルのような強い、物語の革新的な部分でSFを、つまりサイエンスのほうのSF要素を使いたいわけではないんですけどね」
「どこで線引きするかという問題ですよ。よくある表現という用語弊がありますけど、漫画や小説の中のイベントとして一時的な神隠し

や、肝試しでの謎の参加者というものがあつたとします。するとその作品全体が自動的にファンタジーに分類されるのかと言われると、それは違うでしょうし」

慎重に言葉を選びながら発言する青山女史を補足するように、真手君が続ける。しかしまあ、私に対する悪口と同じで、この場に必要と思われる知識がポンポンと出てくる娘である。なるほど、青山女史はこれを期待して真手君を呼び出したわけか。

しかしそうすると、ますます青山女史の意図がわからない。私がここに招かれた理由、私に期待されている役割とは一体なんなのだけ？

「私としては、そうですね。あくまで現実的な世界観の中に、少しだけファンタジー要素を入れたものを書いてみたいんです」

「夏目友人帳のにゃんこ先生だけが、現実世界に存在しているみたいなものかな？」

「うーん……にゃんこ先生は、夏目友人帳の世界観と切り離せない存在だと私は考えていますので」

青山女史が申し訳なさそうに首を傾げ、その横で真手君が「余計なことと言わないでください」と言わんばかりに私を叱責する視線飛ばす。真手君に指摘されるのは癪だが、これは私が悪かった。無理やり会話に加わろうとして、知っている漫画の知識で無理やり解釈しようとしたからだ。夏目友人帳にも青山女史にも失礼だった。

こういう具合に私はサブカル趣味は一通り嗜んではいたが、完全に振り切れるほどハマっているわけでもない。かといって文学的な素養があるわけでもないから、話についていくのがやつとである。そんな私の質問にも、あだおろそかな対応をせず、真摯に回答してくれる青山女史はやはり女神であるといえる。真手君も見習え。さすれば人間としてひと回りもふた回りも大きくなれるぞ。どことは言わないが。

どうせ文学的な知識や教養を期待されているわけでもない。開き直った私は脱線し続ける会話を本題に戻すことを促した。

「その『うさぎになったバリスタ』のあらすじは？」

「主人公のバリスタのお爺さんが、うさぎになってしまっんです」

「なるほど」

全くもってわからん。

*

創作の契機になったというマスターとの会話について、青山女史から説明を受けた私は、後頭部で両手を組み合わせ、「甘兎庵」の見慣れぬ天井を仰いだ。

「……兎になりたいって、あの爺はい年して何を言ってるんだよ」

青山女史から話を聞くまで、私はてつきり魔女の呪いか何かで耳長にされたバリスタの老人が、元の体に戻るために悪戦苦闘する話なのかと考えていた。ところが実際にはバリスタの老人が望んで耳長に変身する話なのだとか。これではアベコベではないか。

「マスターの発言がヒントになったんです」

話だけを聞いていると何ともメルヘンであり微笑ましい？のだが、現実是非常である。いくら常連とはいえ、約半世紀近く年が離れている女学生に対して、息子も孫もいる老人が「うさぎになりてえ」などと愚痴をこぼす姿など、想像したくもない。見れば真手君も軽く、いやかなり引いていた。

私達の何とも言えない表情を見て察したのか、青山女史は慌てて香風老人の名誉を守るように付け加える。

「いえいえ、マスターは私におっしゃったのではなく、たまたま私がマスターの独り言を聞いてしまったのです。そして理由をお尋ねしたら、なんでも借金が苦しいので、ついそう言ってしまったと」

「余計に悪いわ」

どうせまた、神出鬼没な青山女史に気がつかずに独り言を零してしまったとか、そんなことなのだろう。事務仕事や会計処理、あるいは支払期日や銀行への返済日毎にんやわんやしている裏方の苦労を見てきただけに強く批判しないが、いくらなんでもそれはどうなのか。

そしてここからが青山翠―後に青山ブルーマウンテンとして世に名を知られる彼女の真骨頂である。私が同じ場面に居合わせたとしても「爺働け」で終わるところだが、青山女史の導き出したものは、凡

人のそれとはかけ離れていた。

「ですからマスターがうさぎになってしまったという小説なら、面白いものが書けるのではないかなあと思ひまして」

……今の話のどこに、そんな要素があつたというのだ？ 私にはファンタジーの世界観そのものである、この「木組みの家と石畳の街」の中にあつて、世知辛い現実社会を生きる苦悩と苦闘を凝縮したような話にしか聞こえなかつたのだが。

真手君と私は、期せずして顔を見合わせた。青山翠の世界観に惚れ込み、ファン第1号を公言する真手君をもつてしても、青山女史の発想には完全には追いついていけてないらしい。私は少しだけ彼女に凡人としての共感を感じて、安堵した。

「具体的な内容についてはこれから検討するんですが、そこで店員さんです」

「……あ、俺のことか」

「はい。ぜひ店員さんにしか頼めないことがあります」

青山女史は私の手を取らなばかりに身を乗り出して、私を誘つた本題をようやく切り出した。

「私のスパイになって欲しいんです」

何を言っているのだろうか、この人は。

アルコールは二十歳になってからだけど、そもそも飲めない奴だっている（その3）

英国の作家イアン・フレミング（1908—1964）は、政治家の息子としてロンドンに生まれた。陸軍士官学校を卒業後、都市銀行や貿易業を経てロイター通信に勤務。革命政権の支配するモスクワ支局長となった。妻は連合王国の貴族出身……とまあ、お察しな経歴である。さすがはサー・フランシス・ウォルシンガムを生んだ、スパイと諜報の国というべきか。

第2次大戦（1939—45）が勃発すると、フレミングは海軍情報部所属の中佐として、中立国スペインに対する諜報・政治工作を行う特殊任務「ゴールドデン・アイ作戦」を指揮した。いくら士官学校を卒業していたとはいえ、いきなりズブの素人が政治的色合いの濃い特殊作戦を指揮出来るはずがない。大仰な名前がついている割には、本当に隠す気があったのだろうか？

大戦後、退役したフレミングは、中南米のジャマイカに購入した自分の別荘に「ゴールドデンアイ」と名づけ、スパイ小説の執筆を開始。女王陛下の007^{ダヴルオーセブン}、MI6所属の秘密工作員にして殺しのライセンスをもつ、世界でもっとも有名なスパイ。ジェームズ・ボンドは、こうして世に生み出された。

有名なスパイという矛盾した形容詞の是非は別にして、私がスパイと聞いて真っ先に思い出したのは、この英国人作家が生み出した紅茶嫌いの007である。まあ、それ以外の名前を挙げると言われても、少なくとも私には思いつかない。現役のスパイが主人公なのは、むしろ珍しい部類に入るのではないだろうか。私の読書歴、あるいは映画遍歴は偏っているので、断言は出来ないが。

たとえばランボーは帰還兵だし、ケイシー・ライバックはコックで、ジャック・ライアンはスパイというよりも工作員の印象が強い。インディアナ・ジョーンズは、大戦中に母国の諜報機関に協力したが、彼の本業は考古学者である。ジム・フェルプスは実在しない工作機関の

諜報工作員だが、頭に「元」がつく。ジョン・マックレーンに至っては、NY市警の刑事だ。ジャック・バウアーは治安警察なのか公安警察なのか線引きが難しいが、あくまで捜査官でありスパイではないという具合である。

ところで007シリーズは、戦間期や世界大戦直後にイギリスやアメリカで数多く出版された執筆されたスパイ小説とは、大きく作風が異なっている。イアン・フレミングは、リアリズム路線のスパイ小説に躊躇なく見切りをつけ、40年代以降にアメリカで流行したハード・ボイルド路線を、作品の中に大胆に取り入れた(ソースは真手君)。

ハードボイルドとは、いわゆる大都会のうらぶれた事務所を拠点とする私立探偵であり、愛車と酒、あるいは女にこだわり、「強くなければ生きていけない、やさしくなければ生きていく資格がない」と嘯き、喧嘩に強い。西村京太郎が生み出し、水谷豊が演じた左文字進のような、コテコテの探偵のイメージを想像していただければ、わかりやすいだろう。それでもスパイ小説としての一線を踏み外さなかったのは、フレミングの大戦中の経験があったからか。

ジェームス・ボンドは、スコットランド人の父親とスイス人の母親の間に生まれた。前述したように、女王陛下のスパイでありながら大のコーヒー党であり、紅茶が大の嫌いという設定である。「大英帝国衰退の原因は、毎日あんなものを、定刻同じ時間に飲んでいたからだ」と言い放ち、直属の上司であるMを呆れさせている。もつともそれは、体面ばかりを重んじて貴重な時間を浪費している祖国に対する愛国者ボンド(あるいは作者であるフレミングの)皮肉であったようだが。

ボンドが愛飲するコーヒーは、ブルーマウンテン。フレミングが居を構えたジャマイカが、世界に誇る高級豆である。ボンドのブルーマウンテンに対するこだわりは、自分の目で厳選した豆を、手挽きのコーヒーミルで挽き、砂時計のようなフォームで知られるケメックス式のコーヒーメーカーを使い……という具合に、原作小説や映像作品においても確認出来る。確かに、この辺の意味があるのかないのかよくわからない設定の作りこみ具合も、私立探偵物にありがちではあ

る。

「いいですよ」

『甘兎庵』における三者会合の席上、ボンドの愛するコーヒー豆と同じ名字を持つ青山女史からスパイの勧誘を受けた私は、迷うことなくYESと答えた。私は女神からの期待と重圧にうち震えていたが、その間、真手君はバカを見るような視線を私に向けながら、何も言わずに日本茶を啜っていた。

青山女史が初めて挑戦する長編小説「うさぎになったバリスタ（仮題）」は、マスターこと香風老人を主人公のモデルにすることについては、すでに述べた通りだ。仮題にもある忌々しい耳長が、どのような形で物語と関連してくるかは、私には想像も出来ないが。ともあれ、物語の舞台を喫茶店にしたいと続けた青山女史は、第三者としての客観的な視点を提供してほしいと私に対して依頼した。

「出来れば私がアルバイトをして取材したいのですが、この作品はノン・フィクションにしたいわけではありませんので。その点、店員さんはマスターとの関係性が近すぎず、かといって遠すぎない。程よい距離間と位置にいらつしやいます」

2カ月程度の付き合いでありながら、青山女史は私とマスターとの関係性について明快に説明して見せた。それを聞いた私は、よく人を見ているなど感心した。確かに私はマスターに親しみを覚えているが、同時に一線を引いて付き合い合っていたからである。やはり物書きという人種は人よりも観察眼に優れているのだろうか。

ともあれ私は青山女史の「目」になることを引き受けた。引き受けてしまった。

その後、私と青山女史はボンド談義で大いに盛り上がり（真手君はあきれ返っていたが）、映画初代のショーン・コネリーと、5代目のピアース・ブロスナンの、どちらがよりボンドらしいかで、舌鋒鋭く論戦を交わした。なお真手君は抹茶オレをお代わりしていた。

なお私は断然、ブロスナン派である。95年の「ゴールデンアイ」でサントペテルブルク市内を戦車で暴れまわったシーンは、男の子としては燃え上がらずにはいられない。大洗の戦車女子アニメを見た

時、私は真つ先にこれを思い出したものだ。そしてシヨーン・ビーン演じた敵役のアレックの両親が、イギリスの裏切りにより処刑されたという下りは涙なくしては語れないという点において、私と青山女史は大いに意気投合し、固い握手を交わした。なお真手君は抹茶パフェを注文していた。

「いつそのこと、ペンネームもボンドに困んでみるのもいいかもしれないですねー」

「それはいい。青山ゴールデンアイ、いや、いつそのこと揃えますか」「ブルーマウンテン青山、いや青山ブルーマウンテンですか？」

「日本語にすると青山青山、苗字と名前が同じで何がなんだかわからないけど、インパクトはあるな」

「それ、頂きますね」

私が女王陛下に忠誠を誓う頃、真手君はアイス最中を食べていた。

*

『甘兎庵』の支払いは、私がまとめて支払った。炊きあがった小豆の甘い匂いが立ち込める中での会合ではあったが、少なくとも会話に甘いものは含まれていなかった。少なくともデートではない。それはそれとして、私は3人の中の最年長の男として、見栄をはりたかったのだ。支払いの際、私の財布から樋口一葉が旅立った時には、少しばかり後悔しなかったわけではないが。

「先輩、ご馳走様でした」

「……お前には次からは奢らない」

所用があるという青山女史と『甘兎庵』の玄関で別れた私は、ニコしながらこちらに向かって礼を言う真手君に顔を思いつきりしかめた。

「遠慮もなく飲み食いしやがって」

「流石は先輩。男の甲斐性ですね」

「調子のいいことを言うな」

大通りまでは方向が一緒だということで、真手君と揃って歩き出す。少し雲が出て太陽を覆い隠してくれたおかげで、日差しは大分ましだが、それでもじとつとした湿気は健在である。耳長を見かけないのは

大いに結構なのだが。

それにしてもおしやれのためかどうかは知らないが、よくこんな時期にスキニーフジーンズを履けるものだと、私は真手君に直接伝えた。すると真手君はやれやれと首を振り「本当に先輩は女心というのがわかっていませんね」と言い放つ。

「青山先輩と会うのに変な格好は出来ませんよ。たとえば服の下で滝のような汗を流してもです」

「比喩表現だとはわかっていているが、健康に悪いからほどほどにしておけよ」

「はいはい」

「はいは一回」

「先生ですか!」

真手君のつつこみに、私はあははと笑った。

君子の交わりは淡きこと水の如し、小人の交わりは甘きこと醴の如しという。べたべたとした付き合いよりも、淡い水のようなさっぱりとした付き合いのほうが長続きするという意味だ。彼女のさっぱりとした性格もあるのだろうが、後に残らない遠慮のない会話というものは、こちらとしても気持ちがいい。無論、相手がどう考えているかはわからないが。

「……先輩はどうして青山先輩のお誘いを請けたんですか?」

「美人のお誘いを断る奴がいるか?」

真手君の問いかけに、私は即座に答えた。

彼女はその答えがお気に召さなかったようであり、こちらを見上げるような視線でさらに尋ねる。

「まだお会いして2回目ですが、確かに先輩はスケベで失礼な人だというのわかります」

「本当に失礼だね君は」

「でもその、なんといいですか……」

真手君は自分の感覚が正しいという確証がないのか、言葉を選びながら続けた。

「先輩は馬鹿で下品で失礼ですけど、どこか自分と他人の間で、厳格な

線引きをしている気がするんです。近くて遠い、だから大学でも友人が少ないんじゃないですか？私ではつきり青山先輩の願いも、断ると思いましたよ」

「……本当に失礼なやつだなお前は」

先ほどと同じく私はあははと、今度は顔をしかめながら笑ったが、心中穏やかではなかった。まだ2回目だというのに、本当に嫌なところをズバリと突いてくる女である。

確かに彼女が推察したように、普段の私ならば青山女史の申し出を断っていただろう。

私は以前、青山女史との関係に悩む真手君に「君の代わりに問題の当事者にはなれないし、君も青山さんの代わりにはなれない」と、先輩風を吹かせて忠告したことがある。これは私の本心だ。

青山女史が新しい小説を書きたいという考えに至ったのは、彼女が悩んで試行錯誤した末に辿りついた決意であるはずだ。

確かに私は青山女史を女神として信仰しているし、知人として付き合いには好ましいとも感じている。何より創作活動に懸ける熱意は掛け値なく尊敬していた。だからこそ普段の私なら、何事も中途半端で生半可な人生を送ってきた私なら、何だかんだと理由をつけて断っていたはずなのだ。

他人の人生に責任などもちたくはないし、その方が楽である。

それを何故、私はあの時「いいですよ」と答えてしまったのか。

私の葛藤を知る由もない真手君は「ま、いいですけどね」と関心なさげに話を打ち切った。あるいは深入りするのはいくなくと彼女なりに感じたのかもしれない。

「あ、先輩。携帯出してください」

「何で？」

「何で？じゃないですよ。普通は可愛い後輩からこう言われたら、メールと番号の交換に決まってるじゃないですか。せつかくスパイに任命されたんですから、上司である私の番号を知らないと支障が出るでしょうし」

いつから君が上司になったんだ。私は女神に仕えるつもりはあつ

てもその手下に仕えるつもりはないぞと不満を言いつつ、私は携帯を胸ポケットから取り出す。

真手君は「今時、ガラホーですか」と文句を言いながら、自身のリング社製のスマートフォンを取り出して赤外線通信の段取りをする。5秒ほど通信機器を通じてお見合いをすると、チンチロリン♪と間抜けな音がして、画面に「真手凛」のプロフィールが映し出される。

さてこれは樋口一葉一枚のお代としては、高いのか安いのか。

別れ際、私は真手君に尋ねた。

「リンリンで登録してもいい?」

「消しますよ?」

登録を消すという意味だよね? 何で天破の構えをしてるのかな? 消えるのは私の命じゃないよね?

*

「というわけで、これ以降、私のことは007とお呼びください」

「なにが『というわけ』だ、この二重スパイめ」

人聞きの悪いことを言うマスターに、私は抗議の意味も含めて反論を試みた。最もすぐに「さっさと床を拭け」と命じられて断念したのだが。

定休日明けの『ラビット・ハウス』。昼休み明けの手の空いた時間を見計らって、私は青山女史や真手君との秘密会合の内容を香風老人にあっさりバラしていた。

これは女神を裏切ったわけでも、私の口が軽いからでも、ましてや二重スパイで報酬の二重取りをしようというわけでもない。「マスターに確認を取っている」という発言を確認するためだ。

これは青山女史を信頼していないというわけではない。ひよつとすると両者の認識に行き違いがあるかもしれない。私としては円満なバイト生活のためにも、その可能性を潰しておきたかったのだ。

初代ジェームズ・ボンドの和風シヨーン・コネリーこと香風老人は、こちらに背を向けながら愛用のベレッタの手入れ……ではなく、愛用の手動式白型コーヒーマイルで、ブルーマウンテンの豆を挽いていた。

もはやアンティークといってもよい旧式のミルは、幾度も補修を重

ねているため癖が強く、マスターでなければ同じ速さで挽く事が出来ない代物だ。

「君はスパイには向いておらん」

「無事これ名馬、事を省く『省事』が私のモットーですので」

「知ったような口をきくな。それと一つ忠告しておいてやる。人事を尽くした上での結果を受け入れる諦念と、怠惰で過ごした結果としての諦念は似て非なるものだから」

マスターは私と会話しながらも、そのミルを挽く速度は一定で乱れない。

たかが豆挽き、されど豆挽き。個々の豆の特性や品質、コーヒーメーカーや抽出方法、あるいはその日の湿度や気温にまで配慮した上で、もつとも望ましいサイズに均一にそろえる挽き方は、もはや職人芸である。

「知っているかね。このブルーマウンテンは、ジェームズ・ボンドも愛する高級ブランドなのだ」

私はそれを承知していたが、黙々と木目調の床を拭きながら「是非ともあやかりたいものです」とだけ応じた。すると香風老人は意地悪そうな声で、私の仕事の手を止めようとする。

「貴様が007というタイプか。精々、ジョニー・イングリッシュかオースティン・パワーズだろう」

「世界を救うという意味なら、大して差はありませんね」

「ワシとしたことが決定的なことを失念していた。君はそもそも女子とは無縁であったな」

二刀流のフランスパンで殴るぞ爺。

そういえばジョニーの邦題キャッチコピーは「アナログの逆襲」だったが、古いものに拘りながら意外と新しい物好きな香風老人は、その真逆のタイプである。

古き良き悪のプライドにこだわるドクター・イーブルと呼んだら、流星に激怒するだろうか？

「トルコにこのような諺がある。『コーヒーは地獄のごとく黒くあれ、死のごとく強くあれ、そして恋のごとく甘くあるべし』とな」

「つまりコーヒーを飲む時は、やたらと黒く煮出した、風味のかけらもない苦味の強いものに、砂糖を山盛り入れて吞めと？」

「馬鹿！例えだ、例え！」

そう言いながらマスターは専用の容器にブルーマウンテンの粉を入れていく。

この残暑厳しい時期では、冷暗所で保管しても3日もつかどうか。そのためどんなに忙しくても、マスターは夏場は必要最小限しか豆を挽かない。豆を無駄にしないのはよいことだが、商売つ気のないこと甚だしい。マスターのファンである常連さんは、豆から挽く場合であつても待つてくれるが。

もともとブルーマウンテンは希少品種だが、マスターはその中でも「本物」のブルーマウンテンしか仕入れない。そのためこの店では最も価格が高い。にもかかわらずブルーマウンテンを求める常連客は一定数は必ずいるというのだから、大したものである。

白形ミルの上部を外して掃除を始めたマスターは、思いついたように口を開く。

「中東の苛酷な自然環境はまさに地獄のように厳しく、そして死が溢れている。そのような中で生きて行くには強くなければならない。時には大事なものを切り捨て地獄を見ても。ただコーヒーを楽しむ時ぐらひは、心を休め寛いでもよいだろう……大よそ、そのような意味だな」

「……本当ですか？」

「半分は諺を聞いた私の推察で、半分は私のでっち上げだ」

人が真面目に感心していればこれだ。

香風老人は手を止め、ミルの引き出しを引いて粉を確認していた。得心のいく出来上がりだったらしく満面の笑みである。

「なんだったか。以前君が教えてくれたが、君の好きな小説にも似たような台詞があるそうだな。『人生は苦いが、コーヒーぐらひは甘いほうがいい』だったか」

「その割りに君はブラックでしか飲まないな」とマスターはからかうように言う。

「マスターのコーヒーに砂糖を入れるぐらいでしたら、私は日本茶に塩を入れて飲みますよ」

「褒められているのか、けなされているのかわからんな」

そういえば、かの甘ったるい缶コーヒーを愛飲する先のセリフの主である主人公は、私以上のひねくれ者である。彼は七転八倒の間違った青春ラブコメの末に「本物」が欲しいという本音をヒロイン達に告白出来た。

私はモップで床を拭きながら、マスターの手元のブルーマウンテンの粉が入れた容器に視線を向けた。

そこにあるものはマスターが独自のルートで仕入れた、間違いなく「本物」のブルーマウンテンの豆から挽かれたものである。

本来、ブルーマウンテンは希少種だ。ジャマイカのブルーマウンテン山脈の標高800mから1200mの特定地域で栽培された中から、農家や公社の厳選な検査を受けたものだけが「ブルーマウンテン」の名前を冠することが許される。

故に同じ品種であっても国外で栽培されたもの、あるいはジャマイカ国内でも800mより以下や、その他の地域、あるいはジャマイカ国外で栽培されたものはブルーマウンテンであって、ブルーマウンテンではないのだ。

日本国内でブルーマウンテンの名前で販売される量は、商社などを通じて正規のルートで輸入される豆の約3倍。ありていにいえば「まがい物」だ。

ジェームズ・ボンドなら、間違いなく偽物と切って捨てる類のものであろう。

しかし私にはそれらを偽物と切って捨てるのは、どうにも躊躇われた。ブルーマウンテンのブランドにただ乗りしているという批判はその通りかもしれないが、コーヒー農家や商社、メーカーの努力を一概に切り捨てるのは、何か違和感があったからだ。

ただ当時の私には、その漠然とした自身の考えを説明出来なかっただろうが。

「まあ精々、観察させてもらいますよ」

本物か偽物か。私は特にそういう意識もなくつぶやいたのだが、香風老人にはそう聞こえたらしい。老人はテストの点数を親に見せるのを嫌がる小学生のような表情を浮かべた。

夢の中では何でも出来るといふけれども、目覚めたら大抵は忘れていく（その1）

北海道や東日本の山岳地帯において、伝統的な狩猟方法により集団で獲物を追う狩猟者はマタギと呼ばれる。彼らの最大の特徴は、狩猟期が冬季であることだろう。諸説あるものの、その起源は平安時代にまで遡る。銃が伝来するはるか以前から、マタギは槍や弓を携えて雪山を駆け、山小屋において集団生活を行い、長期の狩猟を行った。そのためマタギは連帯意識が強く、独自の言葉や文化が継承されてきた。

スカ料理もその一つである。出羽北部（現在の秋田県）のマタギの間において伝わる伝統料理であり、平たく言うと野ウサギの腸や、その内容物を使った内臓料理である。

語弊や誤解を恐れずに平たくいえば、耳長の糞を食べるのだ。

冬季の間、野ウサギは木の芽や竹の新芽など限られた食物のみを食べる。そのため腸の内容物はきわめて清潔なものであり、そのまま取出してからすり潰して料理の薬味に使用したり、あるいは肛門周辺のものを取り除いた上で、そのまま糸で縛って茹でて腸詰のようにしたりと様々だ。厳寒期の厳しい環境において、マタギ達は獲物を追って、何時間も山を駆け回る。動物の内臓や血液を食することで、不足しがちな塩分を補給する意味合いもあったという。これも全てマタギの知恵といえよう。

厳しい環境に身をおきながらも人間としての生き方を貫く。マタギの生きざまにこそ、現代人が忘れていく最も大切なものを、私達に伝えてくれる存在ではあるまいか。「木組みの家と石畳の街」で怠惰な生活を営む耳長どもにも、野生の厳しさを思い知らせてやりたいものである。

*

大学は未だに夏季休暇中である9月の初頭。名ばかりの秋の太陽が照りつける中、私は額に滲む汗を首にかけてタオルでぬぐいながら

『ラビット・ハウス』の店前を箒で掃いていた。

スカ料理も食べていないのに、私が苦虫を噛み潰したような表情をしているのは、あの忌々しい耳長の糞を片付けていたからである。

文明化された人間が生物として懦弱になったといわれて久しいが、この「木組みの家と石畳の街」の野生であるはずの耳長も、それは同じである。白黒茶色、灰色にぶちと、体毛の模様こそ多種多様だが、揃いもそろってその体は丸々と肥え太っており、人間を見ても警戒心のかげらすら見せようとしない。むしろ「餌をよこせ」と王侯貴族のように傍若無人に振舞い、足元に体を擦り付けるばかり（そのくせ私には寄り付きもしない）。この街の墮落した耳長にとっては、彼らのご先祖様が野山や草原を駆け回り、マタギや狼、あるいは狐と死闘を繰り広げたのは遠い過去ののだろう。

まったく嘆かわしい限りである。

最も家畜化された豚も野山に放置すれば、1年もせずには猪へと先祖返りするという。

私は観光客が阿呆のように歓声を上げながら、街の売店で売りつけられた高い餌を手に耳長と戯れているのを見るにつけ、耳長共に「野生としてのプライドを取り戻せ！」と決起を煽ったものだ。

しかし残念ながら一度として成功したことはない。

耳の痛い言葉は耳長であろうと人間であろうと嫌がるというものだ。

つまり私が耳長から問答無用で拒否されているのは、彼らのあり方を憂えているからだだろう。私は無駄となったウサギの餌セット（税込み400円）を手にしながら、自分自身をそうやって何度も慰めたものだ。

閑話休題

そんな家畜化された耳長様であっても、彼らがヌイグルミでも口ポット家畜でも、ましてや電子の妖精でもないことを証明するものがある。

使えば減る、買ったなら支払う、入れたら出る。これ自然の摂理である。

つまり糞尿だ。

この「木組みの家と石畳の街」では、街の住民が朝から晩まで、箒と塵取りを両手に掃除に片付けにと走り回っている。

耳長の糞は直径が1センチにも満たない丸いものだが、やはりモノがモノだけに放置をしていると、動物独特の匂いがする。増えすぎた耳長を「街の観光の名物として打ち出そう」という声が上がった時、反対論の中心になったのが「糞尿の処理をどうするのか」という衛生面での反論だったというのだから、根が深い。

結局、すつたもんだの生々しいやり取りの末に、街の各所にウサギの糞専用のコンポストを設置し、街や商工会の有志が朝から晩まで、尿を洗い流すペットボトルの水と、糞を片付ける掃除用具を片手に走り回ること折り返いがついたのだそうだ。

意外な話だが、臭いがきついはずの夏場の方が掃除しやすいという。耳長は日陰や涼しいところに隠れて動かないため、糞もまとまっているからだ。

つまりこうしてあちらこちらに散らばっているということは、季節が確実に夏から秋へと移り変わっていることを意味する。

もつと風情のあるもので季節を感じたいものである。

なおコンポストで出来た堆肥は街の花壇で使用される。この街で一年中、何かしらの花が栽培されているのは、花の香りにより臭いを打ち消す狙いがあるからだとか。

そういえば昔、ベルサイユ宮殿で香水文化が発達したのも、臭い（体臭）を香水で打ち消すためだという話を、何かの本で読んだ記憶がある。

本当にここは日本なのだろうか。

「あの、おじさん」

そのため私も『ラビット・ハウス』でのバイトの時には、こうして折を見て表通りの掃除に駆けずり回っているというわけだ。まったく人使いの荒い耳長である。

「おじさん、ちよつといいですか」

果たして耳長共は、人間がこれだけ自分達に尽くしていることを理

解しているのだろうか。いや、おそろくそれはあるまい。畜生共にそれを期待するのは、あまりにも馬鹿馬鹿しいことだ。

「おじさん、ちょっといいですか!」

私はそのようなことを考えながら、腰を曲げて店の前の花壇の前を、一心不乱に掃いていた。

だから私の袖が引つ張られていようと、それは私ではない。だから断じて私はおじさんではない。

「ねー、おじさん! ちょっとおじさんってば!」

「誰がおじさんじゃい!」

瞬間、頭に血が上った私は、語気を荒くしながら背後を振り返り、そしてその過ちに気が付いた。

そこには何とも可愛い水兵さんが、驚いた顔をして立ち尽くしていた。

先ほどから私を「おじさん」と、事実誤認もはなはだしい呼びかけをしていた小学生の高学年と思わしき少女は、ツバのついた水兵さんのような帽子に、胸元の赤いリボンが目にも鮮やかな半袖のセーラー服。それに吊り紐付きの、かぼちやパンツのように膨らんだ紺の半ズボンを穿いていた。しかし迷彩模様の紐靴だけが妙に不釣り合いだ。

右手には羊皮紙のような古びた紙を丸めて持っており、反対側の手で私の袖を引いている……いや、引いていた。私が怖い顔で振り返ったものだから、その手を思わず放したと見える。

帽子の下の髪はアメジストのような深いすみれ色であり、肩の辺りまで伸びている。それをツインテールにしていた。小さな口元と通った目鼻立ちは、将来性を感じさせる。好奇心の強さを証明するかのような大きな目は、潤んで……

え? 潤んで……

あ、これは駄目だ。

つい数ヶ月前も同じような経験を背後の喫茶店の中でした気がするが、私の頭の中で大きな警報音が鳴り響く。

客観的に見ても、主観的に考えても私が悪いとしか思えない。いや、実際に悪いんだけど。

いくら私が20になる前におじさん扱いされたからといって、それが小学生を怒鳴りつけてよい理由にはなるはずがない。私は掃除道具をその場に投げ出して、陪審員に釈明をする被告人のように身振り手振りで少女を宥めようとした。

「いや、違うんだよ。怒ったわけじゃないんだよ！いや、急に袖を引つ張られたから、驚いて大きな声が出ただけでね。だから泣かないでね」

「ほ、本当ですか、おじさん」

「あのね、おじさんじゃないからね！お兄さんだからね、お兄さん！」
私にも譲れないものはある。そこだけは念を押そうとお兄さんに力をこめたのだが、これがよくなかったらしい。少女の両目が再び潤み始める。

ええい、一体どうすればいいんだ！

「いや、だから怒っているわけじゃなくてだね…」

途方に暮れた私は、顔を上げて少女から視線を逸らした。『ラビツト・ハウス』の表玄関前の通りは、ヴィンテージ式の2点式ガス灯のような街灯が、約3メートルごとに規則正しく並んでいる。

店の前にある街灯の陰に、私はどこぞの金融会社の社員のような不審者を見つけた。

黒いスーツ服が盛り上がるような筋肉質の男性が、無理やりガス灯の影にその巨軀を押し込むようにして立っている。サングラス越しにでもわかる強い視線が、明らかにこちらを、つまり私を睨んでいた。
ふむ。

私は空を仰いだ。日差しこそ夏の景色を色濃く残しているとはいえ、どこまでも続くかのような空の高さは、お盆前には感じられなかったものだ。

もうすぐ季節は秋。天高く兎肥ゆる秋。つまり美味しいものが沢山食べられる時期…私はいささかの現実逃避の末、自分自身を取り戻した。

よし、きつと先程私が見た光景は私の勘違いに違いない。

こんな可愛い水兵さんに、あんな絵に描いたようなSPなんて、そ

んなまさか……

私は首をちょうど90度近く縦に動かして、視線を再び奥の街灯に向けた。

先程の不審者「達」が懐に手を入れながら、サングラスを外してこちらを睨んでいた。

……何で増えてるの？

え？ここ日本だよ？まさかいきなり撃たれるとか、ないよね？

夢の中では何でも出来るというけれども、目覚めたら大抵は忘れている（その2）

シストはフランス発祥の参加型ゲームである。

街や森を舞台に、隠された宝を実際に参加者が探しだすというものだ。百聞は一見にしかず。書物から先人達の知識や経験を追体験する机上の学問よりも、実際に体を動かして実社会で学ぶべきだという体験主義を重視する精神が感じられるのが、いかにもフランス式というべきか。

シストに参加したいイベント団体や商店街は、まず公式サイトに登録する。いくつかの審査を経て所定の参加条件を満たしていると判断されれば、主催団体として認可される。

宝物を納めた箱をあらかじめ設定した所定の場所に隠し、ヒントが掲載された地図や文章をホームページに掲載すれば、ゲームの始まりだ。

参加したい人はサイトから情報をダウンロードする。参加する場合には、次の参加者のための宝物をいくつか持参するのがマナーである。

ヒントを基に自ら推理と実証を重ねることで宝物の納められた箱を探し出せば、ひと先ず第一段階は終了だ。参加者は持参した宝物と引き換えに、箱の中の宝物を入手し、元の場所に戻す。

これをサイトに発見報告と共に掲載すれば、状況終了というわけだ。

搜索対象の範囲の設定や、ヒントも児童向けの謎々から推理ゲームのようなものまで、変わり種ではウォーリーを探せのような人探しも可能であるという。各種の条件設定や目的に応じて、対象となる年齢が児童から大人まで幅広く対応出来るのが、このゲームの特徴だ。

そのため現地では多種多様なシストが毎週末に開催され、人気を集めているそうだ。

この「木組みの家と石畳の街」の宝探しゲームは、厳密に言えば本

家のシストとは細部がいくつか異なる。

『ラビット・ハウス』のマスター曰く、10数年前から有志によって主催されていたものだそうで、最初はその名前も「宝探しゲーム」というありきたりなものであったという。

おそらく暇な爺様達が、自分の孫達に表で遊ぶ娯楽を提供したかったのだろう。

これをフランスで参加型ゲームが流行していることを聞きつけた商工会が便乗して「シスト」と名称変更を提案したのだそう。ひよつとすると最初からフランスのシストをモデルとしていたのかもしれないが、実際にどうだったかはわからない。

耳長の取り扱い規則といい、この街の行政はそうした対応が実に手際が良く、またセンスがあると感心させられる。

名前とは内容がわかればよい時もある、わからないほうが興味を集めることもある。その点、宝探しゲームではいかにも安っぽい印象はぬぐえない。それがシストとカタカナ3文字になると、内容は同じであったとしても受け手の印象は大きく異なる。

マスター曰く、この街のシストは主に地元住民の中学生以下を対象としているという。こちらはサイトは使用しない極めてアナログなものだ。町の各所に隠された紙の地図（裏に商工会の認可印が必要）を見つけたものが勝手に始めてもよいという、子供の探検ゲームの延長線上のようなものだという。

中身と交換するための宝物の持参は本家と同じだが、本家のシストが宝箱にプラスチックの容器などを使うことが多いのに対して、この街ではRPGゲームに登場するような、如何にもそれらしい木製の宝箱が使われているという。こちらも海賊版と対処するために、商工会の認可印がついているのだそう。

伝聞でしか語れないのは、私がシストに参加したことがないからである。地元民でもなく、ましてや大学入学以降にこの街に引っ越してきたので当たり前ではあるが。

「それで、この地図を見つけたんだ！」

てて、ててがわ……いや、ででで？げげげ？……まあいいか。

とにかく『ラビット・ハウス』のカウンター席に「よいしょ」とよじ登るようにして座った理世ちゃんは、自分が発見したというシストの地図を、香風老人に自慢げに見せびらかしていた。

*

どうやらマスターは店内から私の醜態を見物していたらしく「また子供を泣かせているのか」と私の尻を文字通り引っぱたくと、腰をかがめて理世ちゃんと視線を合わせて、事情聴取を開始した

私はその間、数メートル先の街灯の後ろにいる不審者に注意を向けていたのだが、彼らは香風老人の姿をみると、懐から手を取り出して警戒態勢を解いた。

どういうつもりだ。私はそんなに怪しい風体に見えるのかと大層気分を害したものだ、いつの間にか聴取を終えたマスターから再度尻を叩かれて、私はこの可愛い水兵さんを店内へと御案内した。

「ててぎ・りぜ、だ！世界の『世』に、理科の『理』でりぜ！」

少女が両手を腰に当てて名乗りを上げた姿は、実に可愛らしく微笑ましいものであった。

またその……で、でで、ててがわ？何とかという苗字は名乗りだけで、漢字を説明しなかったのは、恐らく自分で書けないか、あるいは説明出来ないからだろう。この水兵さんは年相応の幼さと自尊心の持ち主らしい。

少女が同時に入店する際に帽子を取ったのは、いかにも育ちの良さを感じさせる。水兵さんの服も見るからに仕立てのよいオーダーメイド品。どうやらいい所の子らしい。

ともあれ背伸びしたがる年頃の少女を一人のレディーとして接するマスターの眼力はさすがというべきか。理世ちゃんはその扱いに気を良くしたらしく、自分の事情を喜々として説明しているといった具合だ。

ということは外の連中は少女の警護の人間だったのかもしれない。私は『ラビット・ハウス』の窓から外に視線を向け、そして仰け反った。

窓から一人ずつ、等間隔に例のサングラスをかけた黒服の不審者

が、店内を覗きこんでいた。

出入口をから最も近い窓には大きな無線機を持った黒服が、その右隣の窓からは馬鹿でかい高級カメラを手にした黒服が写真を撮りまくっている。さらにその横の窓からはハンディタイプのビデオカメラを手にした黒服が……何やら動物園の見世物にでもなった気分だ。

どうやら少女の親は、かなりの親馬鹿と見える。

それは別に構わないのだが、私は営業妨害もはなはだしいと文句をつけに行こうとした。その許可を香風老人に取ろうとしたのだが、マスターは何故か渋い表情で首を横に振った。とはいえ表通りであるようなことをされては、ただでさえ少ないお客様がさらに少なくなる。

私はどうしたものかと、腕を組んだ。

「じゃあ、よろしくな、おじさん！」

あん？

*

どうしてこうなった。

時刻は午後の2時。まだ日差しが厳しい時間帯だ。

私は日傘をさす可愛い水兵さんの後ろを連行される捕虜のように、とぼとぼと歩いていた。

理世ちゃんは年配の男性（つまりマスター）にレディー扱いされたのがひどく嬉しかったらしく、鼻歌を歌いながら足早に歩いている。

「日に焼けてはいけないから」という理由で貸し出された、彼女には少々大きな日傘をさしているため、通りすぎる年配のご婦人方が「あらまあ」と微笑ましい視線を送られていることに、気が付いていない。

マスターいわく、この少女の実家はこの街でも有名な資産家だという。シストに参加中だというのを聞きだした香風老人は、理世ちゃんがパフェに夢中になっている間、私に「仕事にならないから、あの連中を引き連れて一緒に宝探しに付き合っつてやれ」という業務命令を下した。

そもそもこんなことになった原因はあの黒服にあるのではないか。

私が苛立たしげに背後を振り返ると、数メートル毎の間隔で、連中が等間隔で尾行していた。

どうしてこれでバレないのかと不思議で仕方がなかったが、かわいい女王様が振り返るたびに忍者の如く姿を消してしまうのだから、呆れるというか感心するというか。

「あのお客様？」

意気揚々と歩みを続ける水兵さんに、私は背後から声をかけた。宝探しはいいのだが、果たして目的地がどこなのか。私は聞いていなかったからだ。

しかし私の呼びかけに振り返った水兵さんはぶくーと頬をリスのように膨らませて、不満を露わにした。

「おじさん！私の名前はリゼ！お客様じゃないぞ！」

だったら私もおじさんではない。

そう言い返してやりたかったが、あまりにも大人げないふるまいをするのはいかがかと考え、また背後の黒服の騎士達からの威圧の視線が恐ろしかったので、私は口をつぐんだ。

「失礼しました。リゼ様」

「おじさん、リゼでいいって！」

「ならば私もお兄さんでいいですよ」

どうもこの水兵さんにとつては、私は店員さんではなく宝探しの仲間感覚らしい。

ならば好機を逃してはならない。

私が呼び方を変えさせようとすると、かわいい水兵さんは日傘の柄に頭頂部をつけるように、かくんと首を傾げた。その大きな瞳には単純な疑問の色が浮かんでいる。

「おじさんはおじさんだろ？」

……あーはいはい、もうそれでいいですよ。

私は精いっぱい抵抗も含めて不貞腐れたように頷く。

水兵さんはそれを見て上機嫌に「よし！」と屈託なく笑った。私をおじさん扱いするのは気に入らないが、どこぞの子供服の雑誌の表紙でもおかしくないぐらい、立ち居振る舞いが絵になる少女だ。

それにしても私はそんなにおじさんに見えるのだろうか。私は再び少女の後ろを従者のように歩きながら考えた。第3者からすればどうでもいいかもしれないが、私にとっては重大な問題である。

確かに私が小学生の時は大学生はとんでもない大人に見えたものだ。それはそれとして、私はそんなに年上に見えるのだろうか？私は釈然としない思いを抱えたまま、水兵さんに尋ねた。

「どこでどこに向かっているんですか？」

かわいい水兵さんは再び私のほうを振りかえると、今度は先程と逆の方向に首をこてんと傾げた。

「わかんない！」

おい

*

「たのもー！」

理世ちゃんは右手に日傘と帽子を、左手にシストの地図を持っているため、私が『甘兎庵』のドアを押した。

店内に満ちる小豆とお茶の香りに負けてなるものかと、子供らしい屈託のない声で、元気よく挨拶する理世ちゃんに、店内にいたほかのお客や店員さんが微笑ましい視線を向ける。

「……誘拐じゃないだろうね」

私と可愛い水兵さんをじろじろと見比べた挙句、宇治松夫人の第一声がこれである。

塩かけ婆め、余計なことを言うなど心の中だけで反論してから、私は小さな女王陛下と共に店員に案内された4人掛けの座席に座った。私の対面に理世ちゃんが座る。

店員さんから渡されたメニューを手に、理世ちゃんは上目づかいで私の様子をうかがいながら尋ねる。

「本当に、好きなもの頼んでもいいの？」

「いいですよ」

私の言葉に理世ちゃんは「やった！」と両手を打って喜んだ。

私としては領収書を持って帰りさえすれば、マスターに精算してもらえるのだ。自分の腹が痛まないとあっては、いくらでも気風の良

男を演じる事が出来るというものである。

聞けば「パパは外食の時にうるさいんだ」とのこと。

いいところの娘さんには、それなりの苦勞があるらしい。私としても人様の家の躰に閑して干渉するつもりもない。しかしメニューを広げて「あれもいいな、これも食べたいな」と足をぶらぶらさせながら一生懸命に考える水兵さんは、見ていてなんとも和むものがある。

理世ちゃんがメニューの写真と睨めっこをしている間に、私は王女様の許可を得てシストの地図を受け取った。

長年使いこまれたか、あるいは敢えてそういう汚しをしているのか。B5サイズ程の地図は、いかにもそれらしい雰囲気がある。確かに宝探しをするというのに、いかにも新しい地図では風情に欠けるといふものだ。この町の商工会は浪漫というものを理解している。

そう、浪漫なのである。宝探しは秘密基地探しと並んで、子供の浪漫なのだ。

どれほどTVゲームや携帯機器が発達したとしても、攻略本など存在しない実社会での冒険というものに、子供はどのようなもなく憧れる時期がある。この熱病を解消させるには、シストは確かに良い手法といえる。

程ほどの謎解きと、冒険という非日常性。同じ街でも全く違ったものとして子供たちには見えるはずだ。それは理世ちゃんも同じであろう。

冒険を通じて生まれ育った街への愛郷心を育む。無味乾燥で時系列を並べただけの面白みもない郷土史を学ばせるよりも、よほど良い手だ。

さて、どのようなヒントが描かれているのか。推理が必要とはいえ、所詮は中学生以下を対象としたゲームである。大学生の手にかかれば、赤子の手をひねるようなものであろう。

私は地図を広げて……広げて……

「よっしー私は白玉あんみつにするぞーおじさんはどうする?」

ふん、ふん……なるほど、なるほど……

「おじさん?おじさんってばー」

……やっべ、わかんねえや

夢の中では何でも出来るというけれども、目覚めたら大抵は忘れている（その3）

『甘兎庵』のカウンター近くのテーブル席で、私は恥も外聞もなく頭を下げていた。

「……それで私に泣き付いてきたというわけですか」

紺色のジーンズに、白と黒のボーダーシャツ。薄手のひまわり色のブルゾンパーカー。いかにも室内着に適合させたという真手君は、私の対面で不機嫌そうに抹茶オレをストローで啜りながら、呆れたような視線をこちらに寄越した。

真手君は急いで駆け込んで来たため髪が乱れており、それを手櫛で後ろに流している。私は色々と反論したい事もあつたが、とりあえず離れた席で白玉あんみつを堪能している理世ちゃんに視線を向けて、一層声を潜めた。

「人聞きの悪いことを言うなよ。アドバイスを求めたとか、助言を請うたとか、もつとほかの言い方があるだろう。それに理世ちゃんに聞こえたら外聞が悪い」

「この期に及んでも、その下らない見栄を張ろうとしますか……言い方を変えたところで、子供向けの宝探しゲームのやり方がわからないから、年下に助けを求めたという事実はかわりませんか？」

「休日と呼び出したのは悪いと思っっている。だからこそ、こうして誠意を見せているじゃないか」

「ずいぶんと私も安く見られたものですね」

その割には一番値の張る飲み物を選んで美味しそうに飲んでいるな。私は喉まで出掛かったその言葉を飲み込んだ。

子供向けの宝探しゲームと高をくくっていた私であつたが、このシフトは「木組みの家と石畳の街」の子供向けの地元密着の宝探しゲームである。地元民でない私には、その内容はさっぱり理解出来なかつた。

攻略本なしにゲームするというよりも、辞書なしに海外の原書を訳

せというに等しい難易度である。

やり方さえわかれば私にも解けたのかもしれないが、といって近くの子供を捕まえて話を聞くのも、外聞が憚られる。子供向けの宝探しゲームの攻略方法を大学生が聞きまわるなど、どう見ても不審者以外の何者でもない。

ならば地元民の意見を聞くのが適切だろう。それもある程度は気心の知れた相手が望ましい。

そう判断した私は、ガラホーの電話帳に登録された母親以外の唯一の女性の名前を選択すると、住所と名前、そして至急助けを請うという内容のメールを送ったという次第だ。

一時間もしないうちに小走りで『甘兎庵』へと入ってきた真手君をカウンター近くの席へと呼び寄せた私は、これこれしかじかと事情を最初から説明した。

真手君がまず最初に行った事は、私の脛を無言のまま思いつきり蹴り上げることであった事を付け加えておく。

*

「真手凛です。よろしくね?」

「ててざりぜです!おねーさん、こんにちは!」

挨拶は人付き合いの基本であるが、やはりこういう所に育ちのよさを感じられる。ててぎ(漢字不詳)理世ちゃんは、白玉餡蜜を食べる手を止め、座席から立ち上がってから元気よく挨拶をした。口を極めて私を罵ったことで眉間に皺がよっていた真手君も、これには相好を崩した。

元気な水兵さんとしゃがんで視線を合わせてから握手を交わす真手君を見ながら、私は湧き上がる言いやうのない感情との戦いに臨んでいた。

私と3歳しか年齢の変わらない真手君が「お姉さん」で、どうして私が「おじさん」なのだ?!

「どうしたんだおじさん?すわらないの?」

理世ちゃんが「おじさん」と私のことを呼んだ瞬間、真手君が噴出した。

こいつ、後で覚えてろよ。

私は『甘兎庵』の羊羹で買収した真手君を睨みながら彼女の右隣、理世ちゃんの対面の座席に座った。シストの地図を検討するためには、そのほうが都合がいいと判断したからである。

私は右に手のひらを向けると、お宝を探す小さな水兵さんに助っ人を紹介した。

「理世ちゃん。これは私の助手だ」

「理世ちゃん。このおじさんの言うことを信じちゃ駄目よ」

「……おい、余計なことを言うな。香風の爺さんから俺はこの子のことを頼まれているんだ。大体、お前のさつき飲んだ抹茶オレの代金、誰が払うと思ってる」

「何ですか助手って。私は貴方の助手になった覚えはありませんよ。大体、いきなり休日に呼び出しておいて、それはないんじゃないんですか?」

「後輩を顎でこき使うのは、先輩の特権だよ」

「何を言ってるんですか。第一、この街に関するのなら私のほうが先輩でしょう。だから私に泣きついてきたのに、今更先輩風を吹かさないで下さい」

「理屈を言うな、理屈を。素直に「はいわかりました」と言えないの? それとも今頃反抗期なの? そんなことだからお前は真手なんだよ」

「……私、帰りましょうか?」

「すみません真手様。それだけは勘弁して下さい」

「あ、あの!」

あわあわと視線を向けていた理世ちゃんは、突如として大きな声を発した。掛け合いに熱中していた私達は、驚いて目の前の小さな水兵さんに視線と意識を向ける。

「えっと、それじゃあおねえちゃんが、わたしの宝さがしをたすけてくれるんですか?」

「えっと……はい。そうです」

「その通りですね、はい」

「……あんたら、小学生の女の子に気を遣わせて恥かしくないのかい」

注文を聞きにきた宇治松夫人の冷ややかな視線に、私と真手君は顔を真っ赤にして黙り込んだ。

ちくせう

*

どうしてこうなった。

「つまりですね。この記号は個別では意味がないんです。それぞれを組み合わせて導き出されるものの意味を、考えなければいけないんですよ」

「なるほどー」

真手君の説明を熱心に聞いていた理世ちゃんは、目を輝かせて大きく頷く。早々から蚊帳の外に置かれた私は、プラスチックストローでジンジャエールの入っていたガラスコップの底をつつくことで、時間を潰していた。

さすがに真手君は地元民だけあり、シストの地図を見るや否や「ああ、これはね」と、水兵さんへの説明を開始した。

地図は薄汚れた羊皮紙のような質感だが、実際にはフィルムを張った合成紙か何かだろう。川沿いの地図に、いくつかの赤いバツ印。そして左隅には王冠と黒い耳長、そして看板のマークが書かれている。私はてっきり赤いバツ印のどこかに宝があるのかと考えたのだが、これはあくまで地図の隠し場所らしい。この街のシストは、まず目的地に到達するまでに回らなければならない場所が最初の地図に記されており、それぞれに次の場所へのヒントが隠されているのだという。そして左隅の記号を組み合わせた場所が、スタートラインなのだろう。

……そんなもの、地元民の経験者でなければわかるわけがない。

不貞腐れる私に、真手君が小声で言う。

「だから言ったでしょう。このゲームは元々地元民向けなんですよ」
「君からそんな事を言われた記憶は俺にはないのだが」

「まっ、私に声を掛けた事だけは褒めてあげますけどね。こう見えても私は『シスト荒らしの凜ちゃん』との異名をもつシスト名人なんです」

恥かしげもなく自らの異名（あだ名？）を名乗る真手君。おい馬鹿やめろ。理世ちゃんが憧憬の眼差しでお前を見ているぞ。馬鹿が移ったらどうするんだ。

私の心配をよそに、真手君はシスト経験者として水兵さんへの解説を続ける。

「……というわけ。つまりこのシストだとバツ印は2箇所だから、2箇所で次の地図を探せばいい。じゃあ最初を探すのはどこかな？」

「えーっと、このみつつのかたちをくみあわせたところ！」

「正解！じゃあ、理世ちゃん。王冠と黒い兎の看板で有名なお店って？」

「えーっとね、えーっとね！」

胸の前で腕を組み、うんうん唸る理世ちゃん。真手君は母親のような慈愛に満ちた視線を水兵さんに向けていたが、ふと机の上に手を伸ばすと、いくつものピンパッチがついた水兵さんの帽子を、その細い指でつと突いた。

「あーわかった！」

理世ちゃんの顔がぱつと明るくなり、3つの記号を組み合わせたという最初の地図が隠されている店の名前を答えた。

「あのぼうしやさんだ！」

*

「おねえさん、ありがとう！おじさんもね！」

「ばいばい、理世ちゃん」

『も』ってなんだ。『も』って！

「ほら、先輩。大人気ないですよ」

日はすでに傾き始めていた。水兵さんは私達にお礼を元気よく言うのと、交換したピンパッチの分だけ軽くなった軍帽をかぶり、長い影を後ろで結びながら駆けていった。嬉々とした足取りは軽く、今にもスキップを始めんばかりだ。

その背後を黒服の集団が足音も立てずに駆け抜けた。すれ違いざまに責任者らしきサングラスをかけたスキンヘッドの人物が、こちらに向かって一礼する。その異様な光景に、真手君がびくりと肩を震わ

せた。

「あー、びつくりしました……あれが噂の天々座家親衛隊ですか」

「何？噂になるほど、この街では有名なの？」

「……聞きたいですか？」

「聞きたくない！」

私と真手君が馬鹿なやり取りをしている間に、理世ちゃんの姿は見えなくなった。小さな水兵さんの手には、戦利品である小さな手のひらサイズのボトルシップが握り締められているのだろう。初めて参加したシストの商品としては、大戦果といったところか。

ちなみに理世ちゃんがボトルシップと引き換えに宝箱の中に入れたのは、彼女の帽子についていた勲章ピンバッジだそう。宝の隠し場所から出てきた水兵さんの軍帽は、その言葉を裏付けるようにピンバッジの形に日焼けが残っていた。

伝聞でしか語れないのは、ただの財布役でしかなかった私も、この水兵さんの参謀役として初めての冒険を見事成功に導いた真手君も、宝箱の置かれた場所には入れなかったからである。

地図で指し示された目的地は、廃墟であった。それも崩れた外壁の壁の、地面と接する穴を通り抜けた奥にある通路の中。いかにも子供が喜びそうな、そして安全性はどうかと思わせる場所にあった。

穴はレンガ数個分程度の高さしかなく、小柄な子供でしか通れそうにない。私や真手君では腰が引つかかってしまいうだろう。さてどうしたものかと私が頭を悩ませていると、理世ちゃんが服が汚れるにもかかわらず、喜び勇んで壁の穴に匍匐前進で突入していく。

これには私も驚いてとめようとしたが、真手君に指摘されて確認したところ、壁の穴は補強の鉄骨や透明なプラスチック板で補強がなされてあった。聞けば定期的な見回りもあり、見えない場所から入れる裏口もあるとか。なるほど、これならば安心だと安堵したものだ。

理世ちゃんいわく、宝箱のある場所は、天井から光の差し込む「しんせいなくうかん」だったらしい。当然ながらそれを見たことのある真手君は、うんうんと頷き、またもや置いてきぼりにされた私は少しばかり共通の経験がある彼女達が羨ましくなった。

戦利品を見せながら「おねーさんのおかげだよ」と喜ぶ理世ちゃんに、真手君は「理世ちゃん頑張ったからだよ？」と褒めながらも、懇々とシストの攻略方法やヒントについて説明していた。それは母親というよりも、年齢の離れた姉妹を思わせた。

「随分と親身だったじゃないか」

私の言葉に、真手君は「普段の私はそんなに冷たい女に見えますか？」と、白い視線を向けてきた。

「コメントは差し控える。ただ羊羹の代金以上に親身だと思ったのも事実だな。あの水兵さんに対する10分の1でも、私に対する態度を優しくして欲しいものだが」

「ははは、面白い冗談ですね」

真顔でそういつてのけた真手君は、自分が少女に対して親身に接した理由を語った。

「私も経験者ですからね。大人気ない先輩と違って、私は大人ですから」

「先輩風を吹かせたかっただけか？」

「それもあります。それに頂いた報酬の分だけはきちんと働いたつもりですしね。だけどそれだけじゃありませんよ。私は誰にも教わらずに、誰の助けも得ずに『シスト荒らしの凜ちゃん』になれたわけじゃないありません」

どうにもその二つ名をカッコいいと考えているらしい、少しばかり厨二病の後遺症を引きずる真手君曰く、彼女がシストの存在を教えられたのは小学校に入学した時だという。

両親からシストの存在を教えられた真手君は、元々好奇心が旺盛だったこともあり、このゲームに夢中となった。友人達と話し合い、思考の壁にぶつかる度に街の人に教えてもらいながら手探りで自分の世界を広げていったのだと、真手君は懐かしそうにその経験談を語った。

「恩返しというほど、高尚な考えじゃありません。でも私がこの街と周囲の人に大切にされたように、彼女には接してあげただけなんです」

一人で大きくなったつもりなのに、でかくなる資格がないとは、一体誰の言葉だったか。埼玉春日部の幼稚園児の父親の言葉だったか？それともどこかの誰かが、あの偉大な父親の名前を借りて持論を語らせただけなのか。

とにかくそれに従えば、真手凛という人物には大きくなる資格があるといえる。「優しくされたから、優しくあげただけですよ」と照れくさそうに語る生意気な後輩のことを、私は率直に見直していた。

「男の子でも女の子でも、初めての体験は記憶に残りますからね」

夕焼けの色で照らされていた真手君の横顔は、ひどく大人びて見えた。私は妙に落ち着かない感情になり、ふと視線を外した。

黄昏色の空には、延々と続く朱色に染まっていたいわし雲が、家路を急ぐ子供達を見守るように広がっていた。

*

翌日。大学からバイト先に向かう私は、地図を握り締めた水兵さんと水路の木橋ですれ違った。目を輝かせて宝探しに夢中になっている彼女は私に気がつかず、そのまま走り去っていった。

『シスト荒らしの凜ちゃん』のバトンは、無事に彼女へと受け継がれたらしい。私は黒服の集団に目礼をすると、再び『ラビット・ハウス』へと歩き始めた。

私が香風老人と領収書の清算をめぐり、壮絶なバトルを繰り広げる1時間前のことである。

褒められもせず、苦にもされない。そういう人に私はなりたくない（その1）

俳句の世界において、花火は夏ではなく初秋—つまり秋の初めの季語である。元々が花火は収穫を祝う秋祭りの奉納として打ち上げられることが多かったことが、その理由であるとされている。

最近でこそ年始からクリスマスに年明けのカウントダウンまで、年間を通してあらゆる名目で開催される花火大会が増加したことで、花火の持つ季節感は薄らいできています。単に祝い事で鳴らす大きな爆竹のような使い方をされることも多い。

それでも打ち上げた花火を見上げて歓声を上げる観客の熱気や、大会終了後の例えようのない郷愁と物悲しさは、やはり秋の初めに相応しい季語としての力なのだろう。

「木組みの家と石畳の街」の花火大会は、毎年8月の第4日曜日に開催される。天候の都合で中止になった場合の予備日も、あらかじめ9月後半の彼岸の中日。秋分の日と定められている。これは順延となった場合に他の行事と重ならないように、市当局や観光協会などが予め年間計画で定めているのだそうだ。

大会規模や打ち上げる花火玉の数こそ多摩川や長岡の大会には劣るが、観光都市での花火大会だけに、知名度は中々のものだ。この大会が終わると、この西欧風の街は本格的に秋の装いを始めるという。まさに夏を締めくくり、秋の訪れを伝えるに相応しい花火大会といえよう。

残念なことこの年は8月第4日曜日は台風により早々に順延が決定されていたため、秋分の日に開催されることとなった。

季節が移り変わるイベントがあるからといって、私の日常が変わるわけではない。

高校生とは違い、大学生の夏期休暇は長い。私は新聞代の節約と情報収集のために、毎日のように街の図書館に出かけて新聞各紙隅から隅まで眺め、手の空いた時間を『ラビット・ハウス』でのバイトにあ

てるといふ生活サイクルを繰り返していた。

たまに大学の数少ない友人と連絡を取る以外には、女王陛下であるところの青山女史からの特命に従って、偏屈な香風老人の観察日記をつけるぐらいだ。

初めての長期休暇がこれでよいのかという気はするが、他にやることもないので仕方がない。多くの同級生が自動車免許の取得に励む中、私は免許を取るのなら自腹で貯めろと親から通告されているため、せつせとバイトに励んでいた。

もつとも無駄遣いが多いので、一向に貯まらないのだが。

報告書の片隅に描いていた香風老人の似顔絵が、線と点と丸だけの幼稚園児のようなシンプルなものから、押しつぶされた饅頭の模写のようなものに近づけることに成功した頃。私は大学事務局を通じて、個人的に御世話になっている文学部の教授から呼び出しを受けた。

思い当たる節がないために首を傾げつつ、私は文学部関連の教室が入る第2会館の教授室を訪問した。

「……警備のアルバイトですか？」

「うん。例の花火大会は君も知っているだろう」

袖シャツに肩からタオルを下げるというラフな格好で、私を座ったまま出迎えた壮年の教授は、手にした団扇で自分の顔をパタパタと扇ぎながら頷いた。

男性でありながら貧血気味で低血圧で冷え性という三拍子揃い踏みの痩身の教授は、大のクーラー嫌いである。9月も10日を過ぎたというのに、日中は30度が超える日が続いているが、クーラーどころか扇風機すらつけないというのだから徹底している。

本人はそれでいいのかもしれないが、彼の家族や学生はたまったものではない。そのためか、この教授が担当する――特に夏期休暇前後の授業は、学生の間では大変不評であり、代返のバイト代や依頼料が跳ね上がるのだそうだ。

かくいう私も、小型の携帯扇風機を持ち込むなどして、暑さ対策には四苦八苦したものだ。

そして何の因果か、私はこの教授に良くも悪くも目をつけられた。

私としては1年の必修である授業を代弁してもらおう、あるいは依頼出来るだけの親しい友人がいなかったために、毎週毎時間欠かすことなく、この教授の授業に出席していただけたのだが、その態度が逆に目立つたらしい。

以来、自分の研究課題以外の森羅万象の事柄―学生の授業態度はどうか、自分の健康や家族にすら関心も興味もなさそうな教授は、何かと私の世話を焼いてくれるようになったというわけだ。

その教授のスチール机の上には、山のように資料と参考文献が積み上がっており、非常に圧迫感を感じる。文房具は乱雑に散らばり、パソコンの画面やキーボードを含めたいたるところに付箋が貼りつけられていた。

部屋の窓枠に申し訳程度に吊るされた風鈴は、涼やかさを演出するでもなくただ下へと重力に任せてぶら下がっているだけであり、風一つない部屋の中を余計に蒸し暑く感じさせることに貢献している。

その圧迫観のある机越しに胡乱なまなざしを私に向けていた教授は、パタパタと団扇で自分を扇ぎながら自分の机の近くまで私を呼び寄せた。そして首にかけてかけたタオルで顔の汗をぬぐうと、手にした書類に時折視線を落としながら、依頼の内容を説明した。

「毎年、大学から有志の人員を集めて大会事務局にスタッフを派遣しているんだが、今年は人手が足りなくてね。時間もないことだし、私が推薦した君に白羽の矢が立ったわけだ」

「……………いろいろと言いたいことはありますが、つまりはただ働きですか?」

「そこはボランティアと言ってもらいたいものだな」

枯木が妖怪に変化したかのような物憂げな口調と態度のまま、教授は形骸化して蜘蛛の巣が張り巡らされた廃墟のような建前を、いけしやあしやあと口にする。

確かに私はこの教授に借りがある。件の青山女史との話のタネとなった行友李風に関するレポートについて、参考文献から論文の書き方まで懇切丁寧に指導してくれたのが、この教授だ。これという目的意識のない私が同学年の中で完全に孤立せずに暢気な学生生活を送

ることが出来ているのも、教授のお陰であろう。

そしてこの人物は私のような小才子気取りの、頭の毛が3本ほど足りない手合いの学生を効率的に動かすやり方を経験的に理解していた。

貸出申請代行やレポートの回収、授業に使うコピーの作業と製本等々。私はいつのまにやら、あれやこれやと教授から仕事を押し付けられるのが常であった。

そして今もその手腕を余すところなく発揮して、私をタダ働きさせようとしている。

それにしてもこの御時勢に学生をタダで働かせようとは、いささか虫が良すぎるのではないか。私は少しばかりの正義感と反骨心、そして大いなる怠け心から教授に反論した。

しかし教授は無然としたまま、ぼつぼつと説明を続ける。

なんでも花火大会のボランティアは、元々は出席日数や単位取得が危ぶまれる学生への救済制度なのだそうだ。詳しいことははぐらかされたが、社会貢献という建前があれば外側にも内側にも、そしてお上にも言い訳が立つという理屈らしい。

ならば尚の事、私には関係ない話ではないか。人員が足りぬというのなら、それこそ成績の危ない生徒でも呼び出せば良いではないかと私が諦めずに反論すると、教授は「それでも足りないのだ」と私の質問に被せるように言う。

そして私を選んだ決定的な理由を説明した。

「君は事前連絡もなしにサボるだけの度胸はないだろう。友人も少ないし、親しい異性もない。だから適任だと判断した」

教授のあんまりな物言いに、私はひどく閉口した。

*

花火大会の本番までは既に1週間を切っている。教授にまたもや言いくるめられた私は、慌ただしく用意を始めた。

幸いなことに香風老人は私が事情を説明すると、「なら休むか」とあっさりとして臨時休業を決めた。お盆休みの閑古鳥がよほど応えたのかと思いきや、御彼岸のお墓参りにあわせて店を休むということだ。

タカヒロさんや智乃ちゃんとも一緒に日帰りで行けるといふことなので、私は香風老人に「あの忌々しい毛玉耳長はどうするのか」と尋ねた。

私には前世からの親の敵のように毛を逆立てるが、動物に好かれないう智乃ちゃんにとっては唯一親しく出来るペットである。私はてっきりペットショップの臨時ペットホテルか、知り合いの家にも預けるのかと考えていたのだが、なんと2階の智乃ちゃんの部屋にゲージを置いて、餌とトイレ、クーラーと毛布と一緒に過ごさせるつもりだというのだから魂消た。

畜生の耳長家畜の分際で、クーラー付きの食事付の寝床である。

私はその事実には慥然としたが、元々、アングロウサギは毛を採取するために長毛に改良された品種だそう。冬はともかく、あの毛玉を湿度の高い部屋の中に放置するわけにもいかないだろうと、考えを改めた。

そして私に名案が浮かんだ。

いつその事、毛皮をカットして売り払ってしまえばよいのではないか？毛として売れないのならば毛糸に紡ぐなり枕の中につめるなりすればいい。あの耳長も短くなって過ごしやすくなる。まさに三方丸く収まる名案ではないか？

流石に私も、「ティッピー」なる紅茶に冠する名前をつけて可愛がっている智乃ちゃんに直接伝えるほど、空気が読めないわけではない。

お姫様がいつものように2階へと上っていくのを確認してから、私は「まずは外堀から埋めてしまえ」という東照大権現の大阪攻めの先例に従い、懇切かつ真剣に香風老人とタカヒロさんに自分の考えを伝えた。

祖父は呆れたように何も応えず、父親ははつはと闊達に笑うだけであつた。

どうにも私には城攻めの才能はないようである。

つち。毛玉め。命拾い(?)したな……

*

ともあれ彼岸明けまでの休暇の許可を得た私は、翌日からさつそく

商工会議所会館内の大会運営事務局へと出勤した。

私を含めて選ばれた（押し付けられた）12人の学生のうち、私以外の11人は同じ同好会のメンバーである。

いきなりの疎外感と腫れ物扱いに、私が言いようのない居たたまれなさを感じる間もなく、担当者から私達が担当することになる街頭警備に関する説明が始まった。

2人1組で6つのペアを組み、巡回警備（1組）と立ち番（1組）、そして臨時駐車場の番（1組）と休憩（2組）のローテーションを組む。業務内容が少々特殊とはいえ、コンビニエンスストアやスーパーのアルバイトの延長線上のようなものだろうと高を括っていた私達であったが、担当者が私を含めた12人の中に1人も警備の経験がないことを知ると、急に表情を曇らせた。

「あの、何か拙かったですか？経験がないと勤まらない仕事内容とか……」

同好会の部長が代表して尋ねるが、その解答は要領の得ないものであった、

「……いや、拙いというかなんと言うか……そういうことに張り切る人がいてね」

責任者である狩手^{かたで}さんの、妙に疲れた顔が印象に残った。

*

翌日の朝5時。まだ空に夜の気配が残る第3公園の中央で、私を含めた12人は揃いの紺色のジャージに身を包み、指導役の男性による号令の下、横一列に並ばされていた。

竹刀で地面を突きながら、黒い眼帯をつけた男性は声を張り上げた。

「私が畏れ多くも大会運営事務局より貴様らの訓練担当を仰せつかった天々座である。貴様らズブの素人を、3日で1人前のプロに仕上げるのが私の仕事である。わかったらYESと言え。わからなくてもハイと応えろ。わかったか子豚共!？」

私を除く11人のミリタリー映画同好会の面子は、一斉に目を輝かせて答えた。

「Sir, yes, sir!!」
ほんと、バカばつか。

褒められもせず、苦にもされない。そういう人に私はなりたくない（その2）

戦争を題材にした映画は掃いて捨てて排水溝が根詰まりを起こすほどに数多くあるが、その中でも1987年製作の『フルメタル・ジャケット』は知名度の点でも内容においても欠かす事が出来ない存在だろう。

インターネット・ミームの格好の材料として有名となったハートマン軍曹ばかりが取り上げられることが多いが、かの完全主義者こと名監督スタンリー・キューブリックが「戦争そのものをありのままに表現したい」という意図を持って取り組んだ意欲作である。ベトナム戦争を題材としていたため反戦映画として取り扱われることもあったが、キューブリック監督はそれすら嫌がったというから徹底していた。

監督の意図がどこにあったのかはともかく、やはり強烈なのは新兵訓練教官であるハートマン軍曹の、画面から飛び出さんばかりの強烈なキャラクターであろう。

映画の中盤で退場させられるにもかかわらず、その印象と存在感は群を抜いている。彼を演じたロナルド・リー・アーメイは退役軍人であり、海兵隊において指導教官を務めていた経歴の持ち主であることも、作中における異様な説得力を与える事となった。

ハートマン軍曹はすざましいスラングと罵倒で新兵の心とプライドをへし折り、一人前の海兵隊員に育て上げるという名目の下、体罰や修正、仲間内のリンチの黙認すら厭わない。その振る舞いのどこまでが冷徹な計算によるもので、どこからが彼自身の嗜虐趣味によるものなのかは、誰にもわからない。自らの差別意識ですら目的のためには正当化されるとし、「貴様らには平等に価値がない」と喝破する強烈なキャラクターは、視聴者の度肝を抜いた。

ミームとして取り扱われたことは、キューブリック監督としては不本意だったかもしれない。それでもこの強烈なキャラクターは、ベト

ナム戦争を終えて戦争というものを意図的に忘却しようとしていたアメリカ国民に衝撃を与えたという。

同じく戦争というものを意図的に忘却しようとしてた日本においても、それは同様である。『フルメタル・ジャケット』は知らなくても、ハートマン軍曹を知らない日本のネット住民はいないのでないか等々……ミリタリー映画同好会の面々は、準備運動をしながら作品の魅力を私にたつぷりと語っていたが、集合のホイッスルが鳴らされると共に、指導役の近くに目を輝かせて集まった。

「よし、初めてにしては上出来だ子豚共！よく聞け、これからランニングを行う。公園外縁を10周した後、さらに10週だ！うれしいか子豚共!」

「Sir, yes, sir!!」

根っからのインドア気質であったはずのミリタリー同好会の11人は、教育担当である教官役の男性に、腹の底からわきあがるような返答をする。

その大声に早朝の公園を散策していた老人は何事かと眼を剥き、犬の散歩に来ていた飼い主は、あわててルートを変更した。

居たたまれなくなった私を尻目に、11人の新人隊員と1人の教官はボルテージを上げていく。

「サー！ランニングの道中は、あの歌を歌うのでありますか？サー！」

「無論だ！さあ子豚共、ランニング・マーチソングだ！」

「Sir, yes, Sir!」

* おい馬鹿やめろ。

自らを天々座と名乗ったちよいわるおやじ風ファッションの男性は、どう見ても堅気の雰囲気ではなかった。

少なくとも私は二次元以外で眼帯をつけた男性を見たのは初めてである。しいて言うのならダヤン將軍の写真と伊達政宗の騎馬像ぐらいか……あと父親がものもらいに罹患した時。

ファッション眼帯かと思いきや、これがガチであるというのだから私は二度驚かされた。顔に合わせて特注したという布製のアイパツ

手を左部分にあてて、頭の後ろに伸ばした紐を結んでいる。

緩やかな癖毛の豊かな黒髪は襟首回りまで伸ばされており、鼻の下にハの字の口髭がある。顎先の髭は乱雑に伸ばされているように見えて、実際には丁寧に整えられているようだ。

服装は白のカッターシャツに、同じく白のメンズズボン。どこかのブランドのマークの入った皮のバックルベルトでとめ、薄い茶色と黒のギンガムチェックのジャケットを羽織っている。竹刀を振り回しても支障がないところをみると、おそらく吊るしの既製品ではないだろう。

この手のファッションというものは、往々にして着崩しとだらしなさを混同した結果、軟弱かつ締りのない印象を他人に与えることが多い。

だがこの壮年にさし掛かったと思わしき男性は、そうしたものとは無縁であった。胸元を肌けつつも隙がなく、痩せ型だが一切の無駄がなく引き締まった肉体からは、名工が鍛錬した日本刀のような鋭さと激しさをただよわせている。

そんな天々座氏は、瞬く間に私を除く11人のハートをがっちりと掌握した。

程よい緊張感と軍隊形式の激しい訓練。時折ユーモアを交えつつ、抑えておくべき心構え、あるいは修正するべき点は論理的に指摘する。わずか3日で「素人の子豚」を「後はオーブンに入れて完成を待つだけ」までに仕上げて見せた。

食われちゃうのかよ。

好き嫌いとは関係なしに、性格的に合う合わないというものはどうしても存在するものだ。私とミリタリー映画同好会の関係がそれであり、私は映画鑑賞に熱中するあまり卒業と進級が危うくなったという愛すべき馬鹿者である彼らを好ましく感じてはいたが、どうにも彼らのノリについていけないことが多かった。

天々座氏は流石に事務局から新人教育をまかされるだけのことはあり、現地における実際を想定した訓練は大変参考になった。

やはり実際に経験しなければわからないことは多い。

その天々座氏だが、私はその雰囲気から警察OBか、あるいは自衛隊関係の人物なのかと考えていた。

ところが大会運営本部では警察関係者だけではなく、事務局に向向していた市や商工会のお偉方からも積極的に話しかけられるというVIP待遇であった。

たしかに氏は良くも悪くも目立つ風貌をしているが、私が関係者ならば積極的に話しかけたい人物ではない。ましてやそれがイケメンならば尚更だ。

ひよつとするとミリタリーオタクなだけかとも考えたが、喧嘩や迷子などのトラブル発生時の対応方法や、警察との折衝など、その訓練はあくまで実際の経験に即した実践的なものが多かった。そのちぐはぐさが私にとっては不可解であった。

「対処不可能な問題に、独力で対処しようとするな。むしろそれは害悪である」

「出来ないことは専門家に任せろ。彼らはそれで給料をもらっている」

「期待にこたえようとしなくていい。元々君たちにそれほど多くは期待していない」

「与えられた仕事だけを確実にこなせばいい。君達は君達が求められたことを全力でやれ。それ以上は望まない」

天々座氏の正体が何であれ、氏の考え方や仕事に対する姿勢は私にとっても領けるものが多かった。未成年の大学生が責任を取ろうということ自体がおこがましいのだ。

努力義務を放棄しろとは言わないがないが、必要以上にプレッシャーを抱え込む必要もない。そう私達に語る天々座氏は、何やら悪童の大将といった雰囲気があった。

めまぐるしく日々が過ぎ去り、本番である秋分の日がやってきた。ついに天々座式教育訓練を受けた私達の真価が試される日が来たのだ。私は柄にもなく高揚した気分のまま目を醒ました。

当日。朝一番で警備本部を訪問した私達に、最初に内容について説明した狩手^{かれで}さんが渡したのは、警備員の制服ではなく「警備巡回」の

刺繍が入った腕章であった。

ミリタリー映画同好会の10人はそろって不満げな声を上げたが、私などは「なるほど、本当に期待されていないのだな」と知って、返って気持ちが楽になったものだ。

「……10人？」

何度数えても同好会メンバーは10人しかない。

よく見れば私とペアを組むはずだった人物がどこにも見当たらないではないか。

どうしたことかと私が同好会の会長に尋ねたところ、なんと急性胃腸炎のために病院に運ばれたという衝撃の事実を伝えられた。季節はずれの生牡蠣でも食べたのかと考えたが、振り返ってみれば彼は天々座氏の訓練を楽しみながらも、胃の辺りを押さえていた記憶がある。

関係性に乏しい私と組まされたことが、彼にとってはストレスの原因だったのかもしれないが、そうなる私と私とで無神経極まりないようで、どうにも釈然としない。

それはともかく、さしあたりの問題は、誰が私とペアを組むかだ。同好会の会長は持ち回りで休憩役の会員と臨時のペアを組むことを提案したが、居合わせた天々座氏から「君達にとってはこれが初めての本番だ。精神的な疲労は予想以上に大きいだろう。休息をきちんと取らなければ支障をきたす」という至極もつともな理由で却下された。

私個人としても、いまさらよく知らない相手とペアを組むのはどうにも居心地が悪い。むしろ1人で気楽かもしれないと前向きに考えた私だったが、天々座氏は私の甘い考えを見透かしたかのように続けた。

「2人で予定していた仕事を1人で出来るかい？ 喧嘩や迷子が発生した時、君1人で万全の対処が出来るか？」

「……すみません。無理とはいいたくありませんが、自信がありません」

「結構、君は私の講義をちゃんと聞いてくれていたようだな」

天々座氏は右目をきらりと光らせ、不敵に笑う。

そこに私の必死の制止にもかかわらず、ランニング・マーチソングの替え歌を大声で歌わせた時と同じ気配を感じた私は、背筋に冷たいものが流れた。

「今から補充の人員を探すのも難しい。よって私が君のペアとなろう……うちの娘が以前お世話になったお礼もしたいしね」

あ、これ死んだわ（半年振り2回目）。

褒められもせず、苦にもされない。そういう人に私はなりたくない（その3）

天高く馬肥ゆる秋―秋の空は高く澄んでおり、家畜である馬も肥える季節を迎えたという意味である。

読書の秋、スポーツの秋、食欲の秋と、秋を感じる対象や事象は人それぞれだが、空気の重さが軽くなったかのような感覚を的確に表現したこの言葉は、多くの人の共感を得て、時候の挨拶の定型文として広く使われてきた。

花火大会当日である秋分の日当日。「木組みの家と石畳の街」は、朝から快晴に恵まれた。日中、体感気温と湿度はぐんぐんと上昇したが、午後になると、どんよりとした鉛のような熱気は幾分和らぎ、涼やかさを感じる風も吹き始めた。

暑くもなければ、夜風に首をすくめるほどの寒さには程遠い。澄んだ空気と適度な熱気に満ちた夜空は、まさに絶好の花火会場といえよう。

大学から大会事務局にボランティアという名前のただ働きとして差し出された私は、天々座氏と共に駐車場から会場に通じる通路の警備と誘導に従事していた。通路といっても、朱色の三角カラーコーンと黄色と黒のバーを組み合わせた簡素なものだ。

この街を訪問する観光客は、もっぱら鉄道を利用する事が多い。交通アクセスの利便性に加え、放し飼いになっている耳長のために、一般車両の交通は難しい。そのため観光パンフレットや旅行案内でも、「わざわざ自家用車で苦労するより、ゆつくりと鉄道のたびを楽しむのも、旅の余情のひとつである」と記載されていた。

不便を余情と言い換え、むしろ観光の長所であると開き直る。言葉とは便利なものである。

そのお陰か、この花火大会でも臨時駐車場を利用する観光客は多くはない。事務局が、学生ボランティアでも警備と管理が務まると判断した理由でもある。

「はい、止まらず焦らず、ゆっくりと2列のまま、そのまま前にお進み下さい」

私はビールケースをひっくり返した台の上に上り、小型拡声器を通じて開始時刻と注意事項をひたすら壊れた機械のように繰り返していた。天々座氏は赤色LEDの誘導棒を振りながら、私と言葉が重ならないように交互に同じように注意事項を繰り返す。

「小さいお子様からは、手を話さないようにお願い致します」

天々座氏の音量はそれほど大きくはないが、不思議と混雑の中でも聞き取りやすく、人々の耳目を集めるものがあつた。人の上に立ち、他人に命令することに慣れていなくても言えばよいのだろうか。拡声器を使わなければどうにもならない私とは、それこそ雲泥の差だ。ビールケースのぶんだけ私は高い場所にいたが、どちらが社会的にも生物学的にも優位なのかは、一目瞭然だっただろう。

「そのまま前をお願いします……香風の親父さんのところで働いているそうだね」

私が困つたのは、人の流れが途切れる毎に天々座氏が私に質問を繰り返す事だ。黙っているわけにもいかず、私はその度に拡声器のスイッチを切り替えて答えなければならなかった。

「……繰り返し申し上げます。次の花火打ち上げは午後6時半からです。こちらは第3会場への連絡経路となっております。どうか止まらず、そのまま前にお進み下さい……バイトですけどね……はい、止まらずに、ゆっくりとお願いします」

「あの頑固親父のところ、よく続くものだ……はい、そのまま前をお願いします……おや、どうかしたのかい。御嬢ちゃん？」

おそらく小学生低学年と思わしき黄色の浴衣を着た少女が、天々座氏を見上げながら首を傾げている。迷子事案かと私と同氏が顔を見合わせていると、緩いウェーブの掛かった濃い赤茶色の髪を頭の後ろで結わえている少女は、成長期特有の甲高い声を上げた。

「ねえおじちゃん。どうしておじちゃんはおめめをかくしてるの？」

少女の口から発せられた何の屈託もない素直な疑問に、同氏と少女を中心とした半径数メートルの周囲の空気が、液体窒素をぶちまけら

れた薔薇の花の如くに凍りつく。

私も一瞬思考が停止してしまっただが、自分の役割をなんとか思い出して、そのまま誘導を続けた。

「どうか止まらず、おしゆしゆみくだしやい」

……3回も囁んでしまった。

周囲の予想に反し、天々座氏は困ったように笑うと、キングコングが美女を見定めるかのように、その場にしゃがみこんだ。そして自分の腰の辺りをかろうじて越える程度の身長しかない少女と、視線を合わせた。

「うん？これかい？まあ色々あってね。ところで御嬢ちゃん。お名前は何？」

「めぐみ！」

「めぐみちゃんか。いい名前だね。ところでお母さんかお父さんはいるかな？」

氏の質問が終わるよりも前に、少女の背後数メートルの場所から、人を掻き分けるように、妙齢の御婦人が出てきた。服装や髪の色、そして風貌から判断して、少女の母親だろう。少女と天々座のやり取りを見ていたらしく、その顔から血の気が引いている。

「あ、お母さんですか？」

「は、ひゃい！」

天々座氏は立ち上がると、自分に近づく母親の顔を見ながら、口の両端を吊り上げた。相手の緊張を和らげるつもりだったのだろうか、母親の反応を見ると、その思惑が成功したようには見えない。

私は天々座氏の「笑顔」と思われる凶相に、昔に漫画で読んだ「獲物を前に牙を向く猛獣が笑顔の本質」云々という、長ったらしい説明文を思い出していた。

「……すいませんうちの子が大変失礼なことを申し上げまして」

「いやいや、お母さん。悪気があったわけではないことはわかっていますので、どうかお気になさらず……御嬢ちゃん。花火を楽しんでね」

「うん！わかった！」

バイバイと手を振る天々座氏に、少女は屈託なく手を振り、母親はもう一度、深々と頭を下げる。それに見とれていた私は、「いつからだね?」という同氏の質問に対する反応が遅れてしまった。

「えーつと……」

「そのまま前に、ゆつくりとお願いします……いつからタカヒロの親父さんのところでバイトをしているのかという質問だよ」

「……駐車場に戻られる方は、こちらの連絡経路はご利用出来ません。係員が案内いたしますので、ご希望の方は申し出てください……えーと、確か梅雨の中頃だったから、今年の6月だったと思います」

「それは新記録だな……何か問題が御座いましたら、お近くの係員に気軽に声をかけて下さい」

「お気軽に」という単語に、私は知らず顔が引きつってしまふ。

眼帯のイケメンという胡散臭い事この上ない同氏の周りには、不自然なまでの空間がぽっかりと出来ていた。私だって何も知らずに同氏と街中で出会っていたのなら、道を避けるか脇道に逸れていただろう。

「交代です」

「よく来てくれたーありがとうー」

「……お、おう?」

直後、交代で来たミリタリー映画同好会の2人と、私は手が千切れんばかりに握手を交わした。

*

警備詰所に戻る道中、私は天々座氏から様々な話を聞かされた。

もつともその9割は同氏の娘自慢であった。シストに同行した際の理世ちゃんの礼儀正しい対応を私が賞賛したことが、余計なスイツチを入れてしまったらしい。

地雷原を走り抜けたと喜んでいたら、トラバサミに引つかかったようなものである。

誕生日はバレンタインであり、母親譲りの美しい髪を持ち主で、利発で聡明。誰に対しても人見知りせず、学業優秀でスポーツ万能等々……とまあ、天々座理世ちゃんに関する事柄を事細かに、情緒とリズ

ムある浪曲のように聴かされ続けた。

産まれた時の体重に初めて話した言葉、お気に入りの人形の名前に直近の通信簿まで。今なら暗唱出来る自信がある。

その娘自慢は詰所に戻った後も続いた。同じく休憩時間であったメンバーは、天々座氏の相手を私に押し付けて、どこかに出かけてしまった。

あの映画オタクども、どうしてくれよう。

「……えー、つまり天々座さんはタカヒロさんとは」

「古い付き合いだな」

ようやく娘自慢が終わった同氏に、私は共通の知人であるという香風タカヒロさんのことを尋ねた。天々座さんは「腐れ縁だよ」と簡単に自分達の関係を評した。香風老人とも古い付き合いらしい。またタカヒロさんとは音楽や酒の好みが共通しており、今でも時折会う関係なのだとか。

「帰ってきたのなら、俺のところに顔を出せばいいとは思わないか？」
「何か用事があったのではないですか？」

「だとしてもだ。あいつは昔からスカしたところがあるやつだったからな。どうにも水臭いやつだよ」

天々座氏は古い友人に対する不満を口にしたが、その表情は陰相に似合わず柔らいものであった。聞いている限りでは、幼馴染というよりも、戦友とか悪友とか言う表現がシツクリ来る。

私はもう少し具体的な関係性についても尋ねてみたが、そのあたりは上手くはぐらかされてしまった。

*

遠くから花火の音と観客の歓声が、交互に秋の風に乗って流れてくる。時折草陰からは思い出したように虫が求愛の声を立て始めるが、花火の音がする度に、それは途切れた。

私と天々座氏は、詰所から駐車場へと向かって、並んで歩いていた。街頭以外に明かりはなく、ほんの数キロ先の祭りの喧騒が別世界のようだ。隣に歩くのが中年の子持ちの男性ではなく、妙齢の美女であればこれほど嬉しいことはないのだが。

それを正直に伝えると、天々座氏は「贅沢を言うな」と、見た目にふさわしい豪快な笑い声を上げた。

「さて、どこまで話したか」

「音楽の趣味についてでした」

「そうそう。俺とタカヒロはジャズバンドを組んでいたこともあるんだ」

「あー、あー……あー………はい」

「……なんだ、その反応は」

「いや、その」

いかにも似合いそうだなと思っただけです。他意はありません。はい。

この見た目でジャズが趣味だとは、そのまんまというかなんというか……日本人なのに日本人らしくらぬ趣味が似合うというと、語弊があるか。ジャズに限らず洋楽趣味の人間は、どうにもスカした人間が多いのではないかという、何の根拠もない大いなる偏見の持ち主である私からしても、タカヒロさんや天々座氏の場合は、妙に似合っていた。

天々座氏曰く、一口にジャズを演奏することを目的としたバンドといても多種多様であり、少人数の編成によるバンドをジャズ・コンボと呼ぶという。天々座氏とタカヒロさんが参加していたのがこれにあたる。

タカヒロさんはバンドの中でアルトサククス、天々座氏はテナーサククスを担当していたそう。

サククスといえはアルトであり、テナーはどちらかというところ2番手という印象が根強い。天々座氏はそれが酷く不満であり、たびたび演奏中に張り合ったということだ。

「曲の演奏中に張り合うんですか？それは何といいますか」

「若気の至りとはいえ、他のメンバーには悪いことをしたと思ってる……もつとも、あいつの嫁さんは、そういう罪のない競争を単純に喜ぶタイプだった」

「どなたの奥さんですか？」

「君はタカヒロの細君について、何か聞かされているかね？」

天々座氏は親友の家庭の事情に関することだけに、自分の一存で話すことには慎重であった。私はタカヒロさんの奥さんが死去していることについて香風老人から聞き及んでいること、そして今日は香風家が揃って墓参りに出かけていることを伝えた。

それを聞いた天々座氏は「ならば話しても問題ないだろう」とつぶやくと、言葉を選びながら話し始めた。

香風サキ。それが亡くなったタカヒロさんの奥さんであり、智乃ちゃんのお母さんであった女性の名前だという。

天々座氏曰く、サキさんは娘の智乃ちゃんと同じく、綺麗な青色掛かった銀髪を持ち主だったそう。かなりの美人だったというが、それは智乃ちゃんをみれば想像がつく。一般的に娘は父親に、息子は母親に風貌が似るというが、智乃ちゃんの場合は母親似なのだろう。

「歌が上手でな。それも半端な上手さじゃないぞ。下手なジャズバンドは演奏で発音の危うさを誤魔化したりするが、あの娘の場合は伴奏もなしに、独唱だけで観客の拍手喝采を掻つ攫うことが出来たんだ」「それはすごいですね」

「たしか喉自慢大会に出場した時の演奏を記録したテープがあったと思うが……とにかく闊達な性格をしていてな。その場にいるだけで周囲の心を楽しくさせ、湧き立たせることが出来る人だった。タカヒロの奴、いつも彼女の横で取り済ました顔をしていたが、実際にはベタ惚れだね。その癖かっこつけだから……」

周囲はやきもきさせられたものだと、天々座氏は懐かしそうに右目を細めて語った。今でも当時の時間と記憶を大切にしていることは、その表情だけではなく声からも伝わった。私は先ほどの女子に対する対応も含めて、目の前の人物に対する評価を改めた。

天々座氏にあえて反論するわけではないが、私には疑問が残った。智乃ちゃんの大人びた佇まいや雰囲気はタカヒロさん似だとしても、天々座氏の語る活発でいたずら好きな香風サキさんと、人見知りな智乃ちゃんのイメージが、どうにも結びつかなかったからだ。

今から考えれば、酷く失礼な質問だったかもしれない。私はそのつ

もりはなかったのだが、それは子が親に似てないのではないかという意味にも聞こえるものであった。

しかし天々座氏は苦笑しながらも、それを咎めもせずに応えた。

「君も子供が出来たらわかるさ。子供は親の映し鏡だ。良い所も嫌な所も、これでもかという位に似てくるものだからな」

「理世ちゃんもですか？」

「そうだな。あの娘もだんだんと俺に似てきた……今はそう見えないかもしれないが、智乃ちゃんは間違いなくサキちゃんの娘で、あのタカヒロの娘だ。だから君があれこれと心配しなくても大丈夫だよ」

「いや、別に心配していたわけでは」

「そうかな？ 私には君が智乃ちゃんの兄貴を気取っているのが可笑しくてね」

口に手を当ててクスクスと笑う天々座氏に私は閉口した。思いつくままに何か反論しようとしたが、その前に私の胸ポケットに入れた携帯が震えていることに気が付いた。

私は天々座氏に断ってから、それを取り出して開いた。

「今時、ガラケーか」

「ガラホーですよ。中身的にはかわりませんし、どうにもタッチパネルは操作が慣れなくて」

私は早口で言い訳をすると、新着受信メールの受信ボタンを押した。

携帯ショップからのお知らせに続いて「送信者：リンリン」の文字。

真手君からのメールである。subには「注目！」の文字。

そういえば花火大会に行くと言っていたな……

「……パンダの友達でもいるのかね」

「覗かないで下さいよ」

私は悪態をつきながら、画面を開いた。

その瞬間、色あせて灰色だった世界が、突如として極彩色の曼荼羅を取り戻した。

手のひらサイズの携帯の画面が、一枚の自撮り写真により、崇高にして聖なるアイコンへと変貌していた。

私は拝み臥したくなるのを必死に我慢して、画面に見入った。

それはどこかの休憩所で撮影したと思わしき、1枚の何の変哲もない、そして撮影されるまでは、この地上のどこにも存在していなかった自撮り写真であった。

在り来たりの淡い水色や白をベースにした浴衣を想像していたのだが、青山女史が着用していた浴衣は漆黒の生地に、蔦から伸びた一輪の赤い朝顔が胸元にあしらわれていた。帯は向日葵のごとき黄色の明彩色。その絹糸のような豊かで輝く髪は、見事に結び上げられていた。

唯一残念だったのは、正面からだとうなじが見えないことだが、それですら私には、意図的に完璧さを欠くことで、対象の人物伸びを引き立てんとする神の采配のように感じた。

気恥ずかしそうに、それでいてしつかりとこちらを見ている青山女史の横で、真手君はピンク色のアツパラパーな、いかにも在り来たりの平凡な浴衣を着て、ピースサインをしている。鼻の穴がわずかに膨らみ、頬が高揚していることから、興奮していることが伺える。

どこまでも色気というものと無縁な娘である。

この残念な娘が写真を送りつけてきたのは、私に対する優越感を誇示するためだろう。底の浅い思惑と無神経なドヤ顔が鼻についたが、この写真を前にすれば、そのようなことは些細なことである。

「……尊い」

「何を言っているんだ君は」

天々座氏は私に真顔でツツコミを入れた。